

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

令和7（2025）年度

「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」

スタディツアー（カンボジア、ブータン）実施報告書

2026年1月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

## はじめに

本海外実習は、2011年度に学生による実習（海外スタディツアー）として開始し、2013年度から通年の単位認定実習科目「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」として実施して参りました。この科目は、専攻・学年を問わず開発途上国の社会・政治・経済に関わる問題や国際協力に関心を有する学生が、事前学習、現地調査、事後学習を実施し、都市と農村の貧困問題、教育、保健、ジェンダー等に関するテーマについて、文献だけでは得ることのできない知識や経験を得、理解を深めることを目的としています。過去13年間に、東ティモール、ベトナム、フィリピン、バングラデシュ、ネパール、カンボジア、ブータンの7ヶ国でフィールドスタディを行いました（2020年度・2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け中止）。

2025年度は、5名の学生が8月にカンボジア、2名の学生が9月にブータンで現地調査を行いました。現地では、JICA（独立行政法人国際協力機構）の事務所、現地で活動するNGO、ボランティア、農家、学校、企業などを訪れ、関係者の方々からお話を伺うとともに活動を視察しました。

学生は、訪問国の状況を理解し自らの調査課題を設定するため、現地調査に先立ち事前学習（6～7月）を行いました。また、帰国後の事後学習を経て11月の微音祭（学園祭）でその成果を発表し、調査報告書を作成しました。

本報告書は、本科目の履修生による調査報告書や発表の内容をまとめたものです。事前学習、現地調査、事後学習を経て、学生が訪問国の社会とその課題を理解し、自ら取り上げたテーマについて考察を深めてゆく様子が記録されています。本科目が、学生の今後の学習・研究や、グローバル社会における多様性への理解と共生のあり方について考えを深める契機となることを期待いたします。

末筆ながら、事前学習でご高話頂いたゲスト講師の皆様、並びに、現地での本学学生の受入れに快くご協力いただくとともに、見学・インタビュー等にご支援・ご協力を頂いた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

2026年1月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

センター長 由良 敬



グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和 7（2025）年度  
「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（カンボジア、ブータン）実施報告書  
目次

はじめに

1. 活動の概要 .....	1
(1) 科目概要 .....	3
(2) 2025 年度の内容 .....	3
2. 学生報告 .....	5
2-1 カンボジア .....	7
(1) カンボジア基礎情報 .....	7
(2) 参加者名簿 .....	8
(3) 現地調査日程 .....	9
(4) 調査報告書 .....	9
(5) 訪問記録 .....	34
(6) 写真 .....	61
2-2 ブータン .....	63
(1) ブータン基礎情報 .....	63
(2) 参加者名簿 .....	64
(3) 現地調査日程 .....	64
(4) 調査報告書 .....	65
(5) 訪問記録 .....	80
(6) 写真 .....	101
3. 事後学習成果 .....	103
(1) 微音祭写真 .....	105
(2) 微音祭常設展示ポスター .....	106
(3) 大学ウェブサイトでの報告 .....	113



4. 資料.....	123
(1) 募集要項.....	125
(2) 全体スケジュール.....	127

## 1. 活動の概要



## (1) 科目概要

### 【主題】

本科目は、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGs に関する理解を深めることを目的に実施する実習科目である。

履修生は、開発途上国における研究・国際協力の実績を有する担当教員の指導のもとで、①事前学習（6～7月）、②現地調査（8月もしくは9月、8日間程度）、③事後学習（10～11月）を行い、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深める。

具体的には、①事前学習において、資料の講読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。②現地調査では、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する（国際共生社会実現へのヒントを見つける）。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、微音祭での発表を通してその成果を外部へ発信する。

### 【到達目標】

- 漠然とした興味関心・問題意識を、学術的な研究課題として組み立てまとめる力を身につける。
- 現地調査の計画及び実践を通して、調査技法を身につける。
- 現地調査（特にインタビューの実践）を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させる。
- プログラムを通して得た学びを、さらなる学習・研究や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア等）に繋げる。

## (2) 2025 年度の内容

今年度は訪問国をカンボジア王国（Kingdom of Cambodia、以下カンボジア）とブータン王国（Kingdom of Bhutan、以下ブータン）とし、カンボジアチームとブータンチームの2チーム体制で実施した。

6月よりオリエンテーション、事前学習、自主活動、海外安全講習会（出発直前打合せ）を行い、2025年8月21日～29日（計9日間、現地滞在7泊8日）の日程で履修生5名がカンボジア現地調査を、9月15日～24日（計10日間、現地滞在7泊8日）の日程で履修生2名がブータン現地調査を行った。履修生は「カンボジアの社会とジェンダーの関わり

りについて」、「カンボジア国民の対外支援に対する意識と評価」、「カンボジアの高等教育アクセスについて：出身地域とジェンダーに注目して」、「カンボジアにおける主権者教育の実態」、「カンボジアにおける結婚への意識」／「ブータンの民族衣装をめぐる産業とアイデンティティ」、「ブータンの若者の人生観と職業選択についての調査」といった、各自が設定した研究課題遂行のため、関連機関の訪問や現地の人々へのインタビューを実施した。

## 2. 学生報告



## 2-1 カンボジア

### (1) カンボジア基礎情報

※外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html> (2025/11/05 最終閲覧) 他から抜粋、加筆

面積	約 18 万 1,035 平方キロメートル (日本の約半分)
人口	約 1700 万人 (2024 年 : 国連人口基金)
首都	プノンペン
民族	人口の約 90%がカンボジア人 (クメール人) とされている
言語	クメール語
宗教	仏教 (一部少数民族はイスラム教)
政体	立憲君主制
主要産業	工業、サービス業、農業 (2024 年 ADB 資料)
名目 GDP	471 億米ドル (2024 年 : IMF 推定値)
一人当たり GDP	2,473 米ドル (2024 年 : IMF 推定値)
実質 GDP 成長率	6.0% (2024 年 : IMF 資料)
経済概況	<p>カンボジアは、メコン南部経済回廊の中核を成しており、同国の発展は ASEAN 経済共同体全体の安定と繁栄にとっても極めて重要である。近年、高い経済成長を背景に、日本との経済的な結びつきも高まり、日本企業の投資先として重要性が増している。カンボジアは、内戦終結後、過去 25 年以上に亘り順調な経済成長と貧困削減を達成してきており、2016 年 7 月には低中所得国入りを果たし、2029 年には後発開発途上国 (LDC) 卒業も期待されている。しかしながら、カンボジア政府が目標としている 2030 年までの高中所得国入りを達成するためには、所得水準に鑑みると持続的に高い経済成長を維持することが不可欠であり、LDC 卒業後は、LDC として受けてきた優遇措置が終了することにも留意する必要がある。また、都市化に伴う諸問題、地方との格差拡大、気候変動、環境問題やデジタル化などの新たな課題にも直面している。カンボジア政府は四辺形戦略 (23 年 8 月に五角形戦略に改定) を始め、「国家戦略 開発計画」(NSDP)、「産業開発政策」(IDP) などの開発目標を策定し、諸課題の克服に取り組んでいる。</p>
略史	<p>1953 年 カンボジア王国としてフランスから独立。</p> <p>1970 年 ロン・ノル反中親米派、クーデターによりシハヌーク政権打倒。王制を廃しクメール共和制に移行。</p> <p>親中共産勢力クメール・ルージュ (KR) との間で内戦。</p> <p>1975 年 KR が内戦に勝利し、民主カンボジア (ポル・ポト) 政権を樹立。同政権下で大量の自国民虐殺。</p> <p>1979 年 ベトナム軍進攻で KR 敗走、親ベトナムの「カンプチア人</p>



	<p>民共和国」(プノンペン(ヘン・サムリン)政権)擁立。以降、プノンペン政権とタイ国境地帯拠点の民主カンボジア三派連合(KRの民主カンボジアに王党(シハヌーク)派・共和(ソン・サン)派が合体)の内戦。</p> <p>1991年 パリ和平協定。</p> <p>1992年 国連カンボジア暫定機構(UNTAC)活動開始(1992～93年、日本初の国連PKO参加)。</p> <p>1993年 UNTAC監視下で制憲議会選挙、王党派フンシンペック党勝利。新憲法で王制復活。 ラナリット第一首相(フンシンペック党)、フン・セン第二首相(人民党:旧プノンペン政権)の2人首相制連立政権。</p> <p>1997年 首都プノンペンで両首相陣営武力衝突。 ラナリット第一首相失脚。</p> <p>1998年 第二回国民議会選挙。第一次フン・セン首班連立政権。</p> <p>1999年 上院新設(二院制へ移行)。ASEAN加盟。</p> <p>2003年 第三回国民議会選挙。</p> <p>2004年 第二次フン・セン首班連立政権発足。 シハヌーク国王引退、シハモニ新国王即位。 WTO加盟 ASEM参加決定。</p> <p>2006年 第一回上院議員選挙</p> <p>2008年 第四回国民議会選挙。第三次フン・セン首班連立政権発足。</p> <p>2012年 第二回上院選挙。ASEAN議長国。(二回目)</p> <p>2013年 第五回国民議会選挙。フン・セン首相首班政権発足。</p> <p>2018年2月 第三回上院選挙。</p> <p>2018年7月 第六回国民議会選挙。フン・セン首相首班政権発足。</p> <p>2023年8月 第七回国民議会選挙。フン・マネット首相首班政権発足。</p> <p>2024年2月 第四回上院選挙。</p>
--	--

## (2) 参加者名簿

氏名	学年	学部・学科・専攻(コース・講座)
石井 花	1年	文教育学部 言語文化学科
奥 みなみ	2年	生活科学部 人間生活学科 生活社会科学講座
亀岡 千愛	2年	生活科学部 人間生活学科 生活社会科学講座
松尾 ひなの	4年	文教育学部 人間社会科学科 教育科学コース
丹野 里莉	4年	生活科学部 人間生活学科 生活社会科学講座
引率者		
宮原 千絵	特任准教授	グローバル協力センター(副センター長)
駒田 千晶	アカデミック アシスタント	グローバル協力センター

### (3) 現地調査日程

	月日	主な活動内容	宿泊地
0	8月21日(木)	・ 羽田空港集合	—
1	22日(金)	・ 羽田空港出発 ・ バンコク・スワンナプーム空港到着 ・ プノンペン空港到着 ・ 市内私立幼稚園視察 ・ プレア・ノロドム小学校視察及びインタビュー ・ 併設デジタル・ラーニングセンター視察及びインタビュー ・ Wonderfy(株) カンボジア法人代表等との懇談	プノンペン
2	23日(土)	・ トゥール・スレン虐殺博物館見学 ・ シェムリアップに移動 ・ 伝統芸能(アプサラ・ダンス) 見学 ・ 市場調査	シェムリアップ
3	24日(日)	・ アンコール・ワット寺院、タ・プローム寺院見学 ・ バッタバンバンに移動	バッタンバン
4	25日(月)	・ テラ・ルネッサンス活動訪問、インタビュー	バッタンバン
5	26日(火)	・ シャンティ国際ボランティア会バッタンバン事務所訪問、活動概要説明、インタビュー ・ プレクノーレン幼稚園(公立) 訪問、園長及びスタッフインタビュー ・ 幼稚園児童の家庭訪問、保護者へのインタビュー	バッタンバン
6	27日(水)	・ プノンペンに移動 ・ JICA ボランティア訪問(国立体育教員養成校)、インタビュー ・ 市場調査	プノンペン
7	28日(木)	・ CJCC 活動訪問、日本語学習者インタビュー ・ 市場調査 ・ JICA カンボジア事務所訪問、ナショナルスタッフインタビュー	プノンペン
8	29日(金)	・ プノンペン空港出発 ・ バンコク・スワンナプーム空港到着 ・ バンコク出発 ・ 羽田空港着	

### (4) 調査報告書

氏名	タイトル
石井 花	カンボジアの社会とジェンダーの関わりについて
奥 みなみ	カンボジア国民の対外支援に対する意識と評価
亀岡 千愛	カンボジアの高等教育アクセスについて：出身地域とジェンダーに注目して
松尾 ひなの	カンボジアにおける主権者教育の実態
丹野 里莉	カンボジアにおける結婚への意識

## カンボジアの社会とジェンダーの関わりについて

文教育学部言語文化学科 1年

石井 花

### 1. 調査テーマ

本調査ではカンボジアの社会とジェンダーの関わりを明らかにすることを目的とした。2024年度のジェンダーギャップ指数において、日本が0.663であるのに対しカンボジアは0.685でありカンボジアの方がより良好な数値を示している点に着目し、その背景要因を検討した。この調査では、同指数の内訳や社会構造、文化的要因を分析し、カンボジアにおけるジェンダー平等の実態と課題を明らかにすることを中心的テーマとして設定した。

### 2. 調査設問

本調査では、ジェンダーギャップ指数の観点を踏まえ、①家庭内におけるジェンダー、②教育におけるジェンダー、③経済におけるジェンダー、④ジェンダー観の四つの側面から設問を設定した。これにより、社会の中で男女間にどのような差異や不平等が存在しているのかを多角的に把握することを目的とした。

まず、①家庭内におけるジェンダーでは、家族の中で男女それぞれが担う役割分担がどのように認識されているかを明らかにするため、複数の設問を設定した。具体的には、家事や育児の負担がどのように分配されているのか、また家庭内の重要な意思決定を誰が主導しているのかを問う内容とした。さらに、回答者自身が家庭生活の中でジェンダーギャップを感じる瞬間があるかどうか、共働きの有無がその意識に影響しているかといった点も確認することで、家庭領域における性別役割意識の実態を明らかにしようとした。

次に、②教育におけるジェンダーでは、男女間で高等教育へのアクセスに差が存在するかどうかを中心的な問いに設定した。加えて、子どもを持つ回答者に対し、子どもの性別にかかわらず進学を望むかどうかを尋ねることで、教育におけるジェンダー平等に対する意識を検討した。これらの設問により、教育機会における不平等や、その背景にある社会的価値観を読み取ることを意図している。

③経済のジェンダーに関しては、労働市場における男女格差の実態を探るため、男女で就ける職業に違いがあるか、同じ職種であっても給与水準に差が生じていないかを問う設問を設けた。また、組織における管理職の男女比を尋ねることで、昇進に関する男女差の有無や意思決定層におけるジェンダー構造を評価した。これらの質問を通じて、経済活動における性別格差がどの程度存在しているかを実態として把握することを目的とした。

最後に、④ジェンダー観については、日常生活の中でどのような場面でジェンダーギャップを感じる瞬間はあるかを問う設問を設定した。また、過去と比べて社会全体のジェ

ンダー意識に変化が見られるかどうか、さらに女性のための支援制度や社会的サポートが十分であると感じるかについても回答を求めた。これにより、個人が持つジェンダーに関する認識や、それが社会の変化とどのように関係しているのかを明らかにしようとした。

以上のように、本調査はジェンダーに関する多面的な現状把握を目指しており、数値的指標だけでは捉えにくい人々の意識や経験を浮かび上がらせることを目的としている。

### 3. 調査結果

まず、①家庭内のジェンダーに関する設問への回答についてである。家事労働の分担状況を問う設問に対しては、「家事・育児は主に女性、外での収入労働は男性」という従来型の役割分担を支持する意見が多く得られた。特に、外で働いていない女性の場合、家事や育児をほぼすべて女性側が担っているという回答が目立ち、家庭内労働の負担が依然として女性に偏っている現状があることが分かった。「同居する祖母が母親の家事・育児を支援している」という意見もあった。また、「経済的に裕福な家庭は家政婦さんを雇うこともある」という意見もあった。

一方で、こうした伝統的な役割分担が根強く残る中でも変化を感じさせる回答も見られた。例えば、「夫が積極的に家事を手伝うようになってきており、夫婦で協力する文化が徐々に広がっている」との意見があり、「これは自らの母親が一人で家事を担う様子を見て育った男性らが自分の妻は手伝おうとした」とも述べられていた。

家庭内の意思決定者を問う設問では、「父親が一家の長であるため、重要な決定は父親が行う」という回答がみられた。ただし、これは単純に家父長的な価値観を反映しているのではなく、カンボジア社会に根付く仏教文化における上下関係や年長者を敬う価値観が背景にあると考えられる。加えて、「母親と父親が話し合って決める」という回答も見られ、家庭によってそれぞれ異なった意思決定がなされていることが分かった。

家庭内でジェンダーギャップを感じるかという設問に対しては、「料理や掃除などの家事は女性が担当ことが多い」という回答がある一方で、「特に大きなジェンダーギャップは感じていない」とする意見も多く存在した。

最後に、共働きの実態については、「父の収入だけでは家計が厳しいため、母親が働き始めることがある」という回答があった一方で、「共働きはまだ一般的ではない」との意見もみられた。これらの回答から、経済状況によって女性の就労が選択される場合があるものの、共働きが広く定着しているわけではないという現状であると推測される。

以上の結果から、カンボジアにおける家庭内のジェンダーは、伝統的な役割意識が強く残る一方で、近年徐々に家事の分担や共働きの広まりによってその役割意識が変わりつつあるといえる。

次に②教育におけるジェンダーについての設問では、男女間では高等教育へのアクセスには差がないという意見が回答した全員から得られた。そして、子どもを持つ親も皆子ど

もを男女関係なく高校・大学の高等教育に進ませたいと回答していた。

このインタビューに付随して述べられていたことは、高等教育へのアクセスは性別ではなく家庭の経済状況に大きく左右されているということだ。実際に長男・長女は経済的に大学への進学を諦め彼らが働き家庭にお金を入れることによって、彼らよりも下の兄弟を大学へ進学させるというケースもあるようだ。さらに、経済的事情による中退も多くみられる。また、都心と地方の格差についても言及されており、地方は都心に比べ大学が少なく、大学進学のための塾なども少ないため地方出身者は都心の子どもたちに比べ高等教育へのアクセスが難しいといった現状も見られた。

以上の結果から、教育という観点において意識的な面・実態ともにジェンダーギャップは見られず、高等教育へのアクセスは家庭の経済状況や住んでいる地域に左右されていることが分かった。

次に③経済のジェンダーの設問に対する回答である。

経済における男女差について尋ねたところ、まず「男女で就ける職業に差があるか」という設問に対しては、保育士など一部の職業を除き、男女で職業選択の違いはほとんどないという回答が得られた。また、「女性が警察官になることもできる」といった具体例も示され、職業上の制限はあまり存在しないという認識が確認された。

次に、男女間の賃金格差については、「男女で給料の差はない」という回答が得られた。さらに、管理職に関する設問でも、男女の管理職割合は同程度であるという回答が示され、昇進機会においても大きな格差は感じられていないことが分かった。

しかし、これらの回答はあくまで個人の認識に基づくものであり、実際の社会統計とは異なる可能性がある。それでも、回答者が「差はない」と感じていることは、身近な環境においてジェンダー平等が一定程度進んでいると受け止められていることを示しているといえる。

ここで社会統計上はどのようなになっているのかを加えて調査した。

UNDP *Cambodia, Cambodia's Gender Wage Gap, 2021*・UN *Cambodia, Gender Deep Dive – Cambodia, 2022*・Open Development Cambodia, *Women in Development, 2021*によると、カンボジアにおける民間企業の間・上級管理職では、女性の割合は約 17%である。また、全国規模で管理職に就く女性は全体の約 2%と報告されている。

賃金面では、同等の職務に従事する男女間で、女性の平均賃金は男性より約 19%低い。教育や経験年数、職種などの差で一部が説明されるものの、残りは構造的要因によると分析されている。業種別では、建設業では男性の賃金が女性より約 29%高く、貿易では約 25%高い、農業でも約 18%高いと報告されている。

このように実際の認識と統計上の数値は相違があることが分かる。前述した「共働きが一般的ではない」という意見から推察するに、女性の労働者がそもそも少ないことがこのような相違の原因であるとも考えられる。

最後に④ジェンダー観についての回答である。日常でジェンダーギャップを感じる瞬間はあるかという問いに対しては、ジェンダーギャップを感じないという回答が圧倒的に多く得られた。また、そもそも「ジェンダーギャップ」という言葉が通じないことも多かった。逆にジェンダーギャップを感じると回答した中には「IT 産業は男性がつくことが多い」という意見や、「女性の方が多く家事労働を担っている」という意見、「会社によるが、会社のトップリーダーは男性が多い」「男性の方がハイステータスで女性はアシスタントにつくこともある」といった意見があげられた。

さらに、ジェンダーギャップについて過去との違いに関する問いに対して、「昔はジェンダーギャップがあったが今はない」という意見が複数得られた。その変化のきっかけを聞いたところ、「国際的にジェンダー平等の動きが高まっているから」や「共働きが広がったから」といった意見が得られた。

また、女性をサポートする社会制度についての問いでは、「不足している」という回答が多く得られた。特に出産については「公立病院はお金がかからないが信用できない。私立病院は信用できるが費用がかかる」といった意見があった。また、産後の公的な支援としては 90 日の育休と、その間は普段の 50%の給料が支払われるといった実態があるがこれに関しても「支援は足りていない」とする意見が多くみられた。また、その中でも「支援は十分ではないが負担は減らせているのではないか」という意見もあった。

以上が④ジェンダー観に対する問いの回答である。

#### 4. 考察

本調査から、カンボジア社会では伝統的な性別役割が依然残る一方で、意識面ではジェンダー平等が比較的強く受け入れられている側面があることが明らかになった。家事・育児は女性に偏る傾向が続いているが、若い世代を中心に役割分担を見直す動きが進みつつあり、「夫婦で協力するべき」という認識が広がっている。これは、依然として家事負担が女性に集中しやすい日本と比較すると、意識の面ではより平等に向かう姿勢がみられる点が特徴的である。

教育に関しては、回答者は全員「男女の進学機会に差はない」と認識しており、親世代も子どもを性別に関係なく高校・大学へ進学させたいと考えていた。日本でも男女平等の教育機会は制度として保障されているが、依然として文系・理系の選択や大学への進学などで性別による偏りが残っている点を踏まえると、カンボジアの親の「子どもの教育は性別に関係なく同等に受けさせる」という意識はより明確であると言える。

経済分野では、回答者の認識では男女差は小さいとされていたが、統計上では管理職割合や賃金に明確な格差がある。認識と現実のずれは、女性の就労率の低さや非公式労働の多さに起因しているのではないかと考察する。意識の面では日本よりもジェンダー平等が進んでいると考えられる。

また、ジェンダーギャップという概念が日常的には十分に共有されておらず、特に出産・育児支援については「制度があっても十分ではない」という意見が多かった。公的な育児休業制度が整備されている日本と比べると、制度面の課題は大きいですが、家族や地域での助け合いが機能している面もみられる。

総じて、カンボジアのジェンダー状況は、制度面では遅れがある一方、家庭内や教育に関する意識の面では日本よりも平等志向が強く、伝統的価値観と新しい平等意識が併存する移行期にあるといえる。

## 5. 調査に参加した感想

今回の調査では、カンボジアでさまざまな背景をもつ人々と直接話す機会を得て、社会統計やデータ、文献だけでは分からないリアルな暮らしや価値観を知ることができた点が最も大きな収穫だった。特に、家庭や教育に関する話題では、多くの人が「男女は平等であるべき」という考えを自然に持っており、子どもを性別に関係なく大学へ進学させたいと語る姿が印象的だった。家事分担や進路選択において固定的なイメージが残りやすい日本と比べると、意識の面でカンボジアの方が日本と比べてジェンダー平等が進んでいると感じる場面も多かった。

一方で、出産・育児支援、労働環境、産後の制度などの制度的基盤についてはまだ発展途上で、日本のほうがより整備が進んでいる部分が多いことも実感した。こうした「意識は進んでいるが制度は追いついていない」というギャップは、まさに現地声を直接聞いたからこそ理解できた点であり、数字を読むだけでは得られない学びだった。今回の調査を通してカンボジアの社会とジェンダーのみならず、日本のジェンダー問題についても改めて見つめなおすきっかけとなった。

## 6. 参考文献

UNDEP Cambodia, Gender Deep Drive-Cambodia, 2022

UN Cambodia, Gender Deep Dive – Cambodia, 2022

Open Development Cambodia, Women in Development, 2021

## カンボジア国民の対外支援に対する意識と評価

生活科学部人間生活学科 2年

奥 みなみ

### 1. 調査テーマ

日本は先進国に位置付けられ、これまでに ODA や JICA、その他民間団体を通して多くの国に援助を行ってきた。特にカンボジアに対しては PKO 派遣や学校建設など手厚い支援を行っている。私はこれまで、授業などで JICA の方の講義を聞く機会が多く、その経験談から支援の重要性や日本が他国に果たす役割は十分学習してきた。しかし、私は“支援される側”の声を聞いたことは一度もない。日本が行なっている支援は本当に必要とされているのか、また、現地の人はそもそも他国に対して「支援をしてほしい」「助けてほしい」と思っているのか、また、自国の社会や教育制度に他国が介入することに関してどう思っているのかという点に強く興味を持ち、今回の課題として選定した。また、現地の方へのインタビューから、これからの日本の対外支援のあり方についても考えていきたい。

### 2. 調査設問

① 日本の支援についてどのくらい知っているか

- ・ 支援の内容
- ・ 支援団体
- ・ 認知度

② カンボジアに対する対外支援について

- ・ 支援国
- ・ 支援内容
- ・ 十分であるか
- ・ 今後も続けるべきか
- ・ 認知度

③ 日本からの支援と他国からの支援の違い

- ・ 内容
- ・ 資金

④ どのような対外支援が必要か

- ・ 支援内容
- ・ 支援を必要とする層

### 3. 調査結果



① 日本の支援について

・支援の内容

教育に力を入れているイメージ。特に幼児教育。

＜体育教員養成学校（JOCV）＞

体育教員の養成

体育などに関する情報が不正確だったり、専門的な知識がないため、カリキュラムが形骸化している点も見られる。（青年海外協力隊現地スタッフ）

＜CJCC＞

ビジネス、日本、文化教育の3つの柱をもとに日本とカンボジアをつなぐプラットフォームづくりに取り組む。ビジネス分野では日本起業とのマッチング、文化教育部門は七夕などの日本のイベントを通じた交流を行っている。最近では起業家・経営者の育成に力を入れている。

・支援団体

JICA や日本政府、民間企業や NPO などの団体が主な支援団体として知られている。

・認知度

日本の支援について NGO スタッフなどは知っているが、一般的にはあまり知られていないと思う。（シャンティ国際ボランティア会現地スタッフ）

カンボジア国民の 50% ほどは日本の支援について知っている。しかし内容などの詳細な部分についてはあまり知らない。（JICA カンボジア事務所現地スタッフ）

② カンボジアに対する対外支援について

・支援国

日本、中国、アメリカ、フランス、韓国、ドイツ、スイス、ノルウェー、イギリスなど多くの国がカンボジアを支援している。

その中でも有名なのはアメリカ、日本、中国。

・支援内容

＜教育について＞

以前は USAID が教育に関する支援を行っていたが、今は韓国からの支援も増えている。

・十分であるか

教育法などの技術を教授するのはまだ不十分。（プレクノーレン幼稚園校長）

教育に関する海外の支援は不十分である。開発中のため、まだまだ支援は不十分。（シャンティ国際ボランティア会現地スタッフ）

海外やカンボジア政府は首都のプノンペンばかり支援するため、地方への支援が足りないと感じる。（CJCC 学生）

- ・認知度

海外からの支援については知らない（家庭訪問先）

- ・今後も続けるべきか

今後も対外支援を受けていきたい。教育現場では特に教授法などの技術面に関する支援が必要。現在はカンボジアも少しずつ発展しているため、少しずつ減らしてもいいかもしれない。（プレクノーレン幼稚園校長）

### ③ 日本からの支援と他国からの支援の違い

- ・支援内容

＜韓国との比較＞

韓国は市民レベルでの支援だが、日本は政府を通じた大きな支援が特徴（シャンティ国際ボランティア会現地スタッフ）

KOICA は資金を多く持っているイメージ（JOCV 加藤さん）

- ・資金

日本は NGO からの支援が多く、無償資金協力が多く（JICA カンボジア事務所）

### ④ どのような対外支援が必要か

- ・支援内容

農業についての技術支援や教授法などの教育に関する技術支援（プレクノーレン幼稚園校長）

高等教育への支援、ヘルスケアに関する支援、食糧生産への支援、インフラの整備など（テラ・ルネッサンス現地スタッフ）

奨学金の支援→海外留学の機会創出につながる（家庭訪問先）

今後はコンピュータテクノロジーが重要であるため、ICT に関する支援も必要。（シャンティ国際ボランティア会現地スタッフ）

- ・支援を必要とする層

カンボジアは未だ発展途上国のためすべての層に対する支援は必要不可欠。（シャンティ国際ボランティア会現地スタッフ）

## 4. 考察

### ① 対外支援に対する意識

インタビューの結果、多くの人が「今後もカンボジアへの支援を続けてほしい」「今後もカンボジアへの支援は必要不可欠だ」と考えていることがわかった。また、対外支援に伴う他国の介入についても否定的な意見はみられなかった。以上のことから、日本を含む海外からの対外支援に関して肯定的な意識を持っていることがわかる。しかし一方で地方に

住む人や NGO 職員でない人は「対外支援について詳しく知らない」と回答した。つまり、支援の現場に関わりを持たない人には、対外支援に対する意識というものがそもそも存在しないのではないかと考えた。カンボジアでは都市部と農村での格差の広がりが問題となっている。それと同じように対外支援の支援対象地域も都市部に偏り、都市と農村で支援を受ける上での格差が生じていると考えられる。よって、今回のインタビューでは大多数が対外支援に対して好意的態度を示したが、農村地域でのインタビューでは異なる回答がみられる可能性が大いに考えられる。

## ② 対外支援に対する評価

インタビュー調査や施設見学から、日本の支援事業がカンボジアの子どもたちの学びや遊びの発達につながっていることを実感した。また、日本の支援に関しては政府が行う大規模な支援、加えて無償資金協力が多く高く評価されていると感じた。また、教育分野への積極的な取り組みもカンボジアで日本の支援が認知されている要因の一つであると考えられる。他国の支援に関しては、近年では中国からの支援が増加しており、カンボジア国内での認知度も高いことがわかった。海外からカンボジアに対する支援については、資金協力外の技術協力不十分であることや支援事業の形骸化などの課題があることがわかった。支援そのものに対しては全体的に比較的高い評価が得られたが、その支援が十分とはいえない。そのため、支援の質を上げていくことも支援の評価を向上させる上で重要であると考えられる。

## ③ 今後の支援のあり方

以上を踏まえてこれからの対外支援では、現地の方へのインタビュー調査や現地見学を行い実際に必要な支援や支援の現状を把握することが大切であると考えられる。そうすることで需要に沿った支援を行うことができるのではないだろうか。また、支援を行う国は「支援する」ことを最終ゴールとせず、支援される国が継続的に発展できるような支援を考えていく必要があると考えられる。短期的な支援ではなく、長期的な支援が発展途上国の真なる発展につながると考える。

## 5. 調査に参加した感想

私は今回の調査でインタビューの難しさを痛感した。ただ自分の聞きたいことを質問するだけではなく、相手とのコミュニケーションや心地よいインタビューの環境づくりが大切だと学んだ。また、約 1 週間の短い期間であったが、カンボジアの方々の温かい優しさに数多く触れ、カンボジアの温かい国民性を、身をもって感じることもできた。調査では大変なこともあったが、現地の方々の優しさのおかげでなんとか乗り切ることができた。さまざまな方々の協力のもとで私は非常に貴重な経験をさせていただいたと感じる。その

ため今回得た知識や学びを今後の学習に活かしていくとともに、カンボジアの発展のために何が必要かをこれからも考えていきたい。

## **6. 参考文献**

上田広美, 岡田知子, 福富友子編 (2023) 『カンボジアを知るための 60 章【第 3 版】』明石書店.

## カンボジアの高等教育アクセス：出身地域とジェンダーに注目して

生活科学部人間生活学科 2年

亀岡 千愛

### 1. 調査テーマ

本レポートは、カンボジアにおける高等教育へのアクセスが「出身地域」と「ジェンダー」という2つの要因によってどのように左右されているのかを明らかにすることを目的とする。近年、カンボジアでは初等教育・中等教育の就学率が大幅に向上し、カンボジア王国教育・青年・スポーツ省（2019）によれば初等教育の就学率は約95%に達している。一方で、高等教育への進学率（UNESCO, 2023）は約17%にとどまり、周辺国であるタイ（54%）、ベトナム（29%）と比較しても依然として低水準にある。この「進学のパ壁」は単なる経済的制約にとどまらず、社会構造・文化的規範・地理的条件などが複合的に影響していると指摘されている。

事前学習の段階で、カンボジアは都市と農村の教育機会の格差が大きいこと、また高等教育機関が首都プノンペンに集中していることがわかった。日本においても都市部と地方で塾・進学情報へのアクセスに差が見られ、さらにかつては「女子は必ずしも大学に行かなくてよい」という価値観が女子の進学率を下げていた歴史がある。これらの背景を踏まえ、カンボジアでは出身地域やジェンダーによってどのような進学格差が生じているのかについて関心を抱いた。

本調査では、首都プノンペンおよび地方都市バタンバンにおいて学生・保護者・学校教員へのインタビューを行い、地域差およびジェンダー差が高等教育アクセスにどのような影響を及ぼしているかを検討した。本レポートはその結果を整理し、カンボジアにおける教育機会の公平性を確保するために必要な視点を提案するものである。

### 2. 調査設問

本調査は、2025年8月のカンボジアスタディツアーで実施した聞き取り内容をもとに分析したものである。調査地域は、首都プノンペンと地方都市バタンバンの2か所である。対象となったのは、大学生や農業訓練生といった若者、幼稚園・小学校に子どもを通わせる保護者、学校教員、そして教育支援に携わるNPO職員である。都市と農村で教育環境がどう異なるのかを把握するため、立場の異なる人々から幅広く意見を聞いた。

聞き取りは、日常会話に近い形のグループインタビューとして実施した。質問内容は、主に①出身地域による進学意識・経済的負担・情報へのアクセスの違い、②ジェンダーによる進学の許容度や家族の価値観の違い、の2つである。回答はメモで記録し、個人が特定されないように整理した。また、訪問先の教育機関（プレア・ノロドム小学校、バタ

ンバン州の学校施設、CJCC、JICA 事務所など）で得られた制度的説明も補足情報として用いた。

分析にあたっては、都市部と農村部の違い、男女による違いを軸に、聞き取った内容を比較しながら主な傾向を抽出した。特に①経済的要因、②情報・教育機会へのアクセス、③文化・家族の価値観、④キャリア観の4つに注目して整理した。これにより、地域差や男女差が単独で発生するのではなく、複数の要因が重なりあいながら進学を促したり妨げたりする構造が見えてきた。

#### 〈質問時に用いた主な設問〉

##### ① 出身地域に関する要因

- 進学意識や「大学に行きやすい／行きにくい」という感覚に地域差はあるか
- 経済的負担や進学情報の入手しやすさに差はあるか
- 農村部では、距離や交通、家族のサポート不足などの障壁があるか
- 塾や奨学金の利用に地域差はあるか

##### ② ジェンダーに関する要因

- 女子特有の進学阻害要因は何か
- 家族の期待・結婚観・家計の優先順位は進学決定にどう影響するか
- 進学や就職の際、ジェンダー役割意識がどの程度働くか
- 専攻分野やキャリア選択に男女差はあるか

### 3. 調査結果

#### 3-1 出身地域による進学格差

調査では、都市部と農村部の間に明確な差があることが分かった。都市部の学生は進学塾や奨学金、進路相談などにアクセスしやすく、大学進学を「当たり前の選択」と考えていた。親世代も進学を強く後押しし、法律・IT・建築など専門職への志望も多かった。

一方、農村部では以下の点が進学の障壁となっていた。

①大学進学は当然とはみなされない、②学費だけでなく、都市部で生活する費用が大きな負担、③最寄りの大学まで遠く、交通が整っていない

さらに、農業を営む家庭では「大学に行かなくても農業で生活できる」という価値観が根強い。また、カンボジアでは大学ごとの入試がなく、高校卒業試験の合格がそのまま大学入学資格となる。しかしこの卒業試験の合格には塾がほぼ必須である。塾では試験に出やすい問題を教えることも多く、塾に通えない学生は不利になりやすい。そのため、塾が少ない地域の学生や経済的に塾に通えない学生は卒業試験に合格できず、留年あるいは中退に至るケースがあるという。

また、農業が“セーフティネット”と言われがちだが、実際には商品作物の価格変動が

激しく、肥料代がかえって赤字になる農家もある。農業にも教育や知識が必要であるという視点が欠けている面も指摘された。

大学に進学できたとしても、地方出身者は生活費を自分で稼ぐ必要があり、学業との両立は都市部の学生より重い負担となっている。夜間や週末に授業を行う大学が多い背景には、こうした現実がある。一方、都市部の学生は授業以外の時間に語学やビジネス講座を追加で受けており、将来のキャリアをさらに積み上げている。これにより、教育格差の再生産が起きていると考えられる。

### 3-2 ジェンダーによる進学格差

ジェンダーに関しては、日本ほど「女子は大学に行かなくてもよい」という価値観は見られず、男女ともに「高等教育は必要」という認識が広く共有されていた。また、専攻分野にも大きな偏りはなく、教育・経済・ITなど多様な分野で女子学生が活躍していた。

しかし、農村部では文化的な理由から女子の進学が制限されるケースがあった。「娘が都市で自由に交際してしまうのでは」「都市の生活は危険」といった心配があり、

**「家から通える大学ならいい」「親が認めた女子寮に入るならいい」**といった条件付きでしか進学を認めない家庭も少なくなかった。

このように、親の意向を重んじる仏教的価値観も相まって、女子が家庭の見えない枠組みに縛られてしまう状況があると感じられた。

ただし農村部では、ジェンダーよりも「誰に投資するか」という資源配分の問題が大きかった。家族の中で成績の良い子どもに教育費を集中し、上のきょうだいが働いて下のきょうだいを大学に送り出すケースも複数見られた。

一方、都市部では男女差は小さく、女性も進学後に就職し、家庭と仕事の両立を前提にキャリアを考えていた。しかし、結婚・出産後に専門性を活かすににくい現状があり、進学後のキャリア支援が十分ではない点が課題として浮かび上がった。

## 4. 考察

以上の結果から、カンボジアにおける進学格差は、制度・地域・文化が複合的に影響しあう「構造的な問題」であることがわかる。まず、塾依存型の卒業試験制度は都市部の学生を有利にし、農村部の学生を制度的に不利な立場に置いている。また、大学が都市部に集中していることは、農村部の学生に物理的距離と生活費という二重の負担を強いている。

文化規範の面では、農村部の女子は「家から離れること」自体への抵抗感が家族内にあり、これは直接的な差別ではないものの、結果として進学機会を制限している。家族中心の意思決定、農村共同体の価値観、結婚観などが進学選択に影響している点が特徴である。

これらを踏まえると、教育格差は正には次のような多層的アプローチが重要である。

① **地方での高等教育機会の拡充**：都市集中を緩和し、地域に根ざした学部（農業経営、

観光など）を強化する。

- ② **卒業試験制度の公平性向上**：公教育の学力保障、補習の公的化、オンライン支援など塾依存を低減する。
- ③ **農村家庭への進学情報提供**：奨学金、女子寮、安全対策について学校・行政・NGOが連携して広報する。
- ④ **女子の進学環境整備**：安全な女子寮の確保、女性ロールモデルの提示、家族向け啓発が不可欠である。
- ⑤ **農業と教育の連携強化**：「進学＝家業の放棄」という捉え方を変え、教育が農業経営を支えるという認識を広げる。

進学格差を教育費だけの問題として捉えるのではなく、地域構造や文化規範を含む複数の要因に働きかける必要があると考える。

## 5. 調査に参加した感想

今回の調査を通じて、さまざまな背景をもつ人々のライフヒストリーに触れ、それぞれが置かれた環境の中でよりよい未来をつかもうと努力している姿が印象的であった。また、カンボジアでは婚前交際に対して慎重な姿勢が一般的であるなど、文化的な規範が進学や生活の判断に影響していることを知り、新たな視点をを得る機会となった。一方で、日本においても男女で大学進学率や専攻分野に差がみられる現状を振り返ると、文化的背景が教育選択を左右する点では両国に共通性があるとも感じた。私自身、地方出身で大学進学の際には塾へのアクセスや一人暮らしの費用について不安を抱えた経験があり、カンボジアの農村部の若者の悩みに共感する部分があった。

英語での聞き取りには難しさを覚え、調査手法についてもよりよい方法があったのではないかと反省も残るものの、調査対象の方々は真摯に向き合い、率直に経験や思いを語ってくださった。この温かい協力があったからこそ、本調査を通して自身の調査項目のみならず、カンボジアのことたくさん知ることができた。ツアー全体を支えてくださったガイドのプティ氏にも、心から感謝したい。

## 6. 参考文献

Ministry of Education, Youth and Sport (2019). Education Strategic Plan. Kingdom of Cambodia.

Tertiary school enrollment, percent of all eligible children (2023), UNESCO



## カンボジアにおける主権者教育の実態

文教育学部人間社会科学科教育科学コース 4年

松尾 ひなの

### 1. 調査テーマ

カンボジアは立憲民主主義制で、複数政党が存在し、選挙が行われており、形式的には民主主義国家である。しかし実際はカンボジア人民党による一党優位の状況が長年続いており、ヘゲモニー的権威主義であるとも言える。クメール・ルージュによる虐殺や内戦を経てやっと成立した民主主義が、なぜ形式的な民主主義のまま状況が変わらないのか、学校で民主主義の意識や態度を育むための主権者教育は果たして行われていないのかということに関心を持ち、「カンボジアの主権者教育の実態」を研究テーマとした。

主権者教育について扱う上で、総務省「主権者教育の推進に関する有識者会議とりまとめ 平成 29 年」を参考に、主権者教育の定義を「国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育成していくこと」とした。さらに、カンボジアの学校における主権者教育の実態を調査するにあたり、文部科学省が発行している小・中学校での主権者教育の手引き『主権者として求められる力』を子供たちに育むために」を参考に、①公民的知識、②思考力の育成、③人々の主体性と民主主義への意識、の3つの観点に着目することとした。

### 2. 調査設問

①公民的知識、②思考力の育成、③人々の主体性と民主主義への意識の3つの観点それぞれに調査設問を立てた。それぞれの設問は以下の通りである。

#### ① 公民的知識

- ・ 政治に関する制度や現状について学校で教わる機会はあるか
- ・ 新たに学校に設けるべき科目はあるか

#### ② 思考力の育成

- ・ 自分の意見を発表する・グループ活動をするなど、思考力や判断力を育むような授業はあるか

#### ③ 人々の主体性と民主主義への意識

- ・ 自分の行動で自分の集団(職場・地域社会・国)は変えられると思うか
- ・ 人々のこれまでの歩みのどのような部分に主体的な選択が見られるか
- ・ 将来、カンボジアがどんな国になってほしいか

### 3. 調査結果

#### (ア) 公民的知識

カンボジアの小・中・高等学校に公民科の科目はなく、憲法や法律、民主主義の仕組み、選挙について学ぶことはなかった。カンボジア工科大学の学生へのインタビューでは、学生が友達同士で政治の話をするのではなく、その理由は決して関心がないからではなく、外国も関連する国際情勢についてならば話すことができるが、カンボジア国内の政治について話すことができないからだということも分かった。また、歴史科目は小・中・高等学校で文系理系問わず学ばれており、幼稚園の頃から博物館での見学や僧侶を招いた講和などもあり、歴史教育は重視されている。しかし現代の若者にはポル・ポト政権下の虐殺が真実だと信じられず、若い世代にカンボジアの歴史が伝わっていないのではないかという意見も、ポル・ポト政権下を生き抜いた方の話の中にあった。

そして、新たに設けるべき科目はあるかという質問を幼稚園の先生やテラ・ルネッサンスのスタッフの方々にしたところ、道徳教育の拡充、マーケティング、薬物や未成年飲酒の防止、クリティカルシンキング（批判的思考）、農業、IT、コンピューターサイエンスなどが挙げられ、公民的知識への言及はなかった。ほとんどの人は道徳教育または IT と答え、主権者教育につながる可能性のある「クリティカルシンキング」と答えたのは一人だけであった。

#### (イ) 思考力の育成

思考力の育成に関して、幼稚園では遊びを通した学びが推奨されており、図工や体育、家庭菜園による生き物や植物についての学びなどの理科を取り入れて子どもが遊びを通して思考しながら学ぶ設計がされていた。しかし、小・中・高等学校では授業は基本的には先生の話聞きながら児童・生徒がノートにひたすらメモをとるという一方向型で行われており、生徒が自分の意見を考えたり議論したりする機会はほとんどなかった。道徳の試験では自分の意見を書くが、ほとんど決まった内容なのであまり自分で考えてはいないという話も聞いた。幼稚園から小学校に上がる際の学びのスタイルのギャップについて、幼稚園の先生は、小学生にサイエンスは難しく、まずは知識の獲得が大切であるから仕方がないことだと話していた。

一方、見学に訪れたプノンペンの公立小学校では ICT の授業が行われており、ICT の授業に限っては児童同士の教え合いが発生していた。ICT の授業によって児童に ICT スキルのみならずオープンマインドセットが身に付いたと担当講師は話していた。

カンボジア工科大学の学生は、日本のアニメで見た部活動と学級活動が羨ましいこと、カンボジアの学校教育にはチームワークとリーダーシップを育成する機会が不足していると考えていることを話してくれた。

#### (ウ) 人々の主体性と民主主義への意識

自分の行動で自分の集団を変えられると思うかという質問には、自分の職場、地域には影響を与えられるが国は難しいという返答であった。幼稚園の先生は朝食プロジェクトをまず自分の幼稚園で実施し、その後ほかの幼稚園にも広めたことで地域の子どもの食事と栄養を改善したという例をあげた。国を変える・国に意見を伝えることは難しいという意見が大半であったが、幼稚園の園長先生は、自分は政党の偉い人たちと会議もするから国も変えられると思うという返答であった。

また、テラ・ルネッサンスの現地スタッフの多くは様々な仕事を経て今の仕事についていたり、大学生の中には日本企業での日本語学習・インターンをしていて日本企業にエンジニアとして就職することが決まっている学生がいたり、職業選択について主体的な行動が見られた。様々な職業を経ている理由は、給料を上げるために自分のスキルアップに応じて転職する人が多いからだということが分かった。また、仕事への向き合い方に関しても、教えられる側である研修生から学ぼうとする姿勢を大切にしている方、たくさんの人と関わる仕事のためそれぞれの事情に適應できるよう自ら考えて仕事をしていると話してくださった方など、カンボジア人が工夫して仕事に取り組む様子がライフストーリーから伺えた。

さらに、カンボジアがどのような国になってほしいかという質問では、道徳を大切に、人々が協力してもっと国として強くなってほしい、教育の質が高く経済的に発展している国になってほしい、小さいけれど強い国になってほしい、という回答があった。民主主義への言及は見られなかった。

## 4. 考察

#### (ア) 公民的知識

学校教育において歴史や自国の文化を学ぶことはカリキュラムとしても教育に携わる大人たちの考えとしても重視されているが、政治の仕組みを学ぶことはない。日本に暮らす私の考えでは、政治の仕組みを学ぶこと自体は政治的思想を話すことにつながらないと考えるが、やはり政治的な表現の自由が制限されていることから学校では扱うことができず、政府のつくるカリキュラムに組み込まれることもないのだろう。学校で政治の話はできないよと教えてくれた学生は突然小声になってその話をしてくれたことが、いかに国内の政治の話題がセンシティブであるかを物語っている。学校で国の政治制度について知識として教わることはないが、人々は政治に関心が高く、自ら情報収集していた。また、選挙の存在や投票の仕方については多くの人は家族や周りの大人から教えてもらったと話しており、学校で学ばないからこそ自らアンテナを張ったり必要なことは大人が子どもに教えたりしていることがわかる。しかし、民主主義の概念や他国の政治の仕組みについて学ぶことはないので批判的思考を持つことは難しいのだろう。

#### (イ) 思考力の育成

学校において児童・生徒がグループ活動や実験などの活動をしたり、特別活動や学級活動のような生徒中心の活動をしたりする機会がないのは、大きく2つの要因が考えられる。1つ目は、設備・道具の不足である。カンボジアでは校舎の不足から、学校が2部制で分かれており、授業時間が少ない。結果として授業時間が限られ、教師は知識を生徒に教えることを重視するのである。また、午前も午後も授業で学校施設が利用されているため、部活動のような活動を放課後に行うこともできない。実験器具がないため、実際に実験することもできないのである。2つ目は、カンボジアの子ども観によるものである。幼稚園の先生が、小学生は知識を学ぶ段階であり思考するのは難しいと考えていたり、小学校の先生が、40人のクラスでは一人ひとりを見ることはできないからグループ活動が不可能だと話していたりした。しかし、日本では小学生でも算数や理科で予想を立てたり、国語で自分の意見を考えたりするし、40人学級でも子どもたちはグループ活動を通して学んでいる。児童・生徒は教えられる存在であり、自分たちで学ぶ存在ではないのである。

#### (ウ) 人々の主体性と民主主義への意識

学校では全くといえるほど主体性を育む機会はなかったのに対して、インタビューをさせていただいたカンボジア人の主体性は高かった。人々のライフストーリーから分析すると、生きていくために必要に迫られて主体的に行動をしてきたことが分かった。幼い頃に親と死別していたり、生活のため高い給料を得るために仕事を変えていたりした。また、人に対して真摯に向き合う姿勢が、結果として自ら工夫して仕事に取り組むことにつながっていると考えられる。また、所属組織や地域社会に対する自己効力感が高く、自分の働きによって組織や社会を変えられると考えている人が多く、民主主義に必要な積極性と参加の意識は持ち合わせているといえる。しかし、政治的な表現の自由には制限があるために現在の政治に対して批判的思考力を働かせられないこと、政治の仕組みについて多様な情報を収集することができないことから、形式的でない本質的な民主主義に向かう意識は見られない。

### 5. 調査に参加した感想

カンボジアに降り立ってまず驚いたことは、経済発展と街の開発である。首都プノンペンでは、伝統的な煌びやかさを感じる寺院や道の側の露店といった昔ながらの景色を残しながらもビルが立ち並んでいた。一方で地方ではビルはあまり見られず、トイレの清潔さも劣り、政府が地方の開発にどれほど費用をあてているのか疑問に思った。手作りの小屋のような家のすぐ隣に頑丈でお洒落な家が建っていることもあり、国内でも同じ地域内でも経済格差があることを実感した。カンボジアのことを知る前に抱いていた発展途上国のイメージは大きく変わった。

トゥール・スレン虐殺博物館で実際にポル・ポト政権の時代を経験した方から話を聞いたことは鮮明に記憶に残っており、外部者である私はカンボジアの人々が大変な思いをするようなことはもう起きないでほしいと思う一方で、徴兵制について「だれも反対していない」あるいは「反対するのは難しい」という話を聞くなど戦争への足音を感じさせるような場面もあり、平和を保つことがいかに難しいのかも感じた。

実際にインタビューをしてみて、私が調査計画を立てた際にいかに自分の狭い視野で考えていたかを痛感した。民主主義が形式的になっているのになぜ変わっていかないのか、誰も批判しないのかと疑問に思い「カンボジアにおける主権者教育の実態」をテーマしたが、そもそも主権者教育と呼べる教育は行われていなかった。学校で公民分野を学ばないということは考えもしておらず、政治的な表現の自由の制限があるために教育内容にも影響を及ぼしていることに衝撃を受けた。

友達と意見交換をしたり、新しい視点を獲得したり、学級活動のような子どもが中心になる活動をしたりするが大好きだった私は、カンボジアの子どもたちが一方向の授業でも「学校は楽しい」と声をそろえて言うのを不思議に感じてしまったが、それもやはり私は自分の受けてきた日本の教育を基準に考えているからだと思う。子どもたちが学校を楽しんでいること自体がカンボジアの教育の良さともいえる。多角的な視点を持ち、自分の物差しに固執せずに物事をとらえられるようになりたいと思うようになった。最後に、カンボジア人の主体性は必要に迫られて獲得した主体性だと結論づけたが、物資や機会に恵まれなくとも、自分でチャンスを生み出し、そして掴もうとするカンボジアの人々の生き方、周囲の人をととても大切にする姿勢を私も見習いたいと思った。

## 6. 参考文献

アジア経済研究所 IDE-JETRO「パリ和平協定 30 周年から振り返るカンボジアの体制移行」[https://www.ide.go.jp/Japanese/IDEsquare/Eyes/2021/ISQ202120\\_029.html](https://www.ide.go.jp/Japanese/IDEsquare/Eyes/2021/ISQ202120_029.html)  
(2025/10/28 最終アクセス)

総務省「主権者教育の推進に関する有識者会議とりまとめ 平成 29 年」

[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000474648.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000474648.pdf) (2025/10/28 最終アクセス)

文部科学省「小・中学校向け主権者教育指導資料 『主権者として求められる力』を子供たちに育むために」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/gakusyushien/mext\\_00085.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/mext_00085.html)

(2025/10/28 最終アクセス)

## カンボジアにおける結婚への意識

生活科学部人間生活学科 4年

丹野 里莉

### 1. 調査テーマ

私は結婚という制度に関心があり、日本における結婚の歴史や、未婚化の現状について学習してきた。特に関心があるのは未婚化であり、日本の未婚化を検討するにあたって国際比較をしたいと考え、特にカンボジアに見られる早婚、見合い婚といった、現在の日本とは異なる結婚形態に注目した。本調査では、カンボジアにおける結婚制度の現状や背景を、現地の生活者や関係者の声を通じて直接学ぶことを期待し、早婚や見合い婚といった制度が、社会構造や政治的・経済的文脈の中でどのように存在しているのか、また女性や若者の人生にどのような影響を与えているのかを具体的に把握するために行った。

### 2. 調査設問

調査の中で、Ⅰカンボジアの結婚について、Ⅱ自分の結婚についての周囲の反応、Ⅲ自分の結婚観について、Ⅳ結婚相手に求めること、Ⅴ結婚後の性別役割について、を聞き取るため、インタビュー形式で、以下の質問をした。

- ① ご年齢と、ご結婚されていますか？結婚した年齢は？
- ② 何歳くらいで結婚する人が多いと思いますか？
- ③ ご家族や周りの人は、あなたの結婚についてどんなふうに言いますか？
- ④ 結婚は人生にとって大事なことだと思いますか？なぜそう思いますか？
- ⑤ 結婚したいと思う理由・したくないと思う理由はありますか？
- ⑥ カンボジアでは、恋愛結婚とお見合い結婚はどちらが多いですか？  
それについてどう思いますか？
- ⑦ 結婚相手には何を求めますか？
- ⑧ 相手に「学歴」や「収入」はどのくらい大切ですか？
- ⑨ 結婚後、夫と妻の役割はどうなるべきだと思いますか？（家事・育児・仕事など）
- ⑩ 女性が結婚せずに仕事を続けることについて、どう思いますか？
- ⑪ 周りから「早く結婚しなさい」と言われることはありますか？
- ⑫ 結婚しない選択に対して、社会の反応はどうですか？
- ⑬ 日本では結婚が遅くなったり、結婚しない人も増えています。カンボジアではどうですか？
- ⑭ あなたにとって「良い結婚」とは、どんな結婚ですか？

### 3. 調査結果

いくつかの質問と回答を以下に抜粋する。

#### I カンボジアの結婚について

Q. 何歳くらいで結婚する人が多いか？

A. ・女性 は 20 歳～、男性 は 25 歳～が多い。

- ・田舎の方の村やカンボジアの少数民族の内では、早婚が未だに根付いており、女性が 13 歳～、男性が 15 歳～結婚することもある。
- ・最近では学校に行くことの大切さが周知されてきており、学校を卒業するまで結婚するのを待つこともある。
- ・30～35 歳では、男女ともに結婚に遅すぎるという認識がある。

Q. 見合い結婚と恋愛結婚ではどちらの方が多いか？

A. ・現在は恋愛結婚が多い。それは共通認識になっている。

- ・都会でも田舎でも、恋愛結婚の方が多い傾向がある。
- ・（インタビューの体感で）恋愛結婚が 70%、見合い結婚が 30% くらい。
- ・（現学生のインタビューの）両親は見合い結婚だった。

#### II 自分の結婚について周囲からの反応

Q. 結婚しない選択肢に対して、社会の反応はどうか？

A. ・親は心配をすると思う。

- ・周りの人からは「何か問題があるから結婚ができないんじゃないか？」と思われる。噂される。
- ・親にも何も言われない。
- ・自分の性格や、家族に問題があるから結婚できないのでは？と思われる。

Q. 周りから「早く結婚しなさい」と言われることはあるか？

A. ・10 歳の時から親に結婚の話をされていた。

- ・特に祖父母が心配する。
- ・1 人の期間が長ければ、家族が心配して、お見合いを用意されると思う。
- ・結婚についてのアドバイスを家族から受けることはあるし、それは自分にとって必要なことだと思う。

#### III 自分の結婚観について

Q. 結婚は人生にとって大事なことだと思うか？ なぜそう思うか？

A. （A さん・男性）

必要ではないと思う。結婚をすれば責任が重くなる。もし結婚するとしたら、家族や子どもを養わなければならないので、貯金をしてから結婚すると思う。

A. (Bさん・女性)

結婚は文化として大事なことだと思う。

失われた時代の記憶を、子ども達の世代に継承する必要がある。

A. (Cさん・男性)

結婚は必要なことだと思う。

カンボジアには老人ホームがなく、家族が家族の面倒を見る文化がある。

自分が高齢になった時のために、家族を作ることは必要だと思う。

A. (Dさん・女性)

大事だと思う。

夫と協働している。また、子どもを持つことも必要だから。

#### IV 結婚相手に求めること

Q. 結婚相手に何を求めるか？

A. ・本当に愛し合っていること。

- ・見合い結婚でも恋愛結婚でも本当に愛していればなんでもいい。(男性)
- ・本当の愛に加えて、仕事をしていることや自立をしていること。(女性)
- ・収入は少しは必要になる。自分以上の学歴などは必要ない。(女性)
- ・性格と、家族のバックグラウンドが少し大事。(男性)
- ・奥さんみたいな旦那さんがいい。家事ができて、病気だったらお互いに助けられて自立できる人。高学歴じゃなくてもいいけど、自立のための教育は必要。(女性)

#### V 結婚後の性別役割について

Q. 結婚後に夫婦の役割はどうなるか？

A. ・男性も絶対に家事に参加している。

- ・男性が女の人の仕事（家事等）をしたら、悪口だったり、馬鹿にするようなこともあった。
- ・カンボジアでは男性の家事参加の意識がある。
- ・昔は日本と同じような性別役割分業であった。
- ・男性が子どもの世話をすることをよく思わない人もいる。
- ・母親が大変そうだったから、自分は結婚後、絶対に家事に参加すると思う。(男性)



- ・男性が仕事をしている時、食事や水仕事、育児は女性の義務である。
- ・男性は 10% くらいしか家事をしないと思う。
- ・女性 1 人で家事育児を行う家庭も存在する。
- ・なんで料理は女性ばかり担当するの、と思うことがある。(女性)

Q. 妻が仕事を続けることについてどう思うか？

- A. ・女性も仕事を続けられる社会になってきている。
- ・共働きはまだ普通のことにはなっていない。レアケース。
  - ・両親がいれば共働きすることもある。
  - ・専業主夫は減多にないがそれも少しずつ変わってきている。

#### 4. 考察

調査の中では、結婚が人生の中で大事なものと捉える人が多いことが分かった。インタビュー結果から、結婚は特に家族・子どもと結びつけられていることが伺えた。その背景には、家族が家族の世話をするというカンボジアの文化と、老人ホームなどの公的整備の未整備などがあり、結婚をしないと自分が高齢になった時に面倒を見る人がいなくなる、という意識がいくつかのインタビューから読み取れた。

また、結婚相手の条件について、「真実の愛 (True Love)」が一番大事という意見が多くあり、相手の学歴や収入など細かい条件にとらわれていないことが分かった。

カンボジアの結婚年齢は、男女ともに 20 代で結婚するという意見が一番多く、日本の平均初婚年齢より若いことが分かった。加えて、農村部や少数民族の間では 13~15 歳などの若い年齢で結婚することもあり、早婚の実態についても触れられた。

早婚などの問題が残る一方で、家庭内での性別役割については、男性の積極的な家事参加の意見が多くあり、ジェンダーの平等化が伺えた。しかし、女性に聞いた場合と男性聞いた場合で意見が異なったり、「家庭内での家事分担はどうなっているか？」の質問については平等だと回答があったものの、後に、「なぜ女性ばかり料理するのと思うこともあるの考える」などの回答があったりし、意識としてのジェンダー平等と、実態としてのジェンダー平等にはまだ差があるように見受けられた。

#### 5. 調査に参加した感想

調査に参加して、後発開発途上国であるカンボジアのジェンダー平等意識が、日本よりずっと進んでいることに衝撃を受けた。他国に出ることで、より日本のジェンダー観について、危機感を持つことができた。

インタビューについては、今まであまり経験しておらず、それも海外の方にインタビューをするという経験は特に無かったので、はじめはとても苦労した。自分が聞きたい

ことを分かりやすい日本語に直してガイドのブティさんに通訳してもらったり、時には日本語→英語→クメール語で通訳してもらったりと、言葉の壁が大きかったため、用意した質問では思ったように伝わらないことも多々あった。それでも、インタビューを続けながら工夫し、インタビューの方々が思っていることを理解し、日本での考え方や意見と交換できた時には、コミュニケーションを取れた達成感があった。

普段日本で生活しているだけでは絶対に触れることのできない、カンボジアの方々の生活に根付いた考え方や価値観を知ることができたのは、本当に貴重な経験であった。そこにはアジア文化圏特有の共通点や、異なる歴史を辿ってきたことで生じる違いがあり、自身の知見を広げることができた。このスタディツアーで得た経験をこれからの生活や社会で活かしていきたい。

## 6. 脚注

世界経済フォーラムが発表したジェンダーギャップ指数（2025）によれば、全 148 カ国中、日本のジェンダーギャップ指数は日本は 0.666 で 118 位、カンボジアは 0.682 で 106 位である。0 に近いほどジェンダーギャップが大きい。

## 7. 参考文献

上田広美, 岡田知子, 福富友子編（2023）『カンボジアを知るための 60 章【第 3 版】』明石書店.

佐藤奈穂（2017）「カンボジア農村に暮らすメマーイ」, 京都大学学術出版会.

World Economic Forum, 「Global Gender Gap Report 2025」, 2025, （最終閲覧日 2025/11/28 <https://jp.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2025/>）.

## （５）訪問記録

### 1) 私立幼稚園訪問

日時：8月22日（金） 10：30～11：30

場所：Japanese International School of Phnom Penh Kindergarten（私立幼稚園）

面会者：渡邊大貴さん（Wonderfy）

私立幼稚園の概要：

#### ○基本情報

- ・ 設立：1年半前
- ・ 非営利組織（政府からの補助なし、民間企業からの支援あり）
- ・ 定員：110人
- ・ 月謝：550ドル（カンボジアではこのクオリティとしては安価とのこと）  
※ カンボジアの幼稚園は、JISPPより高い金額の幼稚園でもビルの中にある幼稚園の中で終日勉強させるのみのところが多い。この幼稚園の環境に近づくには月2,000ドル程度は必要になると思われるとのこと。
- ・ 利用者：富裕層が中心。日本人は駐在員家庭が多い。
- ・ 保育時間：午前8時～午後3時30分（※延長保育は午後5時30分まで）

#### ○教育方針・特徴

- ・ 遊びを重視（机上学習に偏らない）
- ・ 怪我も経験と捉え、「リスクプレイ」を実施（※保護者にリスクプレイに同意するサインを求めている）
- ・ 強制しない教育

#### ○設備・環境

- ・ 自然を生かした園庭（転んでも痛くない環境づくり、※日陰を多く確保、砂を持ち込み、木を植えている）
- ・ 遊具や家具は日本のものをサンプルに、カンボジアで現地生産することで経費を削減している
- ・ 積み木や人形も多様な種類がある（多人種の人形は平和教育の一環 など）

#### ○人員体制

- ・ 職員数：45人
- ・ クラス：6クラス、各15人～20人

※ クラス担任は英語圏の外国人（インターナショナル校のため）

※ 先生は1クラスあたり4人程度、児童3～4人に1人の先生（手厚い）

背景として、国立幼稚園教諭養成校を卒業した先生にのみ資格が与えられ、その先生たちは国立幼稚園で勤務することになる。卒業生は年間100人のみのため、多くの公立幼稚園や全ての私立幼稚園では幼稚園教諭の資格が無い者が先生をしている。JISPPでも他の私立幼稚園と同様にカンボジア人の先生は無資格者である。日本と比べて幼稚園教諭の質が高くはないので、多くの先生を雇うことで、教育の質を担保している。

- ・ 先生それぞれにニックネームがある（例：キウイ、キャンディ、モンキー等）
- ・ 職場環境：スタッフの食事は無料、スタッフ専用の休憩室があり1時間の休憩が取れるようになっている（日本と異なる点）。

#### ○カリキュラム・活動

- ・ 英語教育：遊びながら20～30分程度、自然に覚えるようにしている。グループで活動するときの言語は英語。
- ※ 2歳程度だと国籍の概念がなく英語が自然と身につきやすい。5～6歳ごろからは国籍の概念が生まれ始める。
- ※ 先生は英語、子どもたちは英語・日本語・クメール語などを話す。
- ・ 活動：ハサミ遊び、積み木、ごっこ遊びなど様々。午後には30分だけ歌の時間がある。
- ・ 連絡帳導入（カンボジアでは画期的、日本人家庭は特に積極的に利用）

#### ○食育・健康

- ・ 日本人調理師が常勤（メニューにはハヤシライスも！）
- ・ 栄養バランスを考慮した給食を提供
- ・ 子どもが食べた量を数値化し、保護者に報告（他の幼稚園にはない制度で革命的取組）
- ・ 保護者の食育にも力を入れている（粉ミルクの使用が何歳までが適切なのか知らない保護者がいるなど育児に対する知識不足もあるため、保護者に対するセミナーを開催するなど）
- ※ 「噛まない子」、「言語発達の遅れ」などそれぞれに対して支援を行っている
- ※ 自分で食べる習慣を重視（1歳半からでも）無理やり食べさせることはしない
- ※ 知識を持つ人が生徒らの食事をサポート

考察：

Japanese International School of Phnom Penh Kindergarten は、カンボジアでは珍

しい先進的な幼児教育を実践している幼稚園であることが分かった。一方で、カンボジア全体では幼稚園教育の普及が十分でなく、有資格の保育士の不足など多くの課題が存在している。また、この幼稚園には主に富裕層の子どもが通っているものの、その保護者でさえ粉ミルクのやめ時を理解していないなど、育児に関する知識が十分とはいえない状況も見られた。都市部の富裕層でさえこのような状況であることから、農村部ではさらに育児知識や学習機会の不足が深刻であると推察される。

担当者：石井 花

## 2) 小学校訪問 (Wonderfy 連携公立小学校)

日時：8月22日(金) 14:00～15:00

場所：プレア・ノロドム小学校

面会者：Phoung Mealea さん(副校長先生)

概要：

カンボジアの中でも伝統的で由緒ある小学校であるプレア・ノロドム小学校に伺った。簡単な自己紹介の後、副校長の Phoung Mealea さんに対して、プレア・ノロドム小学校の教育や子どもたちの将来についての質問を行った。通訳の方を通しての質問だったため、質問がうまく伝わらない場面もあったが、各自のテーマに沿った質問を行うことができた。

質問応答の内容：

- 保護者は学校にどのように関わっているのか。
  - ・ 学校の設備への寄付
  - ・ 不登校児などの親とのミーティング
  - ・ 60% 程関与している
- 親が学校の授業を見にくることはあるのか。
  - ・ ない
  - ・ 親は家で勉強を教える
  - ・ 家と学校は割と分離された環境
- 副校長として、子どもにどんな教育をしたいか。
  - ・ 道徳
  - ・ 技術
  - ・ ICT
- 親が子どもになってほしいと思う職業は何か。

- ・ わからない
- ・ 子ども次第である
- 子どもに人気の職業は何か。
  - ・ 医者
  - ・ しかし医者になるのは難しい
- 大学進学を目指す子どもはどのくらいいるのか。
  - ・ 多くの子どもが大学進学を目指す、実際にどのくらいの割合で大学に進学するかはわからない。
- 小学校卒業後の進路とそれに関わる男女差はあるのか
  - ・ 7年生への進学率（中学校進学率）：95%
  - ・ 男女の差はわからない→教育省の web サイトを閲覧するのがおすすめ
- 生徒数と男女内訳
  - ・ 生徒数：2,949 人
  - ・ 男女内訳：女 1,555 人、男 1,394 人
- 小学校は何年に創立したのか
  - ・ 詳しい年数はわからない
  - ・ 1950 年代
  - ・ シアヌークの少し前の時代に創立された。

考察：

小学校後の進路については学校側も詳しく把握できていないため、進路や職業に関する具体的な回答は得られなかった（ウェブサイトを確認したい）。また、ジェンダーという言葉自体が伝わっていない感じがしたため、カンボジアではジェンダーという言葉があまり一般的ではないのではないかと考えた。

実際に小学校に訪問させていただくことで、日本とは異なる教育環境を見ることができ、貴重な経験であった。

担当者：奥 みなみ

### 3) Wonderfy の教育アプリを導入する小学校の Digital Learning Center 訪問

日時：8月22日（金） 15：00～15：40

場所：プレア・ノロドム小学校デジタル・ラーニングセンター

面会者：プレア・ノロドム小学校デジタル・ラーニングセンタースタッフ（10名程度）

概要：

デジタル・ラーニングセンターでは、3人の先生（メインの先生とアシスタント2人）に対して生徒30人程度でクラスが行われていた。先生は生徒の活動中教室を見回り適宜アドバイスをしていた。内容は、Wonderfy 提供の学習アプリ Think Think や児童向けプログラミングソフト Scratch、Word や Excel の使い方の学習が主。生徒は専用の冊子に自分の Think Think のゲームのスコアを書いて記録を残していた。Think Think は迷路やパズルなどで思考力を伸ばすゲームが多く、入射角に対する反射角を予想するものなど、かなり難しそうなものもあったが、生徒は周りのことスコアを競いながら夢中になって取り組んでいる様子であった。Wonderfy 渡邊さんによれば、日本の小学生がより組む内容より2学年ほど下のものをやっているとのこと。

インタビュー内容のまとめ：

インタビュー対象者：女性（21歳）と男性（23歳）、女性の方は4兄弟の3番目、女1人

Q. 周りの人は何歳くらいで結婚する？

A. 男性が23歳から。女性は20歳から（by 男性）

A. 兄は27歳で結婚した。自分は少数民族であり、その民族の中では18歳以下で結婚する人もいる（by 女性）

Q. 結婚は人生必要？しないという選択肢はある？

A. 必要ではない。結婚には責任重くなる

A. 家族、子どものために貯金してから結婚

Q. 結婚しないと云ったら、家族はなんという？

A. 男性：しなくても良いけど、心配する。周りの人は悪口を言う。

A. 女性：何も言わない。

Q. 恋愛結婚とお見合い結婚はどっちが多い？

A. 現在は恋愛が多い。都会でも田舎でも。

Q. 結婚後、男女の役割はどうなる？

A. 男性が働き、女性は家事 両親がいれば共働きすることもある

A. 男が働くことが多い。女性は専業主婦（男性も手伝うよ！）

A. 専業主夫は無い。しかし少しずつ変わっている。

Q. JDLC (Japan Digital Learning Center) の運営資金

A. 最初は JICA のプロジェクトとして始まった

A. プロジェクト終了後、パソコン教室の先生たちの給料は親たちの寄附で賄って学校が支払いをしている

Q. 子どもがアプリをしている間、何を見て回ってる？

A. どのように理解しているか、理解してやっているか

Q. 子どもへの声かけで意識していることはあるか？

A. できるよと伝えること

Q. 先生の主体性に関連して 授業の内容は誰が決める？

A. 授業の内容は先生たちがそれぞれ考える

A. 行事の予定などは校長副校長など管理職が決める

Q. カンボジアの教育の発展のために必要な支援は？

A. 一番重要なのは生徒をサポートして動機づけること。特に ICT の分野で

Q. 3 人の先生で 30 人程度の生徒を教えていることについて、先生の数是十分だと思うか。

A. 今のところ十分だと思う。現在 1 人のメインの先生と 2 人のアシスタントがいるから。ほかのクラスでは先生一人に対して生徒が 40~50 人。この ICT の授業は (Wonderfy 委託ということもあり) かなり特別で、クラスを何等分かにして行っている。

Q. Think Think が導入される前と後での変化は？

A. 導入される前はコンピュータの起動の仕方、タイピングやマウスの操作すら知らない子が多かったが、導入されたことで基本操作ができるようになった。

A. 私立の子はその限りではないが、たいていの子は家でコンピュータを操作する機会はない。スマホの所持率が高い。

A. 先生の問いかけに対する反応が早くなった。自分で考えて答えようとするようになった。

Q. ICT の授業で ICT 以外に子どもが成長したことはある？

A. オープンなマインドセットが身に付いた

A. 間違えることを恐れない姿勢。他の授業は暗記重視で自分の考えを発表する機会や概念がほばない。

A. ICT 教室の理念は Always try. Don't be afraid to making mistakes. Yes, you can.



A. **scratch** のような百人十色の出力が出ることが新鮮で、自分の創りたいものを創るという視点が身についた

A. 自信がついた

A. 先生やクラスメイトとよくコミュニケーションをとるようになった

Q. 将来どんな人になってほしい？

A. オープンマインドを持った人。

A. 簡単にくじけず、社会に対して貢献するモチベーションが高い人。

A. ICT のフィールドで高等教育を受けられる人になってほしい

Q. 生徒に主体性はあると思うか

A. 5~10%程度は自分で考えているように思うが、90%くらいは先生に従い暗記するだけ

A. 小学校ではグループディスカッションや教え合い活動はする？

A. スクラッチ (ICT のアプリ) をやるときに教え合いが発生することもある。でもデジタル・ラーニングセンターは先生 3 人に対して生徒 30 人だし、普通の授業では先生：生徒が 1:60 だから先生のスキルがないと無理。民間の習い事として展開している **Think Think** の教室では話し合いの時間も設けられているがそれは 1：4 だから可能なこと。

Q. 公民科の授業はある？社会や政治を教える授業

A. 歴史はある

A. 他はクメール語、理科、社会、体育

Q. Word や Excel の授業ではどんなことをしている？

A. 教科書とスライドで授業

A. 表の作り方やコマンドの解説

Q. この学校以外の生徒、例えば地方の子どもが ICT スキルを学ぶ上での課題は？

A. そもそも学校にコンピュータがない。全国でも 10 校程度では？

A. できてシェムリアップやバタンバンなどの（比較的大きな）地方都市まで

Q. 生徒や保護者は ICT 教育を将来の進路や職業とどのように結び付けている？

A. 仕事を見つけやすくなったり、高い給料の職に就けるようになったりすると考えている。

A. 昔は職に就くためのスキルといえば会計が人気だったが、今は IT やデータサイエンスも人気。

Q. ICT センターのアシスタントティーチャー2 人に：現在の仕事と学生時代に思い描いていた進路にギャップはあるか？

A. 大学で ICT を学んでいた方：政府で働きたかった地方出身でコネクションなどもなかったため難しかった

A. 大学で数学を学んでいる方、大学に通うために働いている

考察：

ICT 教育が推進されることは、生徒に ICT スキルのみならず、間違いを恐れず挑戦してみる姿勢や、先生やクラスメイトと話し合いながら自分なりに課題に取り組むといった、これまでのカンボジアの教育では身に付けるのが難しかった力をつける機会になるのではないかと思った。一方で、このような教育ができるのは一部の学校に留まっているということも分かったため、各学校へのコンピュータ実装というハード面、カリキュラムや教員の質といったソフト面共に ICT 教育の普及にはまだまだ課題が多いのかもしれないと感じた。

担当者：亀岡 千愛

#### 4) Wonderfy さんとの会食

日時：2025 年 8 月 22 日（金） 19：00～20：30

場所：ヴィハー・ナイロ

面会者：渡邊大貴さん

船水さん

概要：

まず、Wonderfy で働いているのはどのような人なのかを伺った。カンボジアの大学は日本より授業が少なく、夜だけ、土日だけ授業を受けて卒業することもできるため、働きながら大学に通う人も多いという事情もある。そのため、Wonderfy の幼稚園の先生も 8 割は大学生であるとのこと。小学校 4 年生レベルの算数（例  $360 \div 15$ ）でも大学生・大学卒業生の正答率は 20% しかないことにもカンボジアの学力課題が見える。

そしてカンボジア人の特徴についてもお話を伺った。カンボジアが共産主義から民主主義に移行したとき、土地を安く買った人たちがいたが、その後バブルになって大儲けした人が一定数いるそうで、幼稚園に対してはそういった人からのクレームが多いそうである。日本との違いとして、医者より自営業の仕事の社会的ステータスが高いという話も聞いた。いい大学に行ったらいい会社に入るべきだという慣習も存在しないようである。

カンボジア人の読書習慣についても伺ったところ、大人も子どもも殆ど本を読まないということだった。日々の生活や仕事の連絡も文字のやりとりよりボイスメッセージがよく使われ、確かに町中ではスマホに音声入力している人をよく見かけた。

上司、先生、お父さんの言うことは絶対だという慣習があり、現在でも、例えば大人になっても門限が 18 時など、女子への過保護な習慣にも反抗できないそうである。さらに、カンボジア人が日本に対して好意的なのは、これまでの日本の支援を知っていること、支援に関わってきた日本人が、身分に関係なく誰に対しても丁寧優しいところなどが理由である。勉強においては正解を見つけようとする特徴がある一方で、カンボジアの良いところは人々が今この瞬間を楽しんでハッピーでいることだと渡邊さんは語った。

考察：

事前学習で幼稚園教諭の資格を取得できる学校が 1 つしかなく、公立幼稚園でさえ無資格の人も多いとは学んでいたが、Wonderfy さんが運営する幼稚園の先生の 8 割は大学生ということに驚いた。大学の授業が夜や週末にあり平日の日中に仕事ができるという実態は、働いてお金を稼ぎながら大学に通えるということであり、つまりは大学に通える人が増えるということなので、良いことだと感じた。自営業の人の社会的ステータスが高いという特徴は、カンボジア人の主体性の高さとも関連していると感じた。

担当者：松尾 ひなの

## 5) テラ・ルネッサンス訪問

日時：8 月 25 日（月） 9：00～16：00

場所：テラ・ルネッサンス バッタバン事務所

### ① 活動概要説明

面会者：江角泰さん（理事・アジア事業マネージャー カンボジア事務所長）

津田理沙さん（海外事業部 カンボジア事業調整員）

概要：

テラ・ルネッサンスの活動は、カンボジアの地雷撤去支援プロジェクトとしてスタートし、現在は地雷撤去だけでなく、撤去後の地域に住む人々が自立した生活を送れるようにするための支援も行っている。今回訪問したのは、農業や畜産についての職業訓練を、カンボジアの方々（特に若者）に行っている場所である。現在使われている建物は、以前は孤児院として使われていたもので、戦争による孤児が少なくなり、孤児院としてほとんど

使われなくなった建物を、所有している財団と協働することで、農業訓練センターとして使わせてもらっている。職業訓練のプロジェクトでは、農業の知識だけでなく、農業のリーダーとしての人材を育成するための活動も行っている。若い人が1年にわたり、農業の訓練を受ける。敷地内には、訓練生の寮の他、畑や家畜を飼うための場所が用意されている。現在は、堆肥を作って販売できるような準備も進められていて、施設内には、堆肥を作る場所や、出来上がった堆肥などがあった。運営には、テラ・ルネッサンスのスタッフだけでなく、建物を所有している財団の方や、農業組合の方も関わっている。

## 考察

学生たちが、テラ・ルネッサンスさんの事業で農業を学ぶことを心から楽しんでいることが感じとれた。インタビューの際に、逆質問のような形で日本への留学について聞かれた。テラ・ルネッサンスのプロジェクトを通して、日本での学習や就業への関心も高まっているようだ。農業の技術を教えるだけでなく、その後も自立して生活できるように、農業でのリーダー教育や、畜産や堆肥作りなど、収入源の多様化を図っている点が、物資や資金を援助するだけではない支援のあり方だと感じた。

担当者：丹野 里莉

## ② テラ・ルネッサンス昼食会

面会者：テラ・ルネッサンスの研修生

スタッフの方々

### 概要：

テラ・ルネッサンスの研修生やスタッフの方々にインタビューした後、食堂にお邪魔し、研修生やスタッフの方々と一緒に揚げ餃子風のカンボジア料理を一緒に作った。餃子の包み方や具の中身が日本の餃子と少し異なっていたため初めは難しかったが、テラ・ルネッサンスのスタッフさんや研修生の方に優しく餃子の包み方を教えていただき、楽しく作ることができた。また、料理中にはクメール語を教わったり、雑談をしたりして、お互いの仲を深めることができた。

昼食会ではテラ・ルネッサンスのスタッフさんが、揚げ餃子の他に、のりスープやカンボジア風焼きそば、エビの炒め物などを作ってくださって、さまざまなカンボジア料理を食べることができた。食事中は、調査に関する質問や、雑談したりなど、会話を楽しむことができた。

この昼食会を通して、現地のカンボジア料理に触れることができたと共に、日本人学生

とテラ・ルネッサンスの研修生、スタッフの方々と楽しく交流できる良い機会であったと感じる。

質問応答の内容：

＜結婚について＞

- ・結婚の条件としては、経済状況や学歴などよりも、恋愛感情が優先されることが多い。
- ・結婚前は同棲しない

＜お金について＞

- ・昔は男性が稼いで全部奥さんに渡して管理していた。
- ・お金の管理については妻が行うことが多い。今は個人の口座もファミリー口座もある
- ・ご祝儀は日本と同じくらいで 200 ドル（約 3 万円）くらい
- ・乾季のときしか結婚式をやらない

感想：

昼食会はインタビューとはまた違う、アットホームな雰囲気で行われたので、私たちお茶大生も楽しく活動できた。また、テラ・ルネッサンスのスタッフさんや研修生の方々も、インタビュー時の真面目な雰囲気とは異なり、フレンドリーに接してくださって双方にとって心地の良い時間になったのではないかと考える。

担当者：奥 みなみ

### ③ 参加者インタビュー

面会者：テラ・ルネッサンスのスタッフさん

研修生 5 人

テラ・ルネッサンスが支援する他地域の農協で働く大学生 1 人

概要：

○ アイスブレイクにて（学生側は 2 グループに分かれてインタビュー）

研修生 5 人（男性 3 人、女性 2 人）、大学生（テラ・ルネッサンスさんが他地域で支援する農協で働いている女性。大学では法律を専攻）

研修生はこの事務所敷地にある宿泊施設に泊まっている。大学生の方は近くのアパートに住んでいる。

質疑応答の内容：

Q. どうしてここに？

A. 実家が農家で親を助けたいから。

A. 役に立つから。鶏を育てたり、色々な植物を育てられる。

A. 1 度中退したことがあり、ここなら教育を受けられると思ったから。

A. 堆肥を作れるから。

A. 高校・大学にいくお金がない。将来農業をするため。(以上研修生より)

A. IT やマーケティング・新しい技術が学べるから。(大学生より)

Q. 兄弟は？

A. 4 人 (女性、研修生、長女。4 人姉妹)

A. 2 人 (女性。研修生、長女)

A. 2 人 (女性、大学生、兄弟は弟)

A. 1 人

A. 5 人 (男性、研修生、自分は上から 2 番目)

A. 5 人 (男性、研修生、自分は上から 2 番目)

Q. 勉強してよかったことは？

A. 台湾の学生と一緒に観光したのが楽しかった

A. 新しい経験が自分の役に立つ。

Q. この研修所には自分から通いたいと言い出したか？

A. 自分から (研修生全員)

Q. 大学のお金は自分で払っている？

A. 農協の仕事で稼いだお金で払っている。(大学生より)

Q. 大学に行く人は少ないですか？

A. 半々くらい。(大学生より)

Q. 大学に行かないと仕事がない？

A. 大学に行かなくても農業がある。だが、親は子どもが多くても、男でも女でも、大学に行かせたいと考えている。教育が役に立つことが分かった。(大学生より)

Q. 貧困で大学に行けない人もいるのか？

A. 小学校・中学校までの人もいる。下の兄弟を大学に行かせるために自らは大学に行かずに働いて家にお金を入れる人もいる。なるべく親は全員を大学に行かせたい。(大学生より)

A. 5人兄弟だが1人も大学に行けていない。みんな中学までしか行けてなく、中退した人もいる。みんな高校・大学に行きたいとは思っているが貧しいため通えない。(5人兄弟・男性の研修生より)

A. 5人兄弟のうち2人だけ大学まで進学できた。ほかの2人はそれぞれ小学校と中学校まで。一番年上の兄弟は家事をしている。(5人兄弟・男性の研修生より)

Q. 結婚したら女性は仕事を辞める？

A. 続ける人もいる。今は夫婦で互いに家事を助け合う文化がある。男女の権利は、今は同等。

A. 日本は女性が仕事も家事もしている。昔はカンボジアでも日本と同じように家事は女性の義務だったが、教育と、自分のお母さんを見て大変そうだったから自分はそうしたくないと思ったことがきっかけで、息子が奥さんの家事を手伝うようになった。女性だからと下に見ることは現代ではない。

○ 昼食後（学生側は2グループに分かれてインタビュー）

テラ・ルネッサンスさんスタッフに対してインタビューを実施。結婚に関する話題では、インタビューに回答したスタッフ全員が、結婚は人生において必要なものであると回答していた点に日本との違いを感じた。また、お見合いによる結婚の割合は減っており、今は恋愛による結婚の割合が高いという回答が共通して得られた。ジェンダーに関する話題では、昔はジェンダー格差があったが、現在は職業選択・給料・管理職登用など、すべて男女平等であるといった回答が得られた。地方格差についての話題では、大学が都市部に多くあるため引越しや移動にお金がかかるという点で地域格差があるという回答が得られた。海外からの支援についての話題では、日本から・また他国からの支援については認知されており、必要とする支援についての意見は人それぞれだった。教育についての話題では、学校にあったら良い教育としてITや農業・道徳、クリティカルシンキング、マーケティングなどが挙げられた。

考察：

首都プノンペンと比較して、教育・進学に対する認識は地方と都心部ではかなり異なることがわかった。一方で、ジェンダーに関する質問では都市部と同じような回答が得られているため、ジェンダーに関して都市部と大きな差は感じられなかった。インタビュー者の年代によってもそれぞれのテーマに関して少し異なった回答が得られ世代間の差も感じた。

担当者：石井 花

## 6) シャンティ国際ボランティア会訪問

日時：8月26日（火） 8：30～15：30

場所：シャンティ国際ボランティア会 バッタンバン事務所、幼稚園、他

### ① 活動概要

日時：8月26日（火） 8：30～9：00

面会者：菊池礼乃さん（シャンティ国際ボランティア会プノンペン事務所代表）

概要：

カンボジアの概況と教育課題について

ア) 概況

カンボジアの人口は約1,742万人、国土面積は日本の約半分（18.1万平方km）である（世界銀行, 2023）。経済成長率は5.6%（2023年）で、コロナ禍から順調に回復している。貧困削減も進み、多次元貧困率は2014年の36.7%から2022年には16.6%へと半減し、2029年には後開発途上国から卒業予定である。政治面では、2023年の総選挙を経てフン・マネット政権が誕生し、2030年の上位中所得国、2050年の高所得国入りを目指している。

イ) 教育の現状と課題

フン・マネット政権は人的資本の開発に注力しており、教育の質の改善を主要目標とする教育戦略計画2024-2028を発表した。

#### 【教育達成状況（2023-2024）】

- 5歳児の幼児教育への就学状況は65.4%
- 小学校修了率は89.2%、中学校修了率は60.97%
- 成人識字率（15歳以上）は85.5%

#### 【具体的な教育課題】

- 校舎の不足と老朽化：約25,400棟の校舎のうち約2,600棟が木造で、4校に1校は校舎に課題を抱える。
- 教員不足。
- 退学率：中学生全体で15.4%、高校生全体で\*\*13.7%\*\*と高い水準にある。
- 2部制：授業は午前と午後の2部制が以前多く、授業時間は1日わずか4時間にとどまっている。
- 幼児教育の課題：就園率、教室の数や環境、幼稚園教員の数、指導アプローチ、絵本や教材の不足、保護者の理解促進などが主要な課題である。

事業の概要と成果：



#### ア) 事業の背景

カンボジア教育省は 2018 年に幼児教育カリキュラムを改訂し、「遊びを通じた学び」を基本原則とした。しかし、教員の経験が限られていることや、幼稚園での環境整備が整っていないことから、この原則の現場での実践は困難であった。

#### イ) 事業概要

- 事業名：カンボジア国幼児教育カリキュラムに基づく「遊びや環境を通じた学び」の実践のための基盤構築事業
- 事業期間：2020 年 9 月～2024 年 4 月
- ターゲット：教育省の幼児教育局・教員養成局、幼稚部教員養成校に加え、バットンバン州の教育局や中央幼稚園（7 園）、パイロット郡（4 郡・51 園）などが含まれる。
- 事業対象郡：バットンバン州内のプノンプルック郡、サンカエ郡、ラタナック・モンドル郡、コックコロ郡など。

#### ウ) 事業の成果

プロジェクトの目標は、教育省幼児教育局が「遊びや環境を通じた学び」の実践を各州に普及する準備を整えることであった。

- 成果 1（ガイドブックの公式化）
  - ・ 「遊びや環境を通じた学び」の実践促進のための指導ガイドブックおよび活動事例集を開発した。
  - ・ 開発されたガイドブックは、教育省に公式の副教材として認定された。
- 成果 2・3（実践への反映）
  - ・ 現職教員研修のためのトレーナー養成研修や現職教員研修を実施し、人材を育成した。
  - ・ 対象幼稚園での活動の質の向上を図るため、家具、教材、絵本の配布などを行った。
  - ・ 事業を通じて推進された「遊びを通じた学び」の実践は、2023 年に発表されたカンボジアの「モデル幼稚園スタンダード」に反映された。特に、基準 2「指導と学び」において、「遊びを通じた学び」の活動を実践しているクラスの割合や、カリキュラムに沿った十分な教材の整備が主要な指標とされた。

#### エ) 今後に向けて

地方での「遊びを通じた学び」を普及させるためには、園舎建設や教室環境整備が不可欠である。また、小学校教員や契約教員に対する幼児教育研修の必要性、改訂されたカリキュラムの浸透、教員主導型教授法からの脱却に向けた実践の積み上げ、教材等のリソー

ス不足の解消（手作り教材の製作など）、そして保護者の理解促進やコミュニティの巻き込みが求められている。

考察：

シャンティ国際ボランティア会によるカンボジアの幼児教育事業は、教育省が掲げる「遊びを通じた学び」の原則普及を目指し、2020年9月から2024年4月まで実施された。教員向けの指導ガイドブックと活動事例集を開発し、これが教育省の公式副教材として認定されるという大きな成果を上げた。また、この実践手法は2023年のモデル幼稚園スタンダードにも反映され、国の教育システム変革に貢献した。今後は、地方のインフラ不足や教員主導型教授法からの脱却、保護者の理解促進が普及の鍵となる。

担当者：亀岡 千愛

## ② スタッフインタビュー

日時：8月26日（火） 9：00～9：30

面会者：ティボーンさん

ボリーさん

概要：

シャンティ国際ボランティア会バタンバン事務所の職員として、タイとカンボジアの国境付近の地域の幼稚園で活動をしている2人の女性、ティボーンさんとボリーさんにインタビューを行った。ティボーンさんには教育や国際支援について、ボリーさんにはジェンダーや結婚観について伺った。

ボリーさんは政府から奨学金給付を受けバタンバンからプノンペンに出て、大学に通ったそうだ。大学では法学を学び、留学生受け入れなど政府関連の仕事の経験もある。ジェンダー平等について、管理職のなりやすさも大体平等だが、家庭内の家事の分担はあまり平等ではなく、感覚的には男性が家事をしている家庭は10%程度だとのこと。女性の育児と仕事の両立に関して、スキルのある女性は子どもがいても働くことが推奨され、カンボジアは大家族なので祖父母に子どもの面倒を見てもらうこともできるが、そうでない場合、女性は家にいて子育てをする。カンボジアにも育児休暇の制度があり、3カ月間は育児休暇を取ることができ、育児休暇中は給料の50%が支払われる。高等教育へのアクセスについては政府主導の女性向けの国際プログラムやITプログラムがあり女性の方が機会に恵まれているそうだ。

教育について、幼稚園児には遊び、小学生には基礎的な知識の学び、中高校生にはそれ

ぞれの科目の学びが必要であるという考えを持っていた。さらに study や learning は知識の獲得を指しているのか考える力を育むことを指しているのかを質問すると、まずは知識を獲得して、年齢が上がれば考える力も必要になるという回答であった。留学するならどの国がいいかという質問には英語が大切なので英語を習得できる国、カンボジアがどのような国になってほしいかという質問には、社会の様子は似ているが教育の質が高いからとシンガポールが挙げられた。

海外からの支援については、カンボジアはまだ発展途中のため十分とは言えないこと、国内で不正があっても海外からの介入により不正が減少したことがあること、アメリカ・日本・中国から支援を受けていることは人々に知られているが、日本からの支援の詳細については、NGO スタッフは知っていても地方の人々には知られていないということを知ることができた。韓国は草の根の支援だが、日本からの支援は国レベルの大きな支援だと認識されていることも分かった。テクノロジーやコンピュータに関する支援が重要であり、もっと多くの援助が必要であること、教育支援は海外留学のための奨学金が必要だということも伺った。

ティボーンさんにはカンボジアの若者の主体性を知るための質問もさせていただいた。仕事を改善するために主体的に動いているかという質問では、たくさんの人と関わり柔軟に改善していくため主体的に動いているという回答をいただいた。これから先の夢はあるかという質問に対しては、毎日を全力で生きているから今はないということだったが、日常生活で幸せを感じるのは、仕事で新たな交流・その新たな交流による新しい施策が生まれたときだとおっしゃっていた。

#### 考察：

カンボジアは日本よりもジェンダーギャップ指数が低く、ジェンダー平等の順位は日本より高いが、社会的なジェンダー平等は進んでいる一方で、家庭内では女性の負担が大きくなっているように感じた。年齢に応じた教育について話を伺い、日本では小学生から考える力を育むことが重視されるが、カンボジアでは幼稚園児は遊びを通して自然に学び、小学生は知識の獲得をして、自ら考えたり判断したりすることができるようになるのは中学生以上だという子ども観があることが分かった。主体的に仕事をしている人でも徴兵制についての質問になると「国が大変だから徴兵制に賛成するかもしれない、もしかしたら反対したいのに反対できない人もいるかもしれない」というあいまいな回答になり、やはり政治や社会については意見を言いにくい環境があることが見てとれた。日本からの支援について地方の一般の人々はあまり知らないという話は、町中でタイや中国の言語・製品・料理の看板を見かけても、日本の何かはあまり見つけられないという現実と合致していた。

担当者：松尾 ひなの

### ③ 幼稚園視察

日時：8月26日（火） 10：00～14：00

場所：プレクノーレン幼稚園

面会者：チャーニー先生（園長先生）

他の先生方（約4名）

概要：

プレクノーレン幼稚園は1986年に創立された。元は別の場所にあり、1995年に現在のバットンバンへ移設された。生徒数は161人。そのうち86人が女の子である。カンボジアの公的サービスとして6校目に建てられた。現在8人の教員がいて、全員女性である。その他に大学からボランティアとして2人の女性が来て、事業に参加している。シャンティ国際ボランティア会の事業によって、「遊びや環境を通した学び」に基づく活動の実践が行われている。幼稚園は5つの分野を教育指針として掲げており、それは、「1. 身体の発達と健康」「2. モラルや行動」「3. 社会的、感情的な発達」「4. 発展と理解と反省」「5. コミュニケーション」である。幼稚園では、これらの指針に沿った形で教育が行われている。例えば、子ども達は園内にある仏像にお祈りをしたり、色々な行事の日に僧侶の方が来て仏教を学んだりしているが、これは「2. モラルや行動」に基づいた教育である。その他にも、遊具で譲り合いをすることや、砂場のおもちゃで数を数えること、スポーツをすることなどの遊びを通して、教育を行っている。教室内には5つのコーナーが設けられており、それぞれ科学、衛生、アート、学習、読書となっている。魚や植物を育てたり、手洗い・うがいをしたり、図画工作をしたり、日本の絵本（シャンティ国際ボランティア会がクメール語に翻訳したもの）を読んだりして、子どもたちが学習していく環境が整えられている。

考察：

事前に学習した内容では、カンボジアの幼稚園は、小学校の1教室で、幼稚園教諭の資格がない小学校の先生が担任となって勉強するというものだった。しかし、プレクノーレン幼稚園では、日本の幼稚園と同じように、教室の中や園庭での遊びを通して、のびのびと学習していた。園児たちのインタビューでは、「幼稚園とおうちのどちらが好きですか？」のに対して、「幼稚園の方が好き」と答えられるほど、幼稚園が子どもたちにとって居心地の良い環境になっているのだと感じた。

担当者 丹野 里莉

### ④ シャンティ国際ボランティア会 家庭訪問

日時：8月26日（火） 14：00～15：00

場所：幼稚園の保護者の家庭

面会者：レケーナさん

マリネットさん

概要：

○レケーナさん：27歳の女性で幼稚園生と小学生の娘がいる。祖父、祖母、叔母、叔父、母、父、いっこ、娘2人で住んでいる。

質疑応答の内容：

Q. 身の回りでジェンダーギャップを感じるのはどんな時か。

A. 感じる瞬間はない。夫がサポートしてくれる。

Q. 家庭内で男女の役割は決まっているか？

A. 家事を女性がしている。物を売るのは男性。

Q. 自分の子どもには男女にかかわらず進学させたいと思いますか。

A. すべての子どもを進学させたい。

Q. 共働きは難しいですか。

A. 難しい。仕事と子どもの育児の両立は大変だが金銭的な問題がある（ため、共働きする必要がある）。

Q. 子どもが生まれた後、女性が仕事を続けるための会社や国の支援は十分だと思いますか。

A. 支援はない。十分ではない。

Q. 子どもの面倒を見てくれる人はあなた以外にいますか。

A. 自分だけ。

Q. 将来子どもにはどんな職業についてほしいですか。

A. 教師になってほしい。知識をシェアする人・ニュージェネレーションを作る人になってほしい。

Q. 家庭の意思決定はお母さんとお父さんどちらがしますか。またそれはなぜですか。

A. お父さんが決めることが多い。お父さんが家族の首長だから。

Q. 何歳で結婚しましたか？

A. 20 歳

Q. 結婚は大事だと思うか。またそれはなぜか。

A. 大事。仕事を一緒にするため。子どもを生むためにも必要だから。

Q. 他国からどんな支援が必要ですか。

A. 留学のための奨学金。海外からの支援についてはあまり知らない。

○マリネットさん：父、母、母の兄弟 2 人、子ども 3 人、祖母の 8 人家族で暮らしている。小学校の先生をされている。家の前に兄のお店があり、時々手伝っているそう。家は 3 年前に建てた。

質疑応答の内容：

Q. 子どもが幼稚園に通ってどんな変化があったか。

A. 子どもは心臓の病気がありあまり話さなかったが、少し明るくなり、話すようになった。

Q. 幼稚園のお迎えは誰が行っているのか。

A. 仕事があるため私（母）の代わりに、祖母がお迎えに行っている。

Q. 幼稚園の先生とはよく話すか。

A. 時々話す。

Q. 幼稚園で一番教えてほしいことは何か。

A. 文字と数字の読み書き。

Q. 先生になるためにどこで学んだか。

A. バッタンバンの教員養成校で 2 年間学んだ。

Q. どうして先生になったのか。

A. 本当は先生にはなりたくなかった。2008 年に高校を落第し、その時に兄が先生の試験があることを教えてくれた。その後試験を受け、25 人中自分 1 人だけ合格した。

Q. 先生をしていて楽しいことは何か。

A. 勉強があまりできない子を助けること。例えば数学では、難しくない数字から始め難しい数字も教え、読みでも同様に簡単な数字から難しい数字を教えている。あまり勉強をし

たくない子は遊んでばかりになってしまうから宿題はたくさん出している。そして、宿題をできなかったら、さらにたくさん宿題を出している。

Q. 子どもにはどんなことを勉強してほしいか。

A. 外国語。特に英語とフランス語を勉強してほしい。いところがフランスにいるためフランスに留学して子どもには医者になってほしい。だが、将来のことは子ども次第。

考察：

2つの家庭はかなり経済的に違いがあるように思われたが、どちらの家庭でも共通して子どもを進学させる意欲があることが分かった。また、どちらの家庭も共通して祖父母と共に住んでおり、特に祖母とは協力して育児を行うのが一般的なようだ。また、保護者が幼稚園に求めていることとして文字と数字の読み書きがあげられたことから、幼稚園が遊びを通じた幼児教育を推進していても、保護者にはその重要性が浸透していない可能性があると思われる。

担当者：石井 花

## 7) JOCV 加藤さん訪問

日時：8月27日（水） 14：00～15：30

場所：国立体育教員養成校（NIPES）

面会者：加藤舜さん（青年海外協力隊）

概要：

カンボジアの首都プノンペンに位置する「NIPES（国立体育教員養成校）」という体育教員養成学校に訪問した。そこでカンボジアで青年海外協力隊として活動する加藤さんに教員養成に関するお話を伺った。その後、学校の敷地内を見学し、体育教員の養成にはプールや陸上フィールドなど、様々な設備が必要であることを学んだ。

質疑応答の内容：

Q. 日本では保健体育のように体育の授業には「保健」も含まれるが、カンボジアではどうなのか

A. 保健の授業はない。そのため熱中症など「保健」に関する知識が不十分

Q. カンボジアで体育はどのように受け止められているのか

A. 少なくとも大人はあまりやらせたくないと思っているようだ。運動は勉強の邪魔だと思われる。運動の意義があまり伝わっていない。

Q. 職員と体育教員の男女比は？

A. 職員はほとんど同じだが男性の方が少し多い。校長が女性のため、女性の方が発言権が強いように感じる。中高の体育教員は女性が2～3割。

Q. 現在の問題点はどのような点か。

A. 専門性が不十分な状態で不正確なデータを頼りに教員養成のプログラムを進めること。それによりプログラムの形骸化が生じている。

Q. 他の国からのボランティアやスタッフはいるのか

A. 1年ほど前まで1人 KOICA のボランティア（テコンドーの教員）がいた。NIPES の教員が他国からのボランティアやスタッフを拒否することもある。

考察：

体育は子どもたちの運動機能の向上だけでなく、思考力などの向上にも大きく影響することがわかった。しかし、カンボジアでは体育教員が少ない上に質も確保できていないため、NIPES での指導が必要不可欠である。そのためには専門性を持った職員の配置や正確な情報提供などが必要であると考えた。また、学生のモチベーションを保つという点も体育教員を養成するために重要なポイントであると感じた。そのため、カンボジアに体育の重要性を広めることが、体育教員養成に非常に重要な役割を果たすと考えた。

加藤隊員は、あまり自分が主導的な位置を取りすぎず、今後の活動の持続性を考えて、やる気のある人に考え方を伝えていく方式をとっているということを強く感じた。

担当者：奥 みなみ

## 8) カンボジア日本人材開発センター（CJCC）訪問

日時：8月28日（木） 9：00～12：00

場所：プノンペン王立大学内の CJCC 事務所など

### ① CJCC 活動概要説明

面会者：増田親弘さん（チーフアドバイザー）

清水保奈美さん（JICA 専門家（ビジネス交流/業務調整））



宮嶋真也さん (CJCC スタッフ)

Song Sivon さん (CJCC スタッフ)

概要：

#### ア) カンボジアの概況と経済的魅力

カンボジアはインドシナ半島の中心に位置し、首都プノンペンが物流の要所である南部経済回廊の中間に位置する。

基本情報：国土面積は日本の約 40%にあたる 181,035 km<sup>2</sup>、人口は 2022 年時点で 1680 万人（日本の約 15%）である。公用語はクメール語で、仏教徒が 97.1%を占める立憲君主制の国である。

日本との関係：カンボジアは親日的な国民性を持ち、500 リエル紙幣には、日本の ODA で作られた「きずな橋」と「つばさ橋」のイラストと日本の国旗が描かれている。プノンペン市内外の主要なインフラの多くが日本の ODA によって整備されている。

経済の可能性：カンボジアは平均年齢 25.3 歳の若い人口構造で、「人口ボーナス期」が 2045 年頃まで続く見通しだ。GDP 成長率はインドシナ 5 カ国の中でベトナムと共に突出しており、今後も高い成長率が見込まれる。労働生産人口が多く雇用確保の点で引き続き有望だが、電気代が域内で最も高額であることが課題の一つである。

#### イ) CJCC の概要と活動

CJCC は、2004 年に王立プノンペン大学 (RUPP) 内で、ビジネス・日本語・文化・教育を 3 本柱とした人材育成の事業を開始した (JICA が運営をサポート)。

##### ● 活動の 3 本柱：

- ビジネス：ビジネス研修、ビジネスマッチング (CJBI)、就職フェアなどを行う。
- 日本語：日本語クラス (初・中級)、日本語能力試験 (JLPT)、日本語スピーチコンテストなどを実施する。
- 文化・教育：文化交流事業 (七夕/絆フェスティバル)、日本留学フェアなどを展開する。

年間訪問者は 162,231 人 (2023 年)、「絆フェスティバル」参加者数は 21,000 人 (2023 年) で、大規模な活動を展開しており、「第二の日本大使館のようだ」との声もある。

#### ウ) CJBI (カンボジア日本ビジネス投資協会) の概要と活動

- CJBI は、カンボジア企業と日本企業のビジネスパートナーシップを促進することを目的とする会員制の組織で、CJCC が運営に関わる。
- CJBI のビジョン：特に中小企業に焦点を当てた両国間のビジネスパートナーシップを促進することである。

- 活動と会員構成: ビジネスマッチングやセミナーの開催、研修などの支援を行う。  
2025 年 3 月 31 日現在で合計 106 名が会員であり、業種・職種別では、サービス業、建設・製造、農作加工業が多数を占める。
- ビジネス連携実績: 2024 年には 5 件のビジネス連携を実現した。機能性食品開発製造や医療ツーリズムなど、多様な分野での契約締結を支援している。
- CJCC と CJBI は、日本とカンボジア両国を繋ぐプラットフォームとなり、様々な団体とパートナーシップを組みながら活動を拡大している。

考察：

カンボジアは、若い人口構造による人口ボーナス期と、物流の要衝という地理的優位性を背景に高い経済成長が見込まれる。同時に、親日的な国民性が日本との関係を強化している。

この環境下で、CJCC はビジネス・日本語・文化の三本柱で、カンボジアの産業を担う人材育成を担い、年間 2 万人以上を集める「絆フェスティバル」など、巨大なプラットフォームとして機能している。また、CJBI は具体的なビジネスマッチングを通じ、両国の中小企業間の連携を促進。CJCC と CJBI は、カンボジア経済の成長と、日カンボジア間の持続可能な協力関係を築くための核となる拠点であるといえよう。

担当者：亀岡 千愛

## ② 日本語学習者インタビュー

面会者：ピアリットさん、ゴ・キンコーさん

ヴァンさん、マチさん

チャックさん、他 10 名程度

概要：

CJCC で日本語を学んでいる大学生にインタビューを行った。プノンペン王立大学で国際関係学や日本語を学んでいる学生もいれば、カンボジア工科大学で IT を学びながら日本企業でインターンをしている学生、日本に留学した経験のある学生など背景は様々であった。

結婚については、結婚は文化的に大切で、内戦で一度失われた伝統を、世代を超えて共有するには結婚が必要であるという意見があった。また、結婚は若い方がいいが、都会では学校を卒業した後であることが重視され、その一方で少数民族は 14～15 歳で結婚することもあるなど、地域による違いもあった。ジェンダー平等に関しては、女性は出産すべ

きだから本音ではあまり女性に就職してほしくない、個人的には夫婦で家事を分担すべきだと思うが実際は女性が家事を担っている家庭が多い、給料や管理職の割合・教育に関しては男女平等だが、IT系の仕事は男性の人数が多く女性がアシスタント的な働き方になっているという話も聞くことができた。出産については、出産する女性は政府から200ドルの支援を受けられること、育児に関する情報は主に自分の母親から得ること、女性の育児休暇は3カ月あるが男性は3日間であることがわかった。

海外からの支援について話を聞くと、政府の支援はプノンペン中心であることから、地方への支援がさらに必要であること、教育アクセスを増やすには移動手段である自転車や水汲みの負担を減らせるきれいな水の整備、教師の数の増加が必要であるという意見が挙がった。また、地方の教師は英語を話すことができないため、教師を育てるためにももっと支援が必要だとも聞いた。カンボジアがどのような国になってほしいかという質問には、自由に発言できる国になってほしいという意見があった。

格差について、地方には教育も習い事も仕事も機会が少ないからどんどん都会と地方で格差が生まれること、大学受験で塾に通えるのはお金持ちだけであるが、入試問題の解き方について教えるのは学校の授業ではなく塾だけであること、卒業試験の成績に応じて奨学金が出るが、奨学金がないと、地方出身者が大学に進学することは経済的に難しいことを聞いた。

教育については、カンボジアの小中学校及び高校では、自分の意見を話す機会はほとんどないことが分かった。大学に入ってはじめて自分の意見を話す授業があり、チームワークとリーダーシップの重要性を知ったこと、日本の学級活動やクラブ活動がうらやましいことを話してくれた。カンボジアの高校の授業科目はクメール語、数学、外国語（ほぼ英語だがフランス語の場合もある）、サイエンス（歴史、生物、化学）、ソーシャルサイエンス（歴史、地理、地学、環境、道徳）である。歴史ではポル・ポト時代のことも学ぶが社会や政治の仕組みなど公民科の内容を学ぶことはないそうだ。

#### 考察：

ジェンダーについて、ほかのインタビューでは、カンボジアはジェンダー平等が進んでいるから男性も家事をするのが当たり前だという話を聞いたが、大学生たちは自分の両親の姿を見てきて実際は女性が家事を担っていると感じていることが分かった。格差の問題について、プノンペン出身の学生が地方との格差を認識していることは良いことではあるが、彼らがどのくらい地方に行って実態を見たことがあるのかを聞くことはできなかった。主体性についてははっきりと小中学校・高校で主体性を発揮する場面はないと話しており、では大学生になって日本語を学んだりインターンをしたり日本の学生と関わったりと活動的な彼らの主体性は何によって育まれたものなのかという疑問の答えは、このインタビューの中ではわからなかった。政治の話はできないと小声で話してくれたこと、政党が

実質一つしかないからカンボジアが本当の意味での民主主義になっていくという期待は持っていないと話していたことも印象的だった。

担当者：松尾 ひなの

## 9) JICA カンボジア事務所

日時：8月28日（木） 14：00～15：30

場所：JICA カンボジア事務所

面会者：ナク チャンボリン Ms. NAK Chanbolin（ジェンダー担当）

テ チャントラ Mr. Te Chantra（ジャパンデスク、研修担当）

概要：

JICA カンボジア事務所に伺い、JICA の活動やカンボジアにおけるジェンダーや教育の問題点・取り組みなどに関する質問を行った。

はじめにお互いの自己紹介をした後、JICA 職員の方からカンボジアにおける JICA の取り組みについて説明を受けた。その後、質問を行い各自のテーマに関する知見を深めることができた。

質疑応答の内容：

Q. カンボジアの中で最も深刻なジェンダー問題は何か

A. 教育へのアクセスが一番大きな問題

Q. 家庭の中でジェンダーギャップを感じることはあるか

A. あまり感じない。夫は妻をサポートすることが多い。

Q. JICA やカンボジア政府はどのような教育におけるジェンダーや地域格差に関する問題に取り組んでいますか

A. JICA は教育や農業すべての分野でジェンダーに関する取り組みを行っている（ジェンダーメインストリーミング）。

Q. 日本と他国の支援の違いは何ですか

A. 日本は NGO の活動が多い。また、無償資金協力がも多いのも特徴。

Q. ジェンダーギャップをなくすためにどのような取り組みが必要だと思いますか

A. パキスタンのようにジェンダー問題が深刻な国に比べると、カンボジアは比較的ジェン

ダーギャップが少ない。女性省が設立され、ジェンダーを各省庁にメインストリーミングしたことが良かったと感じる。JICA もジェンダーに着目したプロジェクトをいくつかやっている。個人的には経済的エンパワメントにおけるジェンダーメインストリーミングが大切と感じる。

インターンの学生が所属する大学院での女性割合は 70%であることから、高等教育におけるジェンダーギャップは特に少ないとのこと。

質疑応答の内容：

Q. カンボジアで 20 年前と比べて最も変化したところはどこですか。

A. インフラが非常に発達した。特に主要道路が発達し、交通の利便性が上がった。インフラ整備は JICA の優先分野でもある。

Q. JICA の活動はカンボジア国民によく知られていますか。

A. 昨年どれほどの人が JICA について知っているか調査したところ、知っている人は 50% 以下だった。カンボジア人はきずな橋やつばさ橋が日本政府からの支援で作られたことは知っているが、他のことなど、詳しいことは知らない。

Q. カンボジアでの支援はどのように決定されるのか？支援が足りない部分はどこか？

A. カンボジア政府が 5 か年の開発計画を策定している。それを基に、JICA 以外のドナーも含めてどのような支援を行うかを決定している。特に支援が足りないと感じることはない。

考察：

JICA カンボジア事務所は、インフラ整備や教育、農業など多岐にわたる分野で支援を行い、カンボジアの社会課題の解決に尽力していることがわかった。中でも橋や道路をはじめとするインフラ事業に重点を置いており、カンボジアの交通網の発展や人々の生活水準の向上に大きく貢献していると感じた。

また、ジェンダーに関する質問をいくつか行ったが、回答に少し戸惑っているように感じた。そのため、カンボジア国内ではジェンダーという概念が一般化していないのではないかと考えた。もしくはジェンダーという言葉は存在していても、私たちが日本で使用しているジェンダーとは少し意味合いがことなるのではないかと考える。私たちが当たり前で使用している言葉や概念が、他国では異なる意味を持ったり、そもそもその概念が存在しないこともあるということを知ることができた。

担当者：奥 みなみ

## (6) 写真



プレア・ノロドム小学校



プレア・ノロドム小学校の副校長にインタビュー



デジタル・ラーニングセンターでスタッフにインタビュー



トゥール・スレン虐殺博物館の視察



テラ・ルネッサンス研修参加者へのインタビュー



スタッフの皆さんとランチ(春巻き)作り



シャンティ国際ボランティア会スタッフインタビュー



訪問した幼稚園でスカーフのお土産をいただきました





幼稚園に通う子どもたちにもインタビュー



国立体育教員養成学校を加藤さんの案内で見学



プノンペン王立大学で日本語学習者にインタビュー



学生の皆さんに、校内を案内していただきました



バットンバン近郊の家庭訪問



JICA カンボジア事務所でのインタビュー



アンコール・ワット訪問



市場調査で訪れた中央市場では大きな果物が沢山

## 2-2 ブータン

### (1) ブータン基礎情報

※外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html> (2025/10/31 最終閲覧) 他から抜粋、加筆

面積	約 3 万 8,394 平方キロメートル (九州とほぼ同じ)
人口	約 78.6 万人 (2023 年：世銀資料)
首都	ティンプー (Thimphu)
民族	チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
言語	ゾンカ語 (公用語) 等
宗教	チベット系仏教、ヒンドゥー教等
政体	立憲君主制
主要産業	農業、林業、電力 (水力発電)、観光
名目 GDP	29.0 億ドル (2022 年：世銀資料)
一人当たり GDP	3,590 米ドル (2022 年：世銀資料)
経済成長率	5.2% (2022 年：世銀資料)
経済概況	<p>(1) ブータン政府は、1961 年以降、5 年ごとに策定される開発計画に基づく社会経済開発を実施。2018 年からは、第 12 次 5 カ年計画が開始された。就労人口の多くが農業に従事しており農業が重要な位置を占めているが、近年は水力発電所の建設や周辺国への売電を含む電力セクターの開発により、工業部門の GDP に占める割合が上昇している。</p> <p>(2) ブータンは、国内市場が小さく、ほとんど全ての消費財や資本財をインド及び他国からの輸入に依存しているため、慢性的な貿易赤字を抱えている。インドとの輸出入が圧倒的なシェアを占める中で、インド・ルピー以外の外貨収入を得る手段として豊かな観光資源の開発も重要な課題となっている。</p> <p>(3) 開発の原則として、国民総生産 (GNP) に対置される概念として、国民総幸福 (GNH: Gross National Happiness) という独自の概念を提唱している。経済成長の観点を過度に重視する考え方を見直し、(ア) 経済成長と開発、(イ) 文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、(ウ) 豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、(エ) 良き統治の 4 つを柱として、国民の幸福に資する開発の重要性を唱えている。</p>
略史	<p>17 世紀、この地域に亡命したチベットの僧侶シャブドゥン (ガワン・ナムゲル) が、各地に割拠する群雄を征服し、ほぼ現在の国土に相当する地域で聖俗界の実権を掌握。</p> <p>19 世紀末に至り東部の豪族ウゲン・ワンチュクが支配的郡長として台頭し、1907 年、同ウゲン・ワンチュクが僧侶や住民に推され初代の世襲国王に就任、現王国の基礎を確立。1952 年に即位した第 3</p>



	<p>代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュクは、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始したが、1964年、当時の首相暗殺やその後に任命された首相による宮廷革命の企み発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。1972年に16歳で即位した第4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュクは、第3代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、王政から立憲君主制への移行準備を主導。2006年12月、第4代国王の退位により、現国王（第5代国王ジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク）が王位を継承。2007年12月及び2008年の総選挙を経て、2008年4月に民主的に選出されたジグミ・Y・ティンレイ政権が誕生し、5月には国会が召集され、7月に憲法が施行し、王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主制に移行した。</p> <p>2008年11月に、現国王の戴冠式が行われた。2013年に第2回総選挙、2018年に第3回総選挙が実施された。2024年1月に第4回総選挙が実施され、ツェリン・トプゲ国民民主党（PDP）党首が2期ぶりに首相に就任した。</p>
--	---

## （２） 参加者名簿

氏名	学年	学部・学科・専攻（コース・講座）
鮫島 さくら子	4年	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
皆川 響	4年	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
引率者		
宮原 千絵	特任准教授	グローバル協力センター（副センター長）
平山 雄大	講師	グローバル協力センター

## （３） 現地調査日程

	月日	主な活動内容	宿泊地
0	9月15日（月）	・ 羽田空港集合	—
1	16日（火）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 羽田空港出発</li> <li>・ バンコク・スワンナプーム空港到着</li> <li>・ パロ空港到着</li> <li>・ ブータン日本語学校訪問</li> <li>・ ブータン日本語学校の学生と交流</li> <li>・ ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）</li> </ul>	ティンプー
2	17日（水）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JICA ブータン事務所訪問</li> <li>・ JICA ブータン事務所ナショナル・スタッフの方々へインタビュー</li> <li>・ 織物博物館、Kelzang Handicraft 訪問／各自の研究活動（インタビュー等）</li> <li>・ タシチョ・ゾン訪問</li> </ul>	ティンプー

3	18 日（木）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ モティタン高等学校、Bhutan Overseas Jinzai Private Limited、内務省、Project Dragon 訪問／各自の研究活動（インタビュー等）</li> <li>・ ティンプー市内散策</li> </ul>	ティンプー
4	19 日（金）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流</li> </ul>	ガサ
5	20 日（土）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ガサ温泉、ガサ・ゾン訪問</li> <li>・ ガサ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）</li> <li>・ 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流</li> </ul>	ガサ
6	21 日（日）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クルタン市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）</li> <li>・ ロイヤル・ティンプー・カレッジ訪問</li> </ul>	パロ
7	22 日（月）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ タクツェン僧院訪問</li> <li>・ パロ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）</li> </ul>	パロ
8	23 日（火）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ノルブリン・ライター・カレッジ訪問／各自の研究活動（インタビュー等）</li> <li>・ パロ空港出発</li> <li>・ バンコク・スワンナプーム空港到着</li> </ul>	機内
9	24 日（水）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 羽田空港到着・解散</li> </ul>	—

#### （４）調査報告書

氏名	タイトル
鮫島 さくら子	「ブータンの民族衣装をめぐる産業とアイデンティティ」
皆川 響	「ブータンの若者の人生観と職業選択についての調査」

## ブータンの民族衣装をめぐる産業とアイデンティティ

生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 4年

鮫島 さくら子

### 1. 調査テーマ

今回の調査にあたり、「ブータンの民族衣装をめぐる産業とアイデンティティ」とテーマを設定した。ブータンでは伝統衣装であるゴ（男性用）やキラ（女性用）の着用が公共の場で義務づけられており、その服装は単なる装いにとどまらず、国家的アイデンティティの象徴として位置づけられている。一方で、都市部を中心に洋服が普及し、若年層では民族衣装をファッション的に再解釈する動きも見られる。そこで、本研究では①着こなしの世代差、②民族衣装産業の保護、③流行の形成、という3つの視点から分析し、民族衣装が社会と個人の間でいかに意味づけられているかを明らかにすることを目的とした。

### 2. 調査設問

#### ① 着こなしの世代差

（現地で出会った人々）

- ・ゴ・キラを着用する際のこだわりについて
- ・他の世代のゴ・キラの着こなしについて気になる点があるか

加えて、各訪問先において、孫世代（～20代）、親世代（30代～40代）、祖父母世代（50代以上）と区分し、ゴ・キラの着用について観察を行った。

#### ② 民族衣装産業の保護

（服飾店）

- ・ゴ・キラの売り上げの変動とその要因について
- ・顧客の世代について

（織物販売店）

- ・織物産業に対する政府・地域行政からの支援の有無について
- ・ブータン国内における生産体制について

（内務省）

- ・学校や公共の場でゴ・キラを着用する意義について
- ・学校でのゴ・キラの着用に関する指導について

（現地で出会った人々）

- ・ゴ・キラ／洋服にかかる年間の被服費について
- ・民族衣装と洋服ではどちらをより好むか

#### ③ 流行の形成

(ファッション・プレス)

- ・ブータン国内におけるファッション情報の発信拠点について
- ・プレスからゴ・キラのスタイリングを発信する意義について

(現地で出会った人々)

- ・ファッションの参考にしているメディアについて
- ・ゴ・キラ／洋服を購入する場所について

以上3つの視点からの分析により、民族衣装が国家的な規範として存在しつつも、個人の表現や消費の文脈において現代的な着こなしへの変化を柔軟に受容している実態を明らかにする。これを踏まえ、被服を通じた文化の継承と変容のあり方について考察する。

### 3. 調査結果

#### ① 着こなしの世代差

ゴ・キラの着こなしについて、各世代で違いが表れる結果となった。詳細については、下の表の通りである。

	着こなしの観察	インタビューでの声
孫世代 (～20代)	<ul style="list-style-type: none"><li>・着脱が簡単なハーフキラを好む</li><li>・靴・小物の選び方で個性を出す</li><li>・着用義務がない場面では洋服を着用していることが多い</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・テゴ（女性用のトップス）によって留めるピンを使い分けしている</li><li>・ハイヒールを合わせて、背を高くみせている</li></ul> など
親世代 (30代～40代)	<ul style="list-style-type: none"><li>・ゴのひだを綺麗に出す丁寧かつ上品な着方にこだわる</li><li>・着用義務がない場面ではトップスのみ洋服を着用していることが多い</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・手織りの上質なものは一目で分かるため値が張っても注文する</li><li>・重ね着を省略せず、正統の着方をする</li></ul> など
祖父母世代 (50代～)	<ul style="list-style-type: none"><li>・女性はショートカットの人がほとんどである</li><li>・着用義務がない場面でもフルキラを着用していることが多い</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・着慣れているフルキラを選ぶ</li><li>・若い世代のゴ・キラ離れは心配だが、仕方がないと思う</li></ul> など

#### ② 民族衣装産業の保護

供給側の回答からまとめる。服飾店での聞き取り調査より、ゴ・キラの売り上げは好調であり、変動は少ない。その要因として、国家より民族衣装を着用しなければならない場面が明確に定められており、着用義務がある限り需要も継続することが挙げられた。顧客の世代としては、若年層が多い。他の世代と比較して行事やイベントへの参加が盛んであ

り、そのたびに民族衣装を新調する機会が多いことが理由として挙げられた。織物販売店での聞き取り調査より、織物産業への政府・地域行政からの支援は行われていることが分かった。王立織物博物館との契約により、織物の材料となる綿を仕入れることが可能となっている。ブータン国内における生産体制について、公教育での織物に関する知識や実体験の習得は低い傾向にあり、家業として家庭での伝承が大きな役割を担っている。織り手の育成と大量生産される安価なインド製品への対抗が課題として挙げられた。

次に、消費者側の回答をまとめる。ゴ・キラ／洋服にかかる年間の被服費について、都市部（ティンパー／プナカ／パロ／プンツォリン）と非都市部（ガサ）の間で差が出る結果となった。また、民族衣装と洋服ではどちらを好むかについて、民族衣装との回答がやや優勢となった。結果は下の表の通りである。

回答者番号	年代	居住地	年間被服費	好み
1	30代	ティンパー	—	民族衣装
2	30代	ティンパー	—	洋服
3	20代	ティンパー	捕捉できないほど多い	洋服
4	20代	ガサ	ほぼ支出しない	民族衣装
5	20代	ガサ	約 10,000 ヌルタム	洋服
6	50代	ガサ	約 2,000 ヌルタム	民族衣装
7	40代	プナカ	約 40,000 ヌルタム	民族衣装
8	10代	プンツォリン	約 15,000 ヌルタム	民族衣装
9	10代	パロ	約 20,000 ヌルタム	民族衣装
10	20代	パロ	約 20,000 ヌルタム	洋服

続いて、公的機関の立場から、内務省の回答をまとめる。学校や公共の場でゴ・キラを着用する意義について、これらの民族衣装はブータン人にとって大切なアイデンティティであり、ゾンカ語を話すことと並んで重視される。学校での指導について、正しく着用できているか細やかなチェックが定期的に行われ、子どもたちは学生の間に規範を身につけることができる。正しく着用することは重要なマナーのひとつであり、国家レベルでの感覚の共有と規範の徹底が図られている。

### ③ 流行の形成

ファッション・プレスでの聞き取り調査より、ブータン国内におけるファッション情報の発信拠点については、現在発展途上にあると分かった。ファッション誌の刊行を同プレスで予定しているほか、国内でのファッションショーの開催を目指している。同プレスから、ゴ・キラのスタイリングを発信する意義について、国家への帰属意識が強くブータン人としての姿を示すため、という回答が得られた。

ファッションの参考にしているメディアとしては、世代を問わず TikTok が多く挙げら

れた。学生層では、TikTokに加えてInstagramの利用も目立つ。流行の伝播についてSNSが広く普及していることが分かった。ゴ・キラ／洋服を購入する場所について、都市部のティンブー、プナカ、パロではそれぞれの街で購入するという回答が多かった。一方、非都市部のガサでは、プナカやティンブーまで出向いて購入するという回答が得られた。SNSの発達により情報の入手は容易であるものの、流行の実践は都市部に偏っていることが分かった。

#### 4. 考察

##### ① 着こなしの世代差

世代ごとの着こなしの違いから、民族衣装に対する価値観や生活様式の変化がうかがえる。孫世代（～20代）は利便性や個性の表現を重視し、現代的にアレンジしているのに対し、親世代（30代～40代）・祖父母世代（50代～）では正統的な着こなしや形式を重んじる傾向が見られた。これらの差異は、社会の近代化や洋装の普及に伴い、民族衣装着用の意識において「義務」の要素を残しつつも、「選択」としての側面が次第に強まっている変化の途上にあると考えられる。

##### ② 民族衣装産業の保護

供給・消費・公的機関の三者の視点から、民族衣装が国家的規範として強く位置づけられている実態が明らかとなった。着用義務の存在が需要を支え、特に若年層では行事参加を通じた新調の機会も多い。洋装も普及しているが、民族衣装を支持する声も大きい。一方で、織物産業は家業としての伝承に依存している体制であり、インド製品との競合が今後ますます課題となるだろう。また、学校教育を通じた着用規範の共有が国家的に行われており、民族衣装は単なる衣服ではなく、文化的アイデンティティを維持する重要な要素として機能している。

##### ③ 流行の形成

情報発信・消費行動の両面から、ブータンにおけるファッション文化の都市集中が示唆された。SNSの普及により全国的に流行情報へのアクセスは容易になっているが、その実践や購買は都市部に偏っている。これは、都市部での購買機会の確保や経済的余裕に加え、非都市部とのインフラ格差が影響していると考えられる。今後、国内メディアの発展やファッションイベントの開催が、今以上に地域間の格差を拡大させる可能性もあると考えられる。

以上より、民族衣装であるゴ・キラは産業と行政の支えにより、国家的アイデンティティとして十分に機能しつつも、個人の消費活動においては世代や被服への価値観に合わせて

着用のあり方が変化し、生活様式によって柔軟に受け入れられていると考えられる。

## 5. 調査に参加した感想

現地調査を通して、ブータンの人びとの温かさと穏やかな国民性を強く感じた。訪れた先々で、あたたかく迎え入れてもらい、インタビューにも真摯に応じてくれたことが印象に残っている。また、街を歩く人々のファッションや街並みの色使いが上手で、伝統的な要素と現代的な感覚が自然に調和していることに感心した。一方で、都市部・非都市部の両方に赴いたことで経済的な格差が目に見えて存在することも実感した。しかし、それぞれで大切にしている価値は異なり、自分にとっての幸せをそれぞれの形で体現しているように受け止められた。どの地域においても、文化を大切にし、その価値を日々の生活の中で実践している姿はとても誇り高く、内面の豊かさを感じることができた。

## 6. 参考文献

Royal Textile Academy (2022) *Youth Attitudinal Survey on Weaving, Designing and Textile Culture in Bhutan: Survey Report 2022*, Thimphu: Royal Textile Academy.

## ブータンの若者の人生観と職業選択についての調査

生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 4年

皆川 響

### 1. 調査テーマ

#### 1-1 調査の背景と目的

ブータンは「国民総幸福量（GNH）」の理念にもとづき、物質的な発展と精神的な発展のバランスを取りつつ、国民の幸福度に重点を置いた国家運営を行っている。在東京ブータン王国名誉総領事館（2025）によると、ブータンにとって、経済的な発展は「持続可能な開発の促進」「文化的価値の保存と促進」「自然環境の保全」「善い統治の確立」の GNH の 4 つの柱のひとつにすぎず、最重要視されるものではないという捉え方である。

しかしながら、上記のような方法で「国民が幸福な国」を目指しているのとは裏腹に、多くの若者が国外へ流出していることが、現代ブータンが抱える問題のひとつになっている。

そこで本調査では、GNH の理念下での、ブータンの若者にとっての人生観や経済的な成功の位置づけと職業選択の際に重視する要素を明らかにし、国外流出の背景にある若者心理を探ることを目的とする。

#### 1-2 ブータン人の国外流出

##### 1-2-1 概要

ブータンではオーストラリアへの移住者が近年増加傾向にあることが注目されている<sup>1</sup>。移住者には、若く、高度な教育を受けた層や専門的なスキルを持つ層が多く、小国の中枢を担う人材の流出が生じている<sup>2</sup>。

移住者の 46%がブータンでは専門職に就いていたが、移住先では介護や清掃などの非熟練職に就くことが多く、キャリアの大幅な格下げが生じている（The World Bank 2025）。

##### 1-2-2 国外流出の動機

オーストラリアへの移住の動機として最も強いものは、高収入とより良い教育機会といった側面である（The World Bank 2025）。また、ブータン国内では若年層の失業率が高く、2024 年には全体の失業率が 3.5%であるのに対し若年層失業率は 19.0%となっており（National Statistics Bureau 2024）、これも一因と言えるだろう。

### 2. 調査設問

以上より、ブータン政府が理想とする経済的発展を主眼としない GNH 政策と、経済的



成功への渴望から国外に移住する人が多いという現状の間に乖離が生じていることが分かる。

そこで、ブータンの若者が理想とする人生観と、経済的成功への価値づけの実態、そして若者がどのような要素を重視して職業選択しているのかを明らかにしたい。

**【若年層（10代～20代、学生・社会人）中心に行く先々で出会った方々に対して】**

Q1-1 あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか。具体的に教えてください。

Q1-2 ブータンの GNH の理念の 9 つの領域のうち、あなたの考える「良い人生」として重要だと思うものをいくつか選んでください。

Q2 「良い人生」を送るうえで、経済的な豊かさはどのくらい重要だと思いますか。

Q3 職業を選択する際に重視する／した要素は何ですか。

Q3 については、マイナビ株式会社（2025）の調査より「就職観」に関する基準を用い、以下の選択肢を用意した。

収入／楽しく働きたい／自分の夢のために働きたい／ワークライフバランス／社会的評価／人のためになる／キャリアアップ／社会的貢献

**【人材派遣会社に対して】**

Q4 ブータンの若者が海外へ渡航する主な理由は何だと考えますか。経済的な要因以外に、どのような動機がありますか。

Q5 もし高い給料や良い就職先があったら、ブータンに残る人は多いと思いますか。

Q6 企業として、若者のキャリア形成や海外での活躍をどのように支援していますか。

調査方法：インタビュー

調査対象者：若年層中心に行く先々で出会った方々、人材派遣会社

### **3. 調査結果**

Q1-1 あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか。具体的に教えてください。

質的に得られた回答をカテゴリー化し、グラフにしたものが図 1 である。

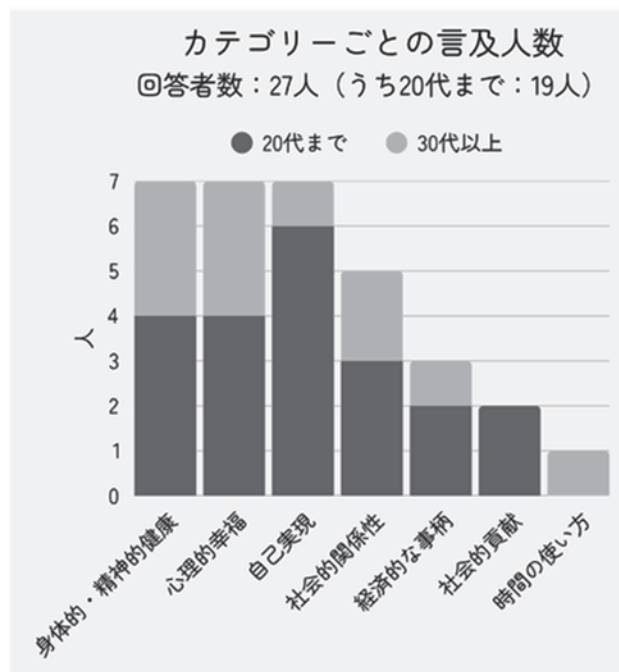


図 1

以下に抜粋した回答を紹介する。

#### 身体的・精神的健康

- ・心理的な緊張や問題がない（19 歳・学生）

#### 心理的幸福

- ・自分が持っているもので満足する（24 歳・学生）
- ・「ハピネス」がある（20 歳・学生）

#### 自己実現

- ・生きている意味を理解できる（19 歳／20 歳・学生）
- ・一度きりの人生、自分の生きた証を残したい（27 歳・起業家）

#### 社会的関係性

- ・友達や家族と過ごせる（25 歳・モデル）

#### 経済的な事柄

- ・お金も大切だが、家と食料があれば良い（10～20 代・学生）
- ・より多くの雇用機会がある（19 歳・学生）

Q1-2 ブータンの GNH の理念の 9 つの領域のうち、あなたの考える「良い人生」にとって重要だと思うものをいくつか選んでください。

各領域に言及した人数をグラフにしたものが図 2 である。

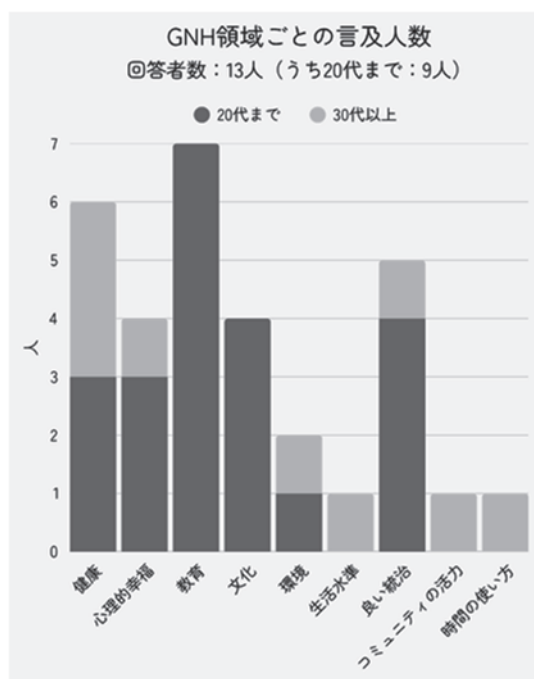


図 2

Q1-1 の結果からは、20 代以下の若者が人生において自己実現を求めていることが分かる。また Q1-2 の結果からも、GNH の 9 領域のうち教育に言及する若者が多いことから、自己に対する投資を重視している、つまり同じく自己実現への欲求があることが推察される。

また、Q1-2 の結果で注目すべき点として、9 人の若者のうちそれぞれ 4 人が文化の多様性と良い統治に言及していることを挙げたい。

Q2 「良い人生」を送るうえで、経済的な豊かさはどのくらい重要だと思いますか。  
回答結果を表 1 に示した。

表 1

回答者番号	属性		年齢	Q.2. 経済的豊かさの重要性 (理由)
1	日本語学校生	女	19	とても重要。精神的な健康の次にお金が大事。
2	日本語学校生	女	24	とても重要。お金があれば取りたい選択肢を取れるから。食事、交通、家、全てにおいて好きに選べる。ホテルで働いているが、お金持ちは食べたいものを食べられ、彼らは良い人生を送っていると思う。
3	日本語学校生	男	25	大人になってからお金の重要性が分かった。
5	JICAスタッフ	男	40代くらい	とても重要。ティンブーでは家賃が11,000~15,000Nuで、月給の半分に当たる。
6	JICAスタッフ	男	31	とても重要だが全てではない。一番は心理的幸福。
9	ミスブータン	女	25	一番大事。お金があれば健康にも美容にも投資できる。
12	獣医	男	30代くらい	一番大事なのはメンタルヘルス。お金は二番目に大事。
13	カフェスタッフ	女	24	ハビネスが一番大事。ハビネスがあるとお金が入ってくる。お金は二番目。
16	病院スタッフ	女	20代くらい	お金はあってもなくてもいい。
18	パロ教育大学生	男	19	幸せに生きているなら、お金はそんなにいらない。
19	パロ教育大学生	男	20	お金が一番重要。
20	パロ教育大学生	男	19	お金が一番重要。
21	パロ教育大学生	女	18	お金が一番重要。
22	ノルブリンライターカレッジ生	女	19	とても重要。勉強するためにノートを買うのにもお金がかかる。
23	ノルブリンライターカレッジ生	男	20	親が頑張ってくれたから大学に通えた。たくさんのお金が無くても幸せ。
a	日本語学校生	不明	10代~20代	将来のため、学歴のためお金は必要。でも家族よりは大切ではない。
a	日本語学校生	不明	10代~20代	お金がありすぎるとトラブルが増えると思う。
a	日本語学校生	不明	10代~20代	お金は必要だが、生活できるだけであれば良い。

また、質的に得られた回答を、重要度が高いものを 5、低いものを 1 とし主観的に 5 ~1 に分類し、図 3 に示した。

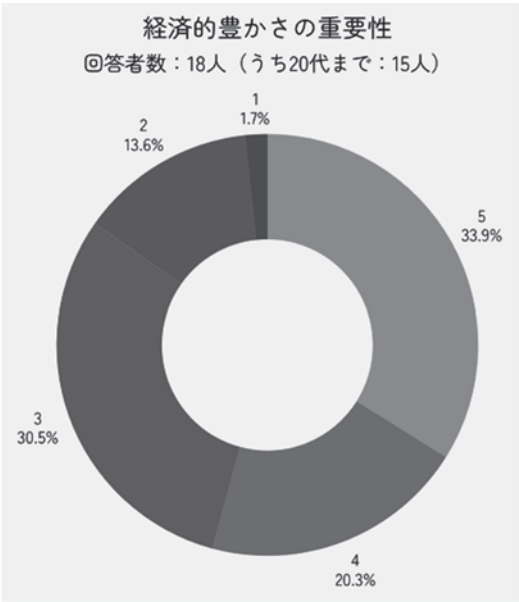


図 3

重要度が高い回答では、生活の基盤、選択肢の拡大、健康・美容への投資といった実用的な理由や、お金を最優先する考えが目立つ。次に重要度が中程度の回答では、お金の必要性を認めつつも、家族や精神的健康といった他の価値観とのバランスを重視する視点が見られる。そして重要度が低い回答では、幸福や人間関係の優先、お金が多すぎることへの懸念、必要最低限で十分という考えが示されている。

### Q3 職業を選択する際に重視する／した要素は何ですか。

この設問の回答者数は 19 人で、うち 20 代以下が 12 人である。回答結果を表 2 に示した。

表 2

日本語学校生（3 人）	楽しく働く（2 人）、収入（2 人）、人のため（2 人）、夢のため（1 人）、ワークライフバランス（1 人）
JICA ナショナル・スタッフ（4 人）	キャリアアップ（3 人）、楽しく働く（1 人）、夢のため（1 人）
起業家（1 人）	夢のため
モデル（1 人）	楽しく働く、社会的貢献、夢のため
獣医（1 人）	楽しく働く、ワークライフバランス
カフェスタッフ（1 人）	夢のため
病院スタッフ（4 人）	社会的貢献（3 人）、収入（2 人）
パロ教育大生（3 人）	夢のため（2 人）、楽しく働く（1 人）、社会的貢献（1 人）、収入（1 人）
ノルブリン・ライター・カレッジ生（2 人）	夢のため（2 人）、楽しく働く（1 人）、社会的貢献（1 人）、社会的評価（1 人）

いくつかの属性に特徴的な点が見られる。まず JICA ナショナル・スタッフは、キャリアアップを重視する傾向が他の属性よりも顕著である。病院スタッフは、社会的貢献と収入を重視する傾向がある。モデルと起業家の 2 人は、楽しく働くことや自分の夢のため、社会的貢献といった、より個人の価値観や社会への影響を重視する傾向がある。年齢層による違いも存在する。20 代以下の若者は、楽しく働くことと夢のために働くことを重視する傾向が強い。それに対し、30 代以上では現実的なキャリア形成や社会貢献を意識する人が多い。特に JICA スタッフや病院スタッフなど、専門職に就いている人が多い年齢層で顕著である。

### Q4 ブータンの若者が海外へ渡航する主な理由は何だと考えますか？経済的な要因以外に、どのような動機がありますか。

A4 一番目の理由は海外の給料の高さ（国内の給料の低さ）。二番目は国内の就職先不足。年間の大卒者数が 2 万人だとすると、公務員になれるのは 1,000 人ほど。民間企業の給料

は安いので不人気である。

**Q5** もし高い給料や良い就職先があったら、ブータンに残る人は多いと思いますか。

**A5** 最近の人々はより高い給料を得たいと貪欲になっているので、残らないかもしれない。例えば、大学院修了後に公務員として地位を確立した人が公務員を辞めてオーストラリアでトイレ清掃の仕事をしている事例がある。その理由は、オーストラリアでトイレ清掃をしたほうがブータンの国家公務員をするよりも給料が高いから。

**Q6** 企業として、若者のキャリア形成や海外での活躍をどのように支援していますか。

**A6** 企業としては、帰国後のキャリア相談などのサポートを実施している。出国時のオリエンテーションから帰国までは政府が関与している。現在、政府は海外からの人材を呼び戻すプログラムを施行中である。

#### **4. 考察**

##### **4-1 経済的成功の「重視度」をめぐる多様な選択**

調査の結果から、若年層の間でも人生観や経済的成功への価値づけに個人差が大きくなることが分かった。この価値観の多様性がキャリアパスの選択に影響を与えており、若者は、経済的成功を人生における「絶対的な目標」とするか、あるいは「充足的な基盤」とするかによって、異なる道を選び取っていると考えられる。

前者にあたる者は、高報酬追求層として何よりも収入の高さを優先する層だと考えられる。彼らは国内に限られた市場・機会に留まらず、より大きな経済圏を持つ国外での機会を求めている。後者にあたる者は、経済的成功を相対的・充足的な基準（例：「家と食料、困らない程度」）で捉える層だと考えられる。そのうえで、「ブータンが好き」「ワークライフバランスを大事にしたい」といった時間的・心理的幸福を優先する。この価値観は、GNHの理念を現代的な生活の中で主体的に解釈し、それがキャリア選択の基盤となっているものと解釈できる。このような傾向に基づき、それなりの収入やキャリアアップ、ワークライフバランスを求める層は JICA などの国際機関や公務員等を選択し、収入を相対的に重視しない層は国内で自己実現やワークライフバランス、社会的貢献に資する職業を選ぶという構造があるのではないだろうか。

##### **4-2 経済的成功以外の要素**

Q1 や Q3 から明らかになったように、若者は国外・国内の志向に関わらず、自己実現を「良い人生」の重要な要素とし職業選択の際に重視する傾向がある。この自己実現への普遍的な要求は、国内での仕事を選択する際、単なる給与や安定といった外発的動機だけでなく、内発的な動機を重視していることを示している。

また、文化の多様性と良い統治に言及する若者が多いことに加え、Q3 に対して「ブータンの社会への貢献」として「政府」や「国民」のためと明確に答える者がおり、ブータンという国への誇りや愛国心が根づいていることが推察される。

以上の要素が、経済的合理性を求めた国民の国外流出の対抗策への足掛かりにできるのではないだろうか。

#### 4-3 ブータン政府への提言

ブータンの人々は、愛国心、収入、ワークライフバランス、家族とのつながり、自己実現といった多様な要素の中でせめぎ合いながら、各自の人生における優先順位に従って生き方を選択している。現状、国内の低賃金と海外の高賃金の差をすぐに埋めることは難しい。そのため、政府は市場拡大や単に賃金を上げるだけでなく、若者に対し、GNH 政策のさらなる訴求と、安定したワークライフバランス・コミュニティの強さなどの非金銭的報酬を国内で働くことの「付加価値」として提供し、維持していくことに力点を置くべきではないだろうか。

#### 5. 調査に参加した感想

日本で調査の準備をしていたときは、「幸せの国ブータン」というイメージから、ブータンの人はそれほど経済的成功を重視していないし、日本人よりも欲に執着しない仏教的な考えを持っているのではないかとぼんやり思っていた。しかし、初日の首都ティンプーではそれは覆された。日本語学校の同年代の女子学生と自由時間で街に繰り出すと、タピオカ店、中国製の安価で可愛い品物を取り扱う雑貨店、渋滞する車の列といった光景を目にした。どこの国でも当たり前前に皆新しいものが好きで、特に若者が流行に乗りたがるのは共通していると思った。ガサやパロでは、地方出身の私は「何か地元に似ているな」と思うことがあった。日本とブータンの人々はコミュニケーションスタイルや見た目や服装は違うけれども、人間の根源的な欲求のようなものはそう変わらないのだと感じた。

ただ、驚いたことはブータンの人々の商売っ気の無さである。もう少し皆商魂逞しくなれば、さらなる経済発展が見込めそうだった。

とにかく、今回は実際に現地に赴いて調査をすることで得られる情報量が大変多いことに気づくことができた。事前調査で不十分な点は多々あったが、それを含めてもとても学び多い、一生モノの経験となった。

#### 6. 注

- 1 オーストラリアへの移住者の数は、2020 年の 12,424 人から 2024 年には 25,363 人へと倍増した (The World Bank 2025)。
- 2 一般の労働年齢人口では大卒以上の学位を保有する者がわずか 7%であるのに対し、移

住者では 53%となっている。また、全移住者のほぼ半数が以前公務員であった (The World Bank 2025)。

## 7. 参考文献

National Statistics Bureau (2024) *2024 Labour Force Survey Report: Bhutan*, Thimphu: National Statistics Bureau.

The World Bank (2025) *Migration Dynamics in Bhutan: Recent Trends, Drivers, and Implications*, Washington DC: The World Bank.

株式会社マイナビ「2026 年卒大学生就職意識調査」<https://career-research.mynavi.jp/wp-content/uploads/2025/04/shushokuishiki-25-01.pdf> (2025/10/28 最終アクセス)

在東京ブータン王国名誉総領事館「国民総幸福量 (GNH)」<https://bhutan-hcg.org/about-bhutan/culture/gnh/> (2025/10/28 最終アクセス)



## （５）訪問記録

### 1) ブータン日本語学校訪問

日時：9月16日（火） 15：00～16：45（～19：00）

※16：45～19：00 は日本語学校の学生と市内散策

場所：ブータン日本語学校

面会者：青木薫校長

ブータン日本語学校の学生 3 名

概要：

ブータンに到着した日の午後に訪問した。最初の自己紹介は全員日本語で行い、書き取りをした。その後は英語で、研究課題に関する質問と日本語学校の学生からの日本に関する質問の時間とした。

訪問後には日本語学校の学生 2 名とティンプーの街中を散策した。会話は英語と日本語を交ぜて行った。伝統衣装であるキラを買い、それを着てティンプーの若者が訪れるホットスポットを巡った。初日から緊張がほぐれる良い時間となった。

質疑応答の内容：

Q. 子どもの頃に受けた親からの教えで、印象深いものや今でも糧にしているものはありますか。

A. 人に親切にしてください。

A. 食べ物を粗末にしない。食べられる分だけ取りなさい。

A. 嘘をつかない。

A. ディグラム・ナムジャという、食べ方や歩き方などのマナー・所作を大切にしてください。

Q. あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか。

A. 健康であること。自分が今持っているもので満足すること。

A. 家族や友達がいること。みんなが健康なこと。

A. 時間を上手に使えること。

A. お金も大切だが、家と食料があればいい。

A. 社会に役立つ仕事をする事。

A. 好きなところへ行けること。

A. 自分のことは全部自分ででき、その後に他の人を助けられること。

Q. 「良い人生」を送るうえで、お金はどれくらい重要だと思いますか。

A. とても重要。お金があれば好きな選択肢を選べるから。お金があって好きなものを選べる人は良い人生を送っていると思う。

A. とても重要だが、一番ではない。

A. お金は必要だが、生活できるだけあればいい。

A. お金がありすぎるとトラブルが増えると思う。

A. 将来のため、学歴のためお金は必要。でも家族よりは大切ではない。

Q. 将来、どんな仕事につきたいですか。

A. 今は何も分からない。

A. ワークライフバランスを大切にしたいから、介護の仕事。ケアをしつつお金も得れる。

A. まだ決まっていないが、人を助けられる仕事がしたい。

Q. ナショナルドレスを着ているときと、洋服を着ているときでは、気持ちが切り替わる感覚がありますか。

A. 変わらない。

A. お祭りのときいいキラを着ると嬉しい。

Q. ブータンの学校で着用する制服について、どんな印象を持っていますか。

A. 動きにくい。フルキラはやめてほしい。

A. 夏は暑い。

A. 日本の制服は可愛いと思う。

考察：

25 歳になっても将来の仕事が決まっていない学生がいたが、新卒一括採用が一般的な日本の感覚からすると意外な発見だった。しかし、これは単なる個人の問題ではなく、若者の高い失業率やキャリアサポートの不足といったブータン社会の現状が背景にあると推測される。高校卒業後に就職できない若者が多く、仕事を見つけるために学生を続けるケースも少なくないのかもしれない。

また、ブータンは物質的な幸福だけではなく精神的な幸福も重視する GNH (Gross National Happiness、国民総幸福) の理念で知られるが、今回の調査では価値観の多様性を強く実感した。「良い人生のためにはお金は生活できる分だけあればいい」という回答があった一方で、「お金は好きな選択肢を選ぶためにとても重要だ」という回答もあった。この違いは、文献調査で示された「海外志向」や「経済的自立を求める女性の増加」といった若者を取り巻く環境の変化と関連している可能性がある。GNH の理念が根づく一方で、グローバル化の波が若者の価値観に新たな選択肢や葛藤をもたらしているのかもしれない。

コメント・備考：

日本語学校の学生は、教室でのインタビュー中はとても緊張しているように見えた。訪問後、学生だけで遊びに行くと緊張が取れて、ブータンのことやプライベートのことをたくさん教えてくれた。特に恋愛トークは非常に盛り上がった。本音を聞くにはフォーマルな場ではなくカジュアルな場であることや、緊張をほぐすことが重要だと感じた。

もし彼ら・彼女らが日本に来てくれたら、また会ってサポートできると嬉しい。

担当者：皆川 響

## 2) JICA ブータン事務所訪問

日時：9月17日（水） 9：20～11：45

場所：JICA ブータン事務所

面会者：須藤伸さん（JICA ブータン事務所企画調査員）

井本佳宏さん（同事務所企画調査員）

清池祥野さん（JICA 社会基盤部）

クンザン（Kuenzang）さん（JICA ブータン事務所ナショナル・スタッフ）

ペマ・ワンモ（Pema Wangmo）さん（同事務所ナショナル・スタッフ）

ティンレイ・ノルブ（Thinlay Norbu）さん（同事務所ナショナル・スタッフ）

ツェリン・ワンチュク（Tshering Wangchuk）さん（同事務所ナショナル・スタッフ）

概要：

最初は須藤さんから、ブータンの基礎知識と JICA ブータン事務所の活動に関する説明を受けた。質疑応答ののち、4 名のナショナル・スタッフのご協力を得て各自の研究課題に応じたインタビュー調査を行った。

質疑応答の内容：

Q. あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか。

A. 時には失敗もあるが、やりたいことを全部できること。

A. 幸せでいること。精神的・身体的に健康でいること。

A. 健康の問題なく、家族と楽しく毎日過ごすこと。

A. ①お金の使い方（生活水準） ②時間の使い方 がよくマネジメントできていること。

Q. 「良い人生」を送るうえで、お金はどれくらい重要だと思いますか。

A. とても重要。ティンプーの家賃は月 1 万 1,000~1 万 5,000Nu で、給料の半分ほどである (=お金が必要)。

A. とても重要だが、すべてではない。

A. ①健康であること ②良い経済状況 の順に重要。

Q. 現在の仕事を選んだ主な理由は何ですか？

A. ①キャリアアップ ②仕事の経験が積める。

A. 仕事の経験が積める、スキルがつく。

A. 前の仕事は給料、今 (JICA) は楽しく働ける、夢の実現のため。

Q. 将来の夢は何ですか。

A. たくさん経験を積んで、45 歳頃には政治家になりたい。

考察：

国際機関は給与が高く、国際的な組織文化やスキルが身につくため、ブータンでも人気の職場である。今回の訪問では、JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフが、出身や学歴に関わらず、給与やスキルを考慮し、転職も活用しながら主体的にキャリアを築いていることが分かった。興味深かったのは、彼らがキャリア志向を持つ一方で、人生観としては「お金はほどほどで良い」「健康や精神的な幸福が最も大切」と答えた点だ。海外で働く友人の激務ぶりを知り、「ワークライフバランスを失うなら海外に行きたくない」という意見もあった。

このことから、ブータンの若者の間には、高給を求めて海外へ流出する人々と、ブータン国内で得られる幸せに満足する人々の間で、価値観の二極化が進んでいる可能性が示唆される。JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフは、この二つの価値観の狭間に立つ存在と言えるだろう。彼らはグローバルな働き方やキャリア観を取り入れながらも、「足るを知る」という幸福観を大切にしていると感じた。この背景には、GNH の理念やチベット仏教の教えが影響しているのかもしれない。彼らは、貪欲な態度を表に出すことを美德としないブータン社会の中で、伝統的な価値観と現代的なキャリア志向を巧みに両立させているのだろう。

個人的に驚きだったのは、JICA ブータン事務所が多様な背景を持つ人々を受け入れている点だ。地方出身で中卒という、一般的に不利とされる出自の方がドライバーや事務の仕事に就いている一方で、首都ティンプー出身で親族や友人が皆大卒という、恵まれた出自の方も海外協力隊の担当として同じ職場で働いていた。

ブータンの社会では、いわゆる階層とキャリアが結びついていると思っていたが、JICA ブータン事務所では必ずしもそうではないのかもしれない。これは、ブータン社会が変化

している証なのか、あるいは JICA ブータン事務所が意図的に多様な人材を採用しているのだろうか。ブータンの雇用における公平性や、社会構造の変化を考えるうえで非常に興味深いと感じた。

担当者：皆川 響

### 3) 織物博物館訪問

日時：9 月 17 日（水） 11：50～13：25

場所：織物博物館（Royal Textile Museum）

概要：

ティンプー市内中心部にある織物博物館を訪問した。2001 年に設立されたこの博物館は上下 2 階のギャラリーと、保存作業室、保管室、ショップ、オフィススペースで構成されている。常設コレクションは現在 2,000 点を超え、1800 年代まで遡ることができる歴史的、文化的、宗教的重要性をもつ貴重な工芸品が展示されている。

質疑応答の内容（ガイドのペマさんに質問した）：

Q. 織物を作るのは、主に女性の仕事か。

A. 機織りをするのは女性で、刺繍をするのは男性（僧侶）の仕事。機織りの女性がいる家庭では男性が家事を担うのが一般的である。

Q. 手織りのゴヤキラを作るのには、どれくらいの期間を要するか。

A. ものにもよるが、1 年～1 年半くらいかかる。自身が注文したゴも手元に届くまで 1 年半かかった。

Q. ゴヤキラを人に贈る風習はあるか。

A. ある。身近な人に贈ることもあるし、質の良いものは王室への貢物にもなる。逆に王室から国民への褒賞品にもなる。

考察：

ギャラリーでは、ブータン国内各地域に根づく伝統的な衣装や仮面舞踊で着用される衣装、ゴヤフルキラの着方を説明する動画など、好例が数多く展示されていた。フルキラを肩で留めるピンや髪飾りなどは年代ごとに展示されており、服飾品の時代に伴う変化を読み取ることができた。模様の少ないシンプルなデザインのものが日常に着用され、模様が

多く華麗なデザインのもものは重要な式典や祝賀で着用されると説明があり、同じ国民衣装の枠組みのなかでもすみ分けがされていることが分かった。トンドル（曼荼羅）の布地は建物の壁面を覆うほど大きなものであったが、刺繍は非常に丁寧に細かく施されており、人々の信仰心の深さをここからも感じる事ができた。

コメント・備考：

織物の実物の展示を間近で鑑賞することができ、貴重な経験ができた。特に、各地域に特有な織り方を地図上に一覧で図示した展示からは、ブータン国内における織り模様の多様さと自立確立された技術が伝承されていることが一目でわかり、強く印象に残っている。現代に近い展示物ほど、機械織りのものが多く、生産における効率性の重視と手工芸品としての価値の両立は今後ますます課題となり得ると感じた。

担当者：鮫島 さくら子

#### 4) 織物販売店訪問

日時：9月17日（水） 15：00～16：30

場所：ケルザン・ハンディクラフト（Kelzang Handicraft）

面会者：チョイン・ラモ（Choying Lhamo）さん

概要：

ブータンにおける織物産業の現状や、伝統技術の詳細について知るべく、ティンプー市内にある織物の個人商店ケルザン・ハンディクラフトを訪問させていただいた。お店で扱っている織物は、草木染めという茜や藍などの植物によって生糸を染める伝統的な技法が用いられている。お祭りや正式な行事で着用される精巧な絹織物「キシュタラ」（Kishuthara）の生産で有名なブータン北東部に位置するルンツェ県コマ村出身の母ケルザン・ワンモ（Kelzang Wangmo）さんと、娘のチョイン・ラモさん、イシ・チョデン（Yeshey Choden）さんによって運営されている。今回は、チョイン・ラモさんにインタビューさせていただいた。

質疑応答の内容：

Q. ご自身も機織りをした経験があるか。

A. ある。キシュタラで有名なルンツェ県コマ村の出身なので、5歳から機織りを習い始めた。祖母と母から習い、当時は学校には通わず、機織りの技術を身につけることに専念した。ルンツェ県からティンプーに移住し、30年前にこのお店を母と一緒に開いたが、幼い

頃はお店を運営するとは思ってもいなかった。

Q. 織物産業に対し、行政から公的な支援はあるか。

A. ある。織物博物館と契約を結んでおり、綿を仕入れることができる。また、織物博物館のショップで売れなかった商品を代わりにお店で販売しており、相互に良い内容の契約となっている。

Q. 織り手の数は増えているか、減っているか。

A. 正式なデータはないが、母親世代と比較すると減っているはず。若い世代は留学を目指す人も多く、織物産業に興味を持つ人が減っている。

Q. 織物産業を持続させるうえで一番の課題は何か。

A. インド製の機械織りの安価品にどう対抗するか、資金をどう確保するか、という点。お店として機械織り工場（weaving center）を持っているが、お金を得て織り手に賃金を支払うことができるし、よりお金を得ることで仕事も多く割り振ることができる。

考察：

チョインさんの「学校に通わずに 5 歳から機織りを習っていた」という言葉が特に印象に残った。この発言からは、織り手としての技術継承と、初等教育との両立が容易ではないという課題が浮かび上がってくる。もちろん、学校教育を終えたのちに伝統技芸院などの専門機関で機織りや刺繍の技術を学ぶ道も存在する。しかしその一方で、伝統産業への関心を持つ若い世代が年々減少しているという現状がある。キシュタラのように高い技術と長い歴史をもつ伝統織物を将来世代に受け継いでいくためには、教育と技術習得のバランスをどう取るか、そして若者の関心をいかに引きつけるかという点で方策を模索する必要があると強く感じた。

コメント・備考：

機織りが有名な地域では、母娘間で技術を継承する、という生の声を聞くことができ、とても貴重な機会となった。織りの模様は昔から 9 割ほどは変わらず、色味に変化があるとのことで、最近好まれる鮮やかな色はインドの機械織りで使われやすいそうだ。対して、お店で扱う草木染めの糸・布地はやわらかい色のもので、ゴヤキラとして着用されることは少なくなっているとのことだった。

担当者：鮫島 さくら子

## 5) ペマ・ロセルさん、チミ・ドルジさんとの交流会

日時：9月17日（水） 19：00～20：30

場所：アマ・レストラン（Ama Restaurant）

面会者：ペマ・ロセル（Pema Losel）さん（Bhutan Delight Tours & Treks 社長）

チミ・ドルジ（Chimi Dorji）さん（Bhutan Delight Tours & Treks 社員）

概要・質疑応答の内容：

今回の現地調査の手配をしてくださった旅行会社 Bhutan Delight Tours & Treks の社長・ペマさん、社員・チミさん、ガイドのペマさん、ドライバーのキンレイさん、教員 2 名、学生 2 名の計 8 名で会食し、インドやインド人に対するブータン人の考えや、チミさんの趣味の筋トレについて話した。ティンプーにはジムがいくつかあるらしく、月謝はブータンの平均月収に比べるとかなり高い金額に設定されているようだ。

また、ブータンの人もビールが好きらしく、「DRUK 11000」という国産ビールを愛飲していた。名前の由来は、ガイドのペマさんによると、インドの「oooo 10000」というビールに対抗して少し数字を大きくした名称をつけたということだそう。

考察：

特に目的意識を持たずに会食に参加してしまったため、ペマさんやチミさんに積極的に英語で話しかけることができなかった。一対一のインタビューと違い、大人数での会話にはリスニング・スピーキングともに現状の自分よりも高い英語力が必要だった。

ペマさんやチミさんに話を聞ける貴重な機会であったから、会社経営や担当している仕事についてお聞きすれば良かったと反省している。

担当者：皆川 響

## 6) モティタン高等学校訪問

日時：9月18日（木） 9：00～10：55

場所：モティタン高等学校（Motithang Higher Secondary School）

面会者：ジグメ・チョデン（Jigme Choden）校長

生徒たち

概要：

ティンプー市内にある公立高校・モティタン高等学校を訪問させていただいた。進学校として有名な同校は、校長先生の方針により、伝統文化に関する学校行事が活発に行われ



ていることでも知られている。長い坂を上った先にある校舎は3階建てで、広い敷地を有している。校長先生から学校の説明をお聞きし、こちらからの質問に答えていただいた後、校内を案内していただいた。

通常授業で使用する教室のほかに、生徒たちがいつでも使用できる礼拝室、図書室を見学させていただいた。校舎内の至るところに、著名人の格言が掲示されていたのが印象に残っている。校長先生に紹介していただいた同校の YouTube チャンネルは有志の生徒たちによって撮影・編集・運用が行われているとのことだった。

最後に理系クラスの生徒たちとの交流を行った。日本に興味をもっていてくれている生徒が多く、その話題はアニメ・日本食・バレーボール選手と多岐に渡った。昨年、同校の制度を利用し日本の高校に留学した生徒もいて、流暢な日本語を披露してくれた。

質疑応答の内容：

Q. 在籍している生徒数と、男女比はどのくらいか。

A. 全校生徒は 1,400 人在籍していて、男子約 600 人、女子約 800 人でやや女子生徒が多い。勉強にせよ運動にせよ、女子生徒のほうが要領よく成績もよい傾向にある。

Q. ブータンの伝統文化に関する学校行事に力を入れていると伺ったが、その内容はどのようなものか。

A. 仮面舞踊がそのひとつ。自身の故郷に強く根づいた伝統行事であり、父親がとても上手な踊り手だった。同校では創立記念日に仮面舞踊を披露する会を開催しており、学外からも観客が訪れるほどの人気がある。衣装などに多額の費用がかかるため、実施できる学校は少ない。踊りをするのは男子生徒だけだが、特にアツアラ役（ピエロのような役）は人気でオーディションを開いて選抜を行う。1 ヶ月みっちり練習を行い、その間に 5kg 痩せる生徒もいるほどハードな内容になっている。

Q. 校長先生が生徒たちに身につけてほしい力は何か。

A. 教科の出来以上に、全人格的な素養を教育することが必要だと考えている。特にティンプーのような都市部では親からの教えが乏しい傾向があり、ブータンの伝統文化や仏教的な価値観を身につけてほしいと思っている。

考察：

モティタン高等学校の取り組みからは、首都ティンプーの都市化の進展に伴い家庭内での文化の継承が弱まりつつある中で、学校がその役割を補完している実態が読み取れる。仮面舞踊のような伝統行事を教育活動に取り入れることで、生徒たちが自国の文化や価値観を主体的に学び、次世代へと受け継ぐ力を育んでいると推測する。一方で、生徒主体で

YouTube チャンネルが運営されているなど、現代的な表現手段と伝統文化教育を両立させている点からは、伝統文化の継承と現代社会への積極的な適応を両輪で進めようとする教育方針が伺える。こうした姿勢は、文化的アイデンティティの形成とグローバルな視点の育成の両立に寄与していると考えられる。

コメント・備考：

最後にお邪魔した理系クラスの生徒たちが積極的に挙手し、意見を述べる姿が印象に残っている。将来の夢を尋ねると、軍人、医者、建築士など多岐に渡っていた。

担当者：鮫島 さくら子

## 7) Bhutan overseas Jinzai Private Limited 訪問

日時：9月18日（木） 11：05～12：00

場所：Bhutan Overseas Jinzai Private Limited

面会者：プブ・テンジン（Phub Tenzin）さん

概要：

Bhutan Overseas Jinzai Private Limited はティンプー市内のビルの2階に位置する、ブータン人労働者を海外の労働市場に派遣する会社である。まず、代表（Chief Executive Officer）のプブさんに会社の概要をお聞きした。その後、研究課題に関する質疑応答をした。余った時間でプブさんが会社を設立した経緯や日本人の奥様との出会いもお聞きした。

質疑応答の内容：

Q. 主な派遣先はどこですか。

A. 今は日本に約30名、中東各国に約100名、オーストラリアに6～7名派遣している。派遣先としての各国の特徴は以下の通り。

- ・ 日本：日本の文化やアニメ等に興味のある人しか行かない。
- ・ 中東諸国：カタール、クウェート、サウジアラビア、オマーン、UAE など。外国人労働者に求められる条件が緩いため、派遣される人が多い。
- ・ オーストラリア：一番人気。人気の要因は、英語が通じることと給料が良いこと。

Q. 派遣された人はどのような職業に就きますか。

A. 農業、介護、建設に携わる人が多い。

Q. 派遣に年齢制限はありますか。

A. ブータン国内の法律により、21 歳から 29 歳まで。

Q. ブータンの若者が海外へ渡航する主な理由は何だと考えますか。経済的な要因以外に、どのような動機がありますか。

A. 就職先がないこと。年間の大卒者数が 2 万人だとすると、公務員になれるのは 1,000 人ほど。民間企業の給料は安いので不人気。①海外の給料の高さ（国内の給料の低さ） ②国内の就職先不足 の順で若者が海外に流出する。

Q. Bhutan Overseas Jinzai Private Limited として、若者のキャリア形成や海外での活躍をどのように支援していますか？

A. 派遣される人に対しては、例えば出国前オリエンテーションなど、出国から帰国まで、政府によるサポートがある。Bhutan Overseas Jinzai Private Limited としては、帰国後のキャリア相談のサポート等を行っている。

Q. 派遣される人の出身地に特徴はありますか。

A. 出身地はさまざまである。

Q. もし高い給料や良い就職先があったら、ブータンに残る人は多いと思いますか。

A. 最近の人々はより高い給料を得たいと貪欲になっているので、残らないかもしれない。例えば、自分の同級生で、大学院修了後に公務員として地位を確立した人が公務員を辞めてオーストラリアでトイレ清掃の仕事をしている。その理由はオーストラリアでトイレ清掃をしたほうがブータンの国家公務員をするよりも給料が高いから。

Q. 他の場所でのインタビューでは、お金が一番大切ではなく、困らない程度にあれば良いという回答が多かったが、プブさんから伺ったお話とは矛盾しているように感じます。なぜでしょうか。

A. インタビューでは本音は言いづらいからかもしれない。または、親の扶養下にある人の場合は、お金の大切さがまだ分かっていないからかもしれない。

考察：

プブさんのインタビューから、ブータンの若者の海外志向が経済的要因に強く起因していることが明らかになった。他の訪問先で聞かれた「お金はほどほどに」という価値観に対し、プブさんは「近年の若者はより高い給与を求め、貪欲になっている」と明言した。また、インタビューというフォーマルな場での回答が、必ずしも本音を反映せず、建前で

ある可能性も示唆した。

特に注目すべきことは、高収入を求めて国家公務員の職を辞し、オーストラリアで清掃業に就いたというプブさんの同級生の事例である。この行動からは、社会的地位や安定性、スキル獲得よりも、純粋な給与の高さを最優先する価値観がエリート層にまで浸透していることが読み取れる。

この現象は、社会構造が異なるものの、高賃金を求めて海外で非熟練労働に従事する日本の若者の動向と共通する側面を持つ。しかし、日本の若者が高賃金に加えて「刺激的で有意義な海外での体験」も求めているとすれば、ブータンの若者も同様の動機を持っているのだろうか。経済的理由だけでなく、自己成長や異文化体験への欲求が、彼らを海外へと駆り立てる要因としてあるのだろうか。

担当者：皆川 響

## 8) 内務省訪問

日時：9月18日（木） 14：15～15：15

場所：内務省文化・ゾンカ開発局言語研究・振興課（Language Research & Promotion Division, Department of Culture and Dzongkha Development, Ministry of Home Affairs）

面会者：ジグメ・ドルジ（Jigme Dorji）さん

概要：

ゴ・キラの着用について、公的機関の立場からの意見を伺うため、内務省を訪問した。当初は課長のナムゲイ・ティンレイ（Namgay Thinley）さんに対応していただく予定であったが、急用のため、代わってジグメ・ドルジさんにご対応いただいた。ドルジさんは、大学でゾンカ語を専攻後、公務員として土地管理部局に7年間勤務し、現在は文化・ゾンカ開発局に所属されている。

面会ではゴ・キラの着用についてのほかに、ゾンカ語およびブータン国内で使用されているその他の言語の保存・発展に向けた取り組みについてもお話を伺った。現在、同部局ではゾンカ語のデジタル化に力を入れており、データの整備を進めているとのことだった。今後ゾンカ語のデータが十分に蓄積されれば、現状英語で行われている理数系科目の教育もゾンカ語で実施していきたいと展望を語っていただいた。

質疑応答の内容：

Q. 学校や公的な場面でゴ・キラを着用する意義についてどう考えているか。

A. 個人的な立場からの意見になるが、ゴ・キラはブータン人の大事なアイデンティティの一部である。ゴ・キラを着用しているだけで一目でブータン人だと判断できる。ゾンカ語を話すことと、ゴ・キラを着用することの両方が揃って、ブータン人という感じがする。

Q. 公務員としての立場から、ゴ・キラを正しく着用していないと気になるか。

A. 気になる。正しく着用することは重要なマナーのひとつである。ルールは厳格に定められているが、それを守ることによって国家行事や祝事の際にブータン人らしさを SNS やメディアで発信することができる。正しく着用していない場合は、ゾン（主に県庁兼僧院として使用されている建物）などに入ることはできないし、目上の人や僧侶に敬意を表していない、と解釈される。

Q. 学校では、ゴ・キラの着用について指導が入るのか。

A. 毎週月曜日の朝に検査がある。正しく着用できているか、インナーや靴下まで全部チェックが入る。鎖国していたときは、就学前の幼児もゴ・キラを着用していたが、今では洋服を着るのが一般的である。就学の際からゴ・キラを着用するようになり、その着方は家庭で習う。

考察：

ドルジさんの回答から、ゴ・キラの着用が単なる服装規定にとどまらず、ブータン人としてのアイデンティティを体現する重要な文化的実践であることが伺える。ゾンカ語の使用とともに、ゴ・キラを着用することがブータン人としての姿を示す行為とされ、公的な場面や国家行事においては特に正しく着用することが求められている。その着こなしは礼儀や敬意の表現とも深く結びつき、不適切な着用は社会的マナーの欠如や目上の人・僧侶への不敬とみなされる点からも、その重みが理解できる。また、学校教育においても着こなし方の確認が定期かつ頻繁に実施され、国家レベルでの感覚の共有と規範の徹底が図られていることが分かる。さらに、家庭での教育がゴ・キラの着方の習得において重要な役割を果たしている点から、学校教育だけでなく家庭教育の一環としても位置づけられていることが読み取れる。ゴ・キラの着用は文化的アイデンティティの継承と社会的秩序の維持に深くかかわっていると考えられる。

コメント・備考：

今回の訪問で、ゴ・キラの着用が単なる伝統衣装としてではなく、言語や礼儀と結びついたブータン人としての姿を象徴する重要な文化的要素であることを再認識した。特に家庭での指導が大きな役割を果たしている点は、衣服文化の継承における初期社会化の重要性を示唆していると感じた。

担当者：鮫島 さくら子

## 9) ファッション・プレス訪問

日時：9月18日（木） 16：00～17：45

場所：Project Dragon 事務所

面会者：タシ・チョデン・ドルジ（Tashi Choden Dorji）さん

事務所の皆さん、

所属モデルの皆さん

概要：

ブータン国内におけるファッション文化とトレンドの発信・伝播についてお話を伺うため、Project Dragon 事務所を訪問した。Project Dragon は2025年7月に活動を開始したモデル・俳優・タレントのマネジメント事務所であり、ファッション雑誌の刊行も手掛けるなど、多角的な活動を展開している注目のプロジェクトである。国内の若者世代を中心に注目を集めつつあり、今後のファッションシーンを牽引する存在として期待されている。訪問時には、今後開催予定であるファッションショーのデモンストレーションを見学させていただいた後、同プロジェクトの中心メンバーでありミス・ブータンでもあるタシ・チョデン・ドルジさんと面会し、刊行予定の『Project Dragon』誌も拝見した。日本で発行されている小学生、中学生、高校生向けのファッション誌について情報を共有すると、ティーン／ハイティーンをターゲットとしたファッション誌があることに驚いていた。

質疑応答の内容：

Q. Project Dragon の概要について詳しく教えてください。

A. 2025年7月に活動を開始した、新しい芸能事務所である。モデル・俳優・タレントのマネジメント業務に加え、ファッション雑誌『Project Dragon』の刊行も手掛けている。現在10代～60代の32名が所属しており、年齢やジェンダーに関係なく興味があれば誰でも所属することができる。容姿の美しさ以上に、大勢の人の前で怖気づかない度胸と自信を育むことを重視している。

Q. タシさん自身がファッションに興味をもったのはいつか。

A. 小学生のころから服やメイクに興味関心があった。情報源はインターネットを通したファッションショーで、SSAW ごとに参考にしていた。ファッションショーは数年前までブータン国内でも開催されていたが、現在は開催されておらず Project Dragon が街中で再開することを目指している。

Q. 見学させていただいたファッションショーのデモンストレーションでは、洋服のスタイリングがメインだったが、そのなかでゴ・キラのスタイリングも披露されている意義はどのようなものか。

A. ブータン人としての姿を示すためである。国家への帰属意識が強くあるため、ゴ・キラのスタイリングも含めている。

考察：

今回の訪問から、Project Dragon が単なる芸能事務所や雑誌編集部にとどまらず、ブータンの新しいファッション文化の発信拠点として大きな機能を担おうとする気概が感じられた。容姿以上に人前で表現する度胸と自信を重視している点から、ファッションを通じて自己肯定感や主体性を育む、同プロジェクトの教育的な側面も読み取れる。また、ファッションショーでは洋服だけでなくゴ・キラのスタイリングも披露されていたことから、現代的なファッションと伝統的な国民衣装の両方が人々の生活のなかに自然なかたちで存在していることが示唆されていた。また、日本のティーン向けファッション雑誌の存在に対し驚きが示されていた点から、ブータンでは小学生～高校生を対象としたファッションメディアがまだ発展途上にあることが伺えた。Project Dragon がその先駆けとして若者世代の関心を取り込み、国内のファッション文化の発展を牽引していく可能性が感じられた。

コメント・備考：

ひとつの芸能事務所としての枠を超え、ブータンのファッション文化の新たな潮流を生み出そうとしていることが印象的であった。洋服だけでなく、ゴ・キラの着こなしにおいてもトレンドを発信しており、伝統文化の継承や秩序を大切にしながら、その枠組みのなかで新しさを追求しようとする姿が伺えた。今後、同プロジェクトがどのような展開を見せるのか注目していきたい。

担当者：鮫島 さくら子

## 10) 農家ホームステイ

日時：9月19日（金）17：20～21日（日）8：00

場所：Apa Chado's House

面会者：チャド・ツェリン（Chado Tshering）さん（お父さん）

同居家族の方10名以上

ガサ市内で出会った方々

概要：

ガサ県での2泊3日のホームステイは、ブータンの伝統的な家族生活とコミュニティのあり方を知る貴重な機会となった。首都ティンプーから車で約7時間を要するガサ県に位置するチャドさんの家を訪問し、同氏を中心とした三世代・総勢10名以上の大家族と交流した。

滞在中は、夕食を共にしながら、ブータンの文化や生活に関するインタビューを実施した。また、家族の日常的な営みである家畜の世話（鳥小屋の見学や乳搾り）を体験させていただいた。さらに、家から車で10分ほどのガサ県中心地（市内）では、住民への聞き取り調査や、ボードゲームを通じた交流を行い、地域コミュニティの活力に触れることができた。このホームステイを通じて、ガサの人々の生きた価値観や生活様式を直接体験することができた。

質疑応答の内容：

【チャドさんの家にて】

Q. なぜホームステイ事業を始めたのですか？

A. きっかけは、政府が住民にホームステイ事業を呼びかけたことだ。10軒以上の家が手を挙げたが、準備の大変さから、ほとんどが途中で諦めてしまった。私（チャドさん）には、ティンプーで働いていた経験があったので、英語も話せるし、ビジネスのことも少し分かっていた。だから、自分ならきつとうまくいくという自信があり、ホームステイを始めることにした。

Q. どのような経緯でこの場所に住んでいますか。

A. もともとは山のもう少し下のほうの村の出身だったが、自分の家を建てるにあたって現在の土地を購入した。ちなみに、購入した当時と現在だと土地の価格は何百倍にもなっている。

【ガサ市内にて】

Q. （ガサ以外の出身の方に対して）なぜガサに住んでいるのですか。

A. 仕事のため。病院のスタッフの募集があった。

A. 仕事のため。選べる仕事の中でガサの病院の仕事が一番高い給料だった。

A. 仕事のため。もともとティンプーのカフェで働いていたが、同僚が地元のガサでカフェを開くと言うのでその店で一緒に働くことにした。

Q. あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか。

A. ビジネスが好きだから、自分の店を開きたい。それが叶ったら良い人生になるだろう。



A. 自分に自信を持てられる。

A. 家族や友達と一緒に過ごせる。

考察：

ガサでのホームステイは、コミュニティの強さを肌で感じる機会となった。チャドさんの家には、親が不在のまま子どもたちが共同生活を送っており、このことから大家族や親族のつながりが、子育てや生活を支える基盤となっていることが分かる。ガサの中心部や温泉でも、人々が自発的に集まり、またインタビューのために通りすがりの同僚を呼び止めてくれるなど、強いコミュニティの存在を実感した。

一方で、ガサが決して閉鎖的な地域ではないことも明らかになった。外国人観光客が少ないガサという地域で、地元住民がボードゲームに誘ってくれたり、積極的に交流しようとしてくれる姿は、彼らが外部の文化を排除するのではなく、好奇心を持って受け入れる柔軟性を持っていることを感じた。

また、ガサ以外の出身者が仕事のために移住してきている現状は、ブータン国内における人々の流動性が高まっていることを示唆している。特に、専門性が高いとは言えない仕事のために遠方から移住してくるケースからは、仕事不足という国内の厳しい雇用環境が、人々を地方へと駆り立てている実態がうかがえる。

コメント・備考：

鳥小屋に入ったり、乳搾りをしたりとなかなかできない体験をさせていただいた。鳥小屋ではガイドのペマさんが勝手に鳥小屋に入って卵を回収することに驚き、乳搾りではお母さんの力強く素早い手捌きに圧倒された。

また、ガサではどこに行っても、おそらく外国人であるために視線を集めることが多かった。また、ガサのゾンを訪れた際も 20 日間ほどの間で訪れた外国人は 5 組だけだと聞いたことから、ガサが外国人はなかなか訪れない場所であることを再認識した。

担当者：皆川 響

## 11) 服飾店訪問

日時：9月21日（日） 13:00～13:30

場所：クルタン市街地の服飾店 2 軒

面会者：キンレイ（Kinley）さん

ノルツェ（Nortse）さん

概要：

ガサからパロへ向かう途中、プナカ県のクルタン市街地に立ち寄り、服飾店 2 軒にて、最近の売れ行きや人気のある色・柄についてインタビュー調査を行った。1 軒目の店舗は、ゴ・キラやその布地に加えて、洋服・帽子・靴など服飾小物も幅広く取り扱っており、店主は男性のキンレイさんであった。2 軒目の店舗は、ゴ・キラおよびその布地を主に扱っており、特に僧侶が着用する赤色の布地を豊富に取り揃えていた。店主は女性のノルツェさんであった。

質疑応答の内容：

Q. こちらの店舗では、以前と比較してゴ・キラの売上は上がったか、下がったか。また、その要因は何だと思うか。

A. キンレイさん→売れ行きは好調だが、全体としては以前と大きな変化はない。ゾン訪問時やアーチェリーをするときなど、ゴ・キラの着用が義務づけられている場面があり、その数が大きく変わっていないためと考えられる。目的や季節ごとに 1 人で数着買うのが一般的であることも要因として挙げられる。

ノルツェさん→大きな変化はなく安定している。着用が義務づけられている場面が決まっており、正式な行事や祝事の際にも着用するため、その時々には新調する人も多い。最近では海外からの観光客もよく購入していて、売れ行きは好調である。

Q. どの世代のお客さんが多いか。

A. キンレイさん→若い世代の来店が多い。普段の客足はそれほど多くないが、行事の前や季節の変わり目は多くの来店が見られる。

ノルツェさん→特に若い世代の利用が多い。高齢者は行事に参加する機会が少ないことに加え、若い世代から衣服を譲り受けることも多いためだと考えられる。

Q. 最近よく売れる色や柄のデザインがあれば教えてください。

A. キンレイさん→色味の鮮やかなチェック柄の布地がよく売れる。伝統的な柄であるが、インドの工場で機械織りにより大量生産されているため価格が比較的抑えられている。プナカは気候が暑いので、薄手の生地の高需要も高い。

ノルツェさん→赤・緑・紺を基調としたチェック柄の布地が最近特に人気である。どのような上衣にも合わせやすく、使い勝手がよい点が人気を集めている理由だと考えられる。

考察：

今回の訪問から、ゴ・キラは着用の機会が社会的規範によって確保されており、その需要が安定していることが明らかになった。ゾンへの訪問や公式行事、祝事などでは着用が

義務づけられており、このような社会的規範の継続が、売上が大きく変動しない要因となっていると考えられる。また、目的や季節ごとに複数枚を購入する人が多い点からも、ゴ・キラが人々の衣生活の中で重要な位置を占めていることがうかがえる。購入者の中心が若い世代であるという点は、ゴ・キラを着用する文化が世代間で受け継がれている実態を示唆しているといえる。さらに、伝統的な柄であるチェック柄が根強い人気を集めている一方で、機械織りによる比較的安価な製品や薄手の生地など、価格や気候といった実用面への配慮もみられた。これらの点から、伝統性と実用性の両立が現在のゴ・キラ市場の大きな特徴であると考えられる。

コメント・備考：

今回の訪問を通して、ゴ・キラは社会的規範によって着用機会を保障されており、人々の衣生活に深く根づいていることが確認できた。伝統的な柄が根強く支持される一方で、機械織りによる大量生産品の普及や薄手の素材など実用性への工夫も見られ、伝統と現代的要素の両立が進んでいる点が印象的であった。

担当者：鮫島 さくら子

## 12) ノルブリン・ライター・カレッジ訪問

日時：9月23日（火） 11：00～12：20

場所：ノルブリン・ライター・カレッジ（Norbuling Rigter College）

面会者：タシ・ニマ（Tashi Nima）さん（ノルブリン・ライター・カレッジ学生代表）

ノルブリン・ライター・カレッジの学生2名

概要：

ノルブリン・ライター・カレッジは2004年に私立高校として設立され、2017年に大学に昇格した。現在、プータンで数少ない私立大学のうちのひとつである。

大学周辺を歩いていた学生や、学生代表にインタビューをした。また、学生代表であるタシさんの案内で教室や食堂、寮などの施設を見学した。

質疑応答の内容：

Q. プータンの若者の人生観と職業選択について、どう思いますか。

A. 最近の若者はより高い給料を得るためにオーストラリアに行く人が多い。友達がお金を稼いで楽しそうに過ごしているのを見ると、オーストラリアに行きたくなる人が多いようだ。

Q. あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか。

A. もっと就職の機会があると良い人生になりそう。

A. 家族や友達と集まって楽しく幸せに過ごす。

Q. 「良い人生」を送るうえで、お金はどれくらい重要だと思いますか。

A. とても重要。ノートなどの学用品を買うにもお金がかかる。

A. お金をたくさん持っていなくても幸せになれる。もしお金が無くても、頑張って働くことによって教育資金などを稼げる。

Q. ブータンの GNH の理念の 9 つの領域のうち、あなたの考える「良い人生」にとって重要だと思うものをいくつか選び教えてください。

A. ①文化 ②環境 ③教育。

A. ①良い統治 ②文化 ③心理的幸福。

Q. あなたが将来の職業を選ぶ際に、特に重視する要素を教えてください。

A. ①自分の夢のため ②社会に貢献できる ③他人のためになる。

A. ①自分の夢のため ②社会的評価 ③楽しく働ける。

考察：

多くの学生が寮に住み、祝日のキャンパス内で友人と楽しそうに過ごしていた。この様子は、「良い人生」の回答にあった「家族や友達と集まって楽しく幸せに過ごす」という価値観が、彼らの生活に根ざしている様子を表していると感じた。

一方で、彼らの回答からは、ブータンに根づいた価値観と、海外の楽しさ・成長機会への関心との間で揺れる内面が読み取れた。学生代表のタシさんが語った、「友達が楽しそうに過ごしている」という理由で、高収入を得られるオーストラリアへ行きたいと考える若者の姿勢は、SNS などを通じた他者との比較が、若者の価値観に影響を与えていることを示唆している。

コメント・備考：

ドライバーのキンレイさんの伝手で急遽、大学を訪問できることになった。キンレイさんの実家がノルブリン・ライター・カレッジの近所にあるために伝手があるそうで、改めてブータンの人々の人脈の広さに驚いた。大学構内は自然あふれる広い場所で、ゆったりとした気持ちで勉学に励み生活できそうだった。学生代表のタシさんには細かに大学を案内していただき、そのホスピタリティにとっても感謝している。

担当者：皆川 響



## (6) 写真



ブータン日本語学校での交流会



JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへのインタビュー



お世話になった JICA ブータン事務所の皆さんと



織物博物館訪問



織物販売店でのインタビュー



モティタン高等学校訪問



内務省でのインタビュー



Project Dragon 訪問





ホームステイ先の農家



乳搾りのお手伝い



ガサ市内でのインタビュー



ホームステイ先でのインタビュー



訪問したタクツァン僧院



大学生へのインタビュー



アーチェリーの試合見学



ホル布林・ライター・カレッジ訪問

### 3. 事後學習成果





## (1) 微音祭写真



訪問国紹介



参加型 GNH ワークの様子



研究発表と質疑応答



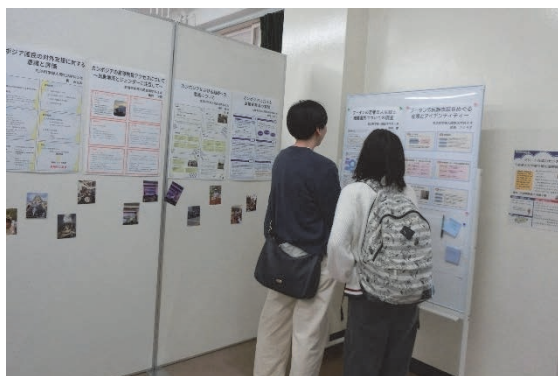
研究発表の様子 1



研究発表の様子 2



展示へのコメント



展示の様子



来場者に展示の説明をする

## (2) 微音祭常設展示ポスター

# カンボジアの社会とジェンダーの 関わりについて

文教育学部言語文化学科 1 年

石井 花

### 01 調査テーマとテーマ設定の背景

#### ○テーマ

「カンボジアの社会とジェンダーの関わりについて」

#### ○設定の背景

ジェンダーギャップ指数が先進国である日本よりも途上国であるカンボジアの方が高いことに疑問を持ったこと。

### 02 調査設問

#### ①家庭内のジェンダーギャップについて

例：家庭内での家事・仕事は誰がどのように担っているのか。  
家庭の意思決定は誰が行うか。

#### ②教育のジェンダーギャップについて

例：男女で高等教育へのアクセスに違いがあるか。

### 02 調査設問

#### ③経済のジェンダーギャップについて

例：男女でつける職業に違いはあるか。

給料は男女で同じか。

#### ④その他ジェンダー観について

例：日常でジェンダーギャップを感じるのはどんな時か。

昔と比べて変化はあるか。

### 03 調査結果

#### ①家庭内のジェンダーギャップについて

- ▶家事育児は女性・仕事は男性という家庭が多かった。日本との共通点。
- ▶夫は妻を積極的に助けるという意見が多数。日本より協力的な関係。
- ▶家庭内の意思決定は父という家庭が多かったが、家庭による。

#### ②教育のジェンダーギャップについて

- ▶どの家庭でも男女にかかわらず進学させたいと考えていた。
- ▶高等教育へのアクセスに関しては性別ではなく家庭の状況や住んでいる地域に影響を受ける。

### 04 調査結果

#### ③経済のジェンダーギャップについて

- ▶男女でつける職業に差はない。(保育士など一部の職業を除く)
- ▶給料や管理職につけるかどうかの差もない。

#### ④その他ジェンダー観について

- ▶身の回りでジェンダーギャップを感じる瞬間はない。男女平等。
- ▶昔はジェンダーギャップがあったが、教育や世界におけるジェンダー意識の高まりによってなくなった。

### 05 考察

- ▶特に経済面でのジェンダーギャップが日本よりも小さい。

▶ジェンダーギャップに対する問題意識は良い意味でも悪い意味でもあまりない。さらなる改善を目指すには現状に批判的な眼差しも必要と思われる。

▶国民の意識の面でのジェンダーギャップは小さいが、産休育休など制度的な面での問題が残る。



# カンボジア国民の対外支援に対する意識と評価

生活科学部人間生活学科2年  
奥 みなみ

## 調査テーマ

「カンボジア国民の対外支援に対する意識と評価」

## 調査背景・目的

- 日本が行っている支援は本当に必要とされているのか
- 他国に対して「支援してほしい」「助けてほしい」と思っているのか
- 自国の社会や教育制度に他国が介入することに関してどう思っているのか
- 今後の対外支援のあり方を考える

## 調査設問

1. 日本の支援について
2. 対外支援について（日本以外も含む）
3. 日本と他国の支援の違い
4. 必要な対外支援

## 調査結果

### 1. 日本の支援について

- 教育に力を入れている
- 支援者：JICA、政府、民間、NPO
- NGO 以外の一般国民からの認知度は低い
- 形骸化している事業も存在する

### 2. 対外支援について（日本以外も含む）

- 認知度が高い支援国：中国、アメリカ、日本
- 地方への支援が不十分
- 今後も支援を受けていきたい
- 近年は対外支援のパフォーマンス化が進む

## 調査結果

### 3. 日本と他国の支援の違い

- 日本は無償資金協力が多く
- 日本政府などを通じた大きな支援が特徴

### 4. 必要な対外支援

- 農業の技術伝達
- 資金協力
  - 奨学金（海外留学や学費を目的とする）

## 考察

### ①対外支援に対する意識

- 全体的には肯定的な意識
- 地方の人や NGO 職員以外の人には「詳しく知らない」



意識そのものがない

都市部と地方の格差が問題

### ②対外支援に対する評価

- 日本の支援
  - 無償資金協力・大規模な支援が高評価
- 問題点
  - 資金以外の支援が不足
  - 対外支援のパフォーマンス化
  - 支援の形骸化

## 考察

### ③今後の対外支援のあり方

現地でのインタビューなどを通じた

現状把握



需要に沿った支援

長期的な支援

# カンボジアの高等教育アクセスについて ～出身地域とジェンダーに注目して～

生活科学部人間生活学科 2 年

亀岡 千愛

## 調査テーマとテーマ設定の背景

### テーマ：

カンボジアの高等教育アクセスについて  
～出身地域とジェンダーに注目して～

### 設定の背景：

- ・初等・中等教育の就学率は向上したが、高等教育進学率は依然として低い
- ・カンボジアは都市と農村の格差が大きい。日本では大学進学率に男女差があるがカンボジアはどうか
- ・経済的要因、情報格差、早婚や家族の期待など、社会構造的要因が関係しているのではないか



## 調査設問

### ①出身地域に関する要因

#### 主な質問

- ・出身地によって進学意識や進学のしやすさに違いを感じるか？
- ・経済的負担や情報入手のしやすさに地域差はあるか？
- ・農村部ではどのような障壁（距離、通学環境、家族の支援不足など）があるか？
- ・塾や奨学金の利用状況に地域差はあるか？

## 調査設問

### ②ジェンダーに関する要因

#### 主な質問

- ・女子特有の進学阻害要因には何があるか？
- ・家族の期待、結婚、経済的優先順位の影響は？
- ・進学・就職におけるジェンダー役割意識の影響は？
- ・女性のキャリア選択はどの分野に集中しているか？

## 調査結果

### ①出身地域による違い

- ・都市部の学生は進学情報・塾・奨学金へのアクセスが容易で、専門職志向が強い
- ・都市部の学生や親にとって大学に行くのは当たり前であり必要なこと
- ・地方では経済的制約、学校までの距離、家庭の労働力期待が進学を妨げる
- ・地方では高等教育がなくとも農業というセーフティネットがあるという意味  
⇒高校までにドロップアウトする人も一定数
- ・地方出身者は大学入学後も学費や生活費を自分で働いて稼ぐ場合が多い

## 調査結果

### ①ジェンダーによる違い

- ・親世代にも女子にも高等教育が必要という意識が浸透
- ・一方で娘を都市に出すと結婚前に男性と自由に交際してしまうという心配から進学に反対・自宅から通える範囲と条件を付ける・女子寮に入らせることも一般的
- ・地方ではジェンダーというより成績の良いきょうだいや年少のきょうだいの進学を家族全員で支える事例も多い
- ・専攻分野や志望職種に大きな男女差はみられない
- ・結婚・出産後も働く場合が多い（大学や前職での専門性はあまり生かせないことも）

## 考察

- ・多くの高等教育機関が首都プノンペンに集中していることや、試験合格のためには塾が必要なことは、地方出身者の進学のハンデとなっている
- ・農業が主要産業のため、特に地方では高等教育は必ずしも必要とみなされていない
- ・社会的保守性が強く、婚前の同棲は望ましくないという価値観や親の言うことは尊重するという価値観  
⇒女子の進学や自由なキャリア選択を制限する場合がある
- ・格差是正には、地方都市レベルで高等教育機会を拡充し、地域に根ざした学習環境と進学支援体制を整備することが必要なのではないか

# カンボジアにおける結婚への意識について

生活科学部人間生活学科 4 年

丹野 里莉

## 調査テーマ

カンボジアにおける結婚への意識について

## 調査背景・目的

カンボジアには早婚・見合い婚といった結婚形態がある

日本と違う結婚の形態が、社会の中でどのように存在しているか  
女性や若者の人生にどのような影響を与えているのか

## 調査方法

インタビュー調査

## インタビュー内容

- カンボジアの結婚について
- 自分の結婚についての周囲の反応
- 自分の結婚観について
- 結婚相手に求めること
- 結婚後の性別役割について



## 調査結果

### ● カンボジアの結婚について

Q 何歳くらいで結婚する人が多いか？  
・女性20歳～、男性25歳～  
・田舎や少数民族では女性13歳～、男性15歳～  
・最近では学校を卒業することを優先することも  
・30歳～35歳は遅すぎるとの意識

Q 見合い結婚と恋愛結婚どちらが多いか？  
・現在は恋愛が多い  
・都会でも田舎でも恋愛が多い傾向  
・（体感で）恋愛結婚が7割、お見合いが3割  
・（現学生の）両親は見合い結婚だった

### ● 自分の結婚について周囲からの反応

Q あなたが結婚しなければ周りでは何ていうか？  
・親は心配する  
・周りに「何か問題があるんじゃない？」  
・親にも何も言われない  
・性格や家族が悪いのかな？と思われる

Q 早く結婚しろと言われることはあるか？  
・10歳の時から言われていた  
・祖父母が心配する  
・1人の期間が長ければ、お見合いを用意される

## 調査結果

### ● 自分の結婚観について

Q 結婚は必要だと思うか？（Aさん・男性）  
A 必要ではないと思う。  
結婚すると責任が重くなる。  
家族や子供を養わなければいけないので  
貯金をしてから結婚すると思う。

Q 結婚は必要だと思うか？（Bさん・女性）  
A 文化として大事なことだと思う。  
失われた時代の記憶を、子供たちに継承  
する必要がある。

Q 結婚は必要だと思うか？（Cさん・男性）  
A 必要だと思う。  
カンボジアには老人ホームがなく、家族が  
家族の面倒を見る。自分が高齢になった時  
のために、家族を作るのは必要だと思う。

Q 結婚は必要だと思うか？（Dさん・女性）  
A 必要だと思う。  
仕事を共にすることのために必要。  
子供を持つことも必要だから。

## 調査結果

### ● 結婚相手に求めること

Q 結婚相手に求めることは？  
・本当に愛していること  
・本当に愛していればなんでもいい（by男性）  
・本当に愛に加えて、仕事をしていることや  
自立していること（by女性）



### ● 結婚後の性別役割について

Q 結婚後に夫婦の役割はどうなるか？  
・男性も積極的に家事に参加している  
・男性が家事をすると馬鹿にする文化もあった  
・男性は10%くらいしか家事をしないと思う  
・女性1人で家事育児を行う家庭も存在

Q 妻が仕事を続けることについてどう思うか？  
・女性も働き続けられる社会になってきている  
・共働きはまだ普通のことにはなっていない  
・両親がいれば、共働きすることもある  
・専業主夫は減多にないが、変わってきている

## 考察・まとめ

カンボジアの人の多くは結婚が大事なことだと  
考えていた

背景には、家族が家族の世話をする文化と  
老人ホームなどの公的サービスの未整備

結婚相手に求めることは「真実の愛」という回答が多い  
→学歴や収入などの条件にとらわれていない

結婚の年齢は日本の平均より早いものの、家庭内での  
性別役割の平等化が進んでいる





# カンボジアにおける 主権者教育の実態

文教育学部人間社会科学科4年

松尾 ひなの

調査テーマと背景

調査テーマ

カンボジアにおける主権者教育の実態

複数政党制・選挙→形式的には民主主義  
⇨実際は権威主義

- ・カンボジア人民党の一党優位の状態
- ・政治的自由は制限されている

人々は有権者としてどのような自覚があるのか？  
学校教育ではどのように教えられているのか？

カンボジアにおける主権者教育の実態

着目した  
観点

主権者教育とは？

▶ 国や社会の問題を自分の問題として捉え、  
自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者  
を育成していくこと

公民的知識

思考力の育成

人々の主体性

カンボジアにおける主権者教育の実態

調査結果①

①公民的知識

政治に関する制度や現状について学校で教わる機会はあるか？

- ◆ 小中高で歴史の授業はあるが公民の教科はない
- ◆ 歴史の授業ではポル・ポト時代も扱うが、カンボジア人がそんなことをするはずがないと信じない人も
- ◆ 学校で政治体制や憲法、法律、権利、選挙について習うことはない
- ◆ 友達と政治の話はしない・できない。他国が関係する話なら…
- ◆ 博物館や遺跡に行ったり僧侶から話を聞いたりすることはある
- ◆ 学校で教えるべき内容は？という質問に、公民の科目が挙がることはない

→政治の仕組みや現状、政治参加の方法は学校で教えない

カンボジアにおける主権者教育の実態

調査結果②

②思考力の育成

自分の意見を発表する・グループ活動をするなど、思考力や判断力を育むような授業はあるか？

- ◆ 自分の意見を発表することはほとんどない
- ◆ 子ども観の違いから、小学生は知識を得るだけで十分と考えられている
- ◆ 設備がないので理科の実験や部活動はできない
- ◆ チームワークやリーダーシップを育む授業がほとんどなかった
- ◆ ICTの授業では教え合い活動が発生することもある
- ◆ ICTの授業によって子どもがオープンマインドセットを持つように

→ほとんどなかったがICTの導入によって変わりは始めている

カンボジアにおける主権者教育の実態

調査結果③

③人々の主体性

自分の行動で自分の集団を変えられると思うか？人々のこれまでの歩みのどのような部分に主体的な選択が見られるか？

- ◆ 自分の組織や地域社会には影響を与えられると思うが、国は難しい
- ◆ 人や仕事に対する真摯な向き合い方が、工夫して仕事をするにつなっている
- ◆ 給料を上げるために仕事を変える人が多く、自ら行動して職業を選択している
- ◆ 親を早くに亡くしたり貧困状態にあったり、そうせざるを得ない状況の中で主体的に生きてきた
- ◆ 政治を変えたい、とは思えない

→必要性から主体性が育まれ、自ら人生を切り拓いている

カンボジアにおける主権者教育の実態

まとめ

公民的知識

社会科は歴史重視。  
学校では教わらない。  
選挙には参加。

思考力の育成

従来の学校は一斉教授  
が基本。発表や話し合  
いはほとんどない

人々の主体性

よりよい生活と  
仕事を求め、主体的に  
切り拓いている

- ◆ 権利を行使する意識、政治に民意を反映させたいという意識はあまりない
- ◆ 民主主義への期待＜＜道徳を守ることによる国の改善
- ◆ 人々は地域や所属集団のレベルでの課題解決には主体的であり自己有用感も高い

# ブータンの民族衣装をめぐる産業とアイデンティティー

生活科学部人間生活学科4年

鮫島 さくら子

## 01 テーマ設定

設定の背景 伝統衣装のゴ（男性用）・キラ（女性用）に関心



①着こなしの世代差 ②民族衣装産業の保護 ③流行の形成  
→伝統衣装を通じた文化の継承と変容のあり方を考察

## 02 設問設定

①着こなしの世代差	・ゴやキラを着る際にこだわっているポイントはあるか？ ・若い世代のゴ・キラの着方が気になることはあるか？ など
②民族衣装産業の保護	・政府や地域行政からの織物産業に対する支援はあるか？ ・ゴやキラをどのくらいの頻度で買い足すか？ など
③流行の形成	・流行りの着こなしを知る手段は何か？ ・流行りを抑えたらどのように自分の服装に落とし込むか？ など

## 03 調査結果（1）着こなしの世代差

	着こなしの観察	インタビューでの声
孫世代 （〜20代）	着崩れが激しいハーフキラを好む 靴・小物の選び方で個性を出す 義務がない場面では洋服の着用が多い	テグ（女性用のトップス）によって 要めるピンを使い分けている など
親世代 （30代〜40代）	ゴのひだを綺麗に出す丁寧な着方 義務がない場面ではトップスのみ洋服の 着用	手縫りの上質なものは見て分かる そのため縫製が壊れても直す など
祖母世代 （50代〜）	義務がなくてもフルキラの着用が多い	着崩れているためフルキラを選ぶが 若い世代のゴ・キラ離れは心配だが 仕方ないとも思う など

## 04 調査結果（2）民族衣装産業の保護

織物産業への公的支援	民族衣装の着用はブータン人の義務・実践が求められる文化 （織物産物店でのインタビューより） 国立織物博物館との契約により絹の仕入れが可能 ⇒売店で売れなかった商品を代わりに販売
国内の織物産業の体制	公教育での織物に関する実体験や知識の習得は数回や習熟など 他の文化習得と比較して低い傾向 ⇒家族として家庭での伝承が大きな役割 インド製の大量生産商品への対抗が課題
民族衣装の消費	（服飾店でのインタビューより） ゴ・キラの売り上げは好調が続いている →着用義務がある限り需要継続 特に若年層は行事の際にゴ・キラを新調すること多い

## 05 調査結果（3）流行の形成

情報の入手手段（インタビューより）

- ・ファッションに限らず、流行情報の主な入手先はSNS
- ・20代以上：tiktok
- ・学生：instagram

地方における購買行動（ガサでのインタビューより）

- ・欲しいデザインのテグ・キラがあっても、近隣の店舗がなく購入を諦めることが多い
- ・服を買う際はティンブーまで出向くことが多い



A現地調査時見たモデルのキラ（チカにて撮影）

→流行の実践はティンブーをはじめとする都市部に集中している可能性

## 06 まとめ

①着こなしの世代差	・日常生活において世代間で明確な差はあり ・一方で、正式な行事の場面では正しい着こなしが求められる
②民族衣装産業の保護	・着用義務の規定により需要は安定、若年層の購買行動も盛ん ・縫製手の確保・育成、インド製品への対抗に課題が残る
③流行の形成	・SNSの普及により情報の入手は簡単 ・実践ができる場合は都市部に限定されている

国家：着用義務・実践 → 伝統文化の保護 ⇄ 個人：表現・消費において柔軟に変化



# ブータンの若者の人生観と職業選択についての調査

生活科学部人間生活学科 4 年

皆川 響

## 01 研究背景と目的

ブータンは「国民総幸福量（GNH）」の理念のもと、精神的な豊かさや文化、環境を大切にしながら経済成長をめざしている。しかし、国内の雇用先が少ないため、若い世代の失業率が高く、同時に国内の低賃金や慢性的な貧困から、多くの若者が国外へ流出する現状が現れている。



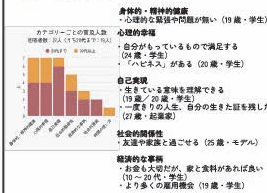
ブータンの海外流出（参考：National Statistics Bureau "2020 Labour Force Survey Report"）	
Q. 何が出来ているか？	A. 2020年以降、月間出国者数はコロナ前の10倍以上（5,000人/月）に急増。業種別では2020年から4年で倍増となり、主要な業種は、IT・観光・建設となっている。
Q. なぜ出てくるのか？	A. 雇用不足と経済的な不安定さの増加、海外での収入はブータン国内の約10倍。国内では十分な賃金が得られない（20%の主な動機）。海外への移住は、教育やスキル向上、家族の経済的な支援、結婚後の生活環境などとなっている。
Q. 海外の状況は？	A. 中級以上の職に就く者の50%以上が海外に。高学歴の若者が海外に多い傾向がある。海外での収入は国内の約10倍。海外での生活は、国内よりも安定している。

目的：GNHの理念下で、ブータンの若者にとっての人生観や経済的な成功の位置づけと、職業選択の際に重視する要素を明らかにし、人材流出の背景にある若者心理を探る。

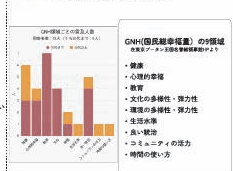
調査方法：インタビュー  
調査対象者：若年層（20代～30代、学生・社会人）中心、人材派遣会社

## 02 ①ブータンの若者は何を「良い人生」とするのか？

Q1-1 あなたにとって「良い人生」とはどんなものですか？



Q1-2 GNHの理念の9つの領域のうち、あなたが考える「良い人生」にとって重要だと感じるものをいくつか選んでください。

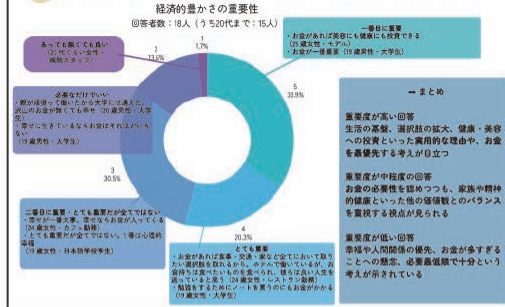


→注目

・若者は自己実現の欲求が高い傾向  
・Q1-2に対しては、3人の若者のうちそれぞれ4人が文化の多様性と良い統治に寄与している。日本だとこれほど多くはないのでは？

## 03 ②ブータンの若者は経済的成功を自身の中でどのように位置づけているか？

Q2 「良い人生」を送る上で、経済的な豊かさはどのくらい重要だと思いますか？



→まとめ  
経済的成功が高い回答  
生活の基盤、選択の拡大、健康・美容への投資といった実用的な理由や、お金を蓄積する考えが自立的

経済的成功が低い回答  
幸福や人間関係の優先、お金が多すぎることに懸念、必要最低限で十分という考えが示されている

## 04 ③ブータンの若者は職業選択の際に何を重視するか？

Q3 職業を選択する際に重視する／した要素は何ですか？



→まとめ

職業による違い  
学生層  
JICAスタッフ  
病院スタッフ  
モデル、起業家  
「夢のため」や「楽しく働く」を強く重視。特に日本語学校生は「収入」も重視する傾向。「キャリアアップ」を重視する傾向が他の職業よりも顕著。「社会的責任」と「収入」を重視する傾向。医療現場での役割と生活の安定を両立させたいという意識の表れが「楽しく働く」や「夢のため」、「社会的責任」といった、より個人の価値観や社会への影響を重視する傾向

年齢層による違い  
20代まで  
30代以上  
「夢のため」と「楽しく働く」を重視する傾向が強い。キャリアの初期段階で自己の情熱や興味を追求したいという意識の表れが顕著。現実的なキャリア形成や社会貢献を重視。特にJICAスタッフや病院スタッフなど、専門職に就いている人が多い年齢層で顕著

## 05 国外への人材派遣会社の目線は？

訪問先：Bhutan overseas Jinzai Private Limited

派遣先	派遣人数	特徴
日本	約30名	文化やアニメに興味がある人が行く
中国	約100名	労働に必要な条件が満たされた人数が多い
オーストラリア	6-7名	給料が高く、英語が通じるため人気

1. 若者の海外流出：経済的な動機が主  
国内の低賃金、民間企業は給料が低い、人気がない、就職先不足、毎年約2万人の大学卒者が生まれるとすると、公務員になれるのはわずか1,000人程度。価値観の変化、近年の若者はより高い給料を求め、貪欲になっている。給料が良ければ国内に残るとは考えられない。

2. 地位よりも「お金」  
エリート層の行動変容  
大学院を修了し、公務員として国内で地位を確立した人材でさえ、その職を辞め、オーストラリアでIT系の仕事を選んでいる事例がある。  
勤め、オーストラリアで高収入を得る方が、ブータンの国家公務員として働くよりも給料が高いため。  
→安定した社会的評価（地位）や安定性、スキル獲得よりも、経済的な報酬（給料）を優先する価値観が、ブータンのエリート層まで浸透していることを裏付ける。

3. 帰国・定着への支援体制  
企業支援  
Bhutan Overseas Jinzaiのような企業は、帰国後のキャリア相談などのサポートを実施。  
政府の役割  
出国時のオリエンテーション等から帰国まで、政府が関与する。

## 06 考察・結論

1. 経済的成功の「重視度」をめぐる多様な選択  
若者は、経済的成功を人生における「絶対的な目標」とするが、あるいは「充足的な基盤」とするによって、キャリアパスを選び取っていると考えられる。

2. 若者の自己実現欲求・愛国心  
・若者は、国外・国内の志向に関わらず、自己実現ができて「良い人生」になるだろうと考える傾向があり、職業選択の要因としても「楽しく働く」「夢のため」といった自己実現を求めるものを選ぶ傾向にあった。  
・「ブータンの社会への貢献」という問いに対し、「政府」や「国民」のためと明確に答える者がおり、愛国心がキャリア選択の基盤にあることが推察される。

結論  
現状、「国内の低賃金と海外の高賃金の差」をすぐに埋めることは難しい。そのため、政府は市場拡大や雇用に資金を上げるだけでなく、若者に対し、GNH政策のさらなる訴求と、国内で働くことの「付加価値」（例：安定したWLB、コミュニティの強さ等）＝非金銭的報酬を提供し、維持していくことに力を注ぐべきではないか。

### (3) 大学ウェブサイトでの報告

#### 【スタディツアー報告】

#### 2025 年度カンボジアスタディツアー実施報告

2025 年 8 月 21 日から 29 日にかけて、「国際共生社会論実習」の授業としてカンボジアスタディツアーに参加しました。5 名の学生が履修し、主権者教育・結婚観・国際支援の受け止められ方・高等教育アクセスの地方格差・ジェンダー平等などそれぞれの研究テーマを持ち、見学やインタビュー調査を実施しました。

プノンペン国際空港に降り立ち、プノンペンの街を車で移動した私たちは、プノンペンが想像以上に都会であることに驚きました。昔からある煌びやかな寺院のすぐ隣には外国資本の大きな建物が立ち並び、道路にはたくさんの車とトゥクトゥクが走り、その間をバイクがすり抜けていく。伝統と都会らしさの混ざった景色はとても新鮮で、人のにぎわいからもまさに今発展している国だということを実感しました。



プノンペンの街並み



プレア・ノロドム小学校にて

私たちはまず、日本人が運営する幼稚園を訪問しました。カンボジアでは小学校の校舎を借りて幼稚園を運営する形態が多く、日本の幼稚園のように園庭があったり遊びを重視したりしている幼稚園は珍しいそうです。子育てに関する正しい知識が十分でないため 4 歳程度まで粉ミルクを与えてしまうことがカンボジアではよくあるそうで、幼稚園の運営を通して保護者にも正しい知識を伝えたいというお話から、幼稚園のス

タッフの皆さんがいかにカンボジアの子どもたちを想っているかが伝わってきました。続いて訪れた公立小学校、プレア・ノロドム小学校では元気な子どもたちが私たちを取り囲んで話しかけてくれ、好奇心旺盛な様子で外国人である私たちに対してもあたたかく接してくれました。カンボジアの学校の授業は一斉教授で、教師の説明を子どもたちがひたすらメモをとるという形態ですが、子どもたちは学校が、授業が楽しいと溢れんばかりの笑顔で話してくれました。

私たちはトゥール・スレン虐殺博物館やアンコール・ワットも訪問しました。トゥール・スレン虐殺博物館ではガイドのブティさんがポル・ポト時代に実際に経験した話も聞かせていただき、苦労や困難という言葉では表せないほど壮絶な人生を生き抜き、過去に恨んだ人々も認め、赦しながら家族やつながりのある人を大切にしながら今を生きているカンボジア人の生の重みがひしひしと伝わってきました。アン



朝日に照らされたアンコール・ワット

コール・ワットは、ガイドさんの勧めで早朝に訪れました。朝日に照らされたアンコール・ワットは本当に美しく、空気も澄んでいて神聖な気持ちになりました。中に入ってみるとカンボジア人の精神の根本にある礼儀や親への敬いを感じました。ヒンドゥー教から仏教への移り変わりや、ポル・ポト時代に受けた宗教弾圧の痕跡も目の当たりにしました。そして、カンボジアの伝統舞踊であるアプサラ・ダンスも鑑賞し、派手ではないが優雅で緻密な踊りに魅了されました。伝統を絶やさないために伝統舞踊を再建し創ったアプサラ・ダンスを、観光客向けにディナーショーとして上演するという文化の紡ぎ方も興味深かったです。



NPO 法人テラ・ルネッサンスのみなさんとの昼食づくり

次に訪れたのは、バタンバンという、カンボジア第二の地方都市です。バタンバンでは認定 NPO 法人テラ・ルネッサンスが活動している農業訓練校に伺い、同世代の農業を学んでいる若者たちをインタビューし、一緒に料理もつくって食事をしました。TikTok を楽しんでいたりくだらないジョークで笑っていたり、私の料理が下手だとからかってきたり、カンボジアの若者たちも私たちと同じような部分もたくさん

あると感じました。一方で、高校をドロップアウトしてしまった、お金がなく大学に行けなかったという状況の中で農業を選択し、モチベーションの持ち方に苦労しつつも自分で仕事と生活を切り拓くために毎日学んでいる彼ら彼女らを見て、日本で私たちが将来の選択肢を幅広く持てることが決して当たり前ではないことで、ありがたいことだと改めて実感しました。農業訓練校の職員の方は、様々な仕事を経て今の仕事にたどり着いた方が多く、自分の仕事に誇りとやりがいを感じながら仕事を楽しみとして生活している姿が素敵



でした。その中でも特に私が感銘を受けた方がいます。彼女は仕事の中で自分が研修生に教えてはいるが研修生から学ぶことも多くあり、それを家族に話している時間が幸せであること、仕事はもちろん楽しいことばかりではなく大変なこともあるが、それを乗り越えていくことも含めて仕事は楽しいことを話してくれました。また、彼女は教育に関して、カンボジアの学校ではただ先生の話聞く一方通行の授業が行われていることに危機感を抱き、批判的思考を身に付けるような取り組みを学校で行うべきだと考えており、前向きでパワフルなマインド、そして彼女自身が批判的思考を持つことを絶やさない姿勢に、心惹かれました。

さらに、子どもと地域のためを考え先進的な取り組みをしている幼稚園でお話を聞いたり、家庭訪問をさせていただいてお母さんに話を聞いたり、シャンティ国際ボランティア会で現地スタッフとして働く同年齢の方に街を案内してもらったり、JICA カンボジア事務所で質問に答えていただいたり、ガイドのブティさんやドライバーのレッドさんと食事をしたり、カンボジアについてたくさん話を聞き、肌で感じ、学ぶことができました。

私はカンボジアの主権者教育をテーマに調査しました。政党は一党支配で政治に関する表現の自由が大きく制限されており、教育の場でも政治の仕組みや権利についてあまり扱っておらず、民主主義が十分に機能しているとは言えません。しかし、カンボジア人は自分の所属集団や地域に対して当事者意識が高く、自分は何かすることで集団がよりよくなるという認識をもっており、主体的に行動していました。インタビューを進めていく中でそれはポル・ポト政権の時代を必死に生き抜き、状況に迫られて獲得した主体性だということも出てきましたが、生活や社会をよりよくしようとする姿勢は今も続いています。若者に活気があり、未来を開拓していこうという力強さがあり、教育や仕事を通して社会がそれをサポートしようとしていることも分かりました。物資や機会に恵まれていなくとも、自分でチャンスを生み出し、掴もうとするカンボジアの人々の生き方、周囲の人をとっても大切にする姿勢は私も見習いたいです。

最後に、カンボジアを訪れて衝撃を受けたことが2つあります。一つは、国内の貧富の差です。立派な家のすぐ隣には手作りの家があり、子どもを習い事に通わせている家庭のすぐそばには子どもが仕事や家事を手伝っている家庭がありました。都会には大きなビルが立ち並び日本とあまり変わらない光景が広がっていますが、田舎では景色が変わり、店は壁のない路面店に代わり、物売りをしている子どもがいます。レストランのテラス席で食事していた際、野菜を買ってほしいと物売りの子どもに声をかけられ、私は無力感でいっぱいになりました。自分が今買うことで少しの稼ぎにはなるかもしれないが、そのせいでこの子が大人に搾取されるかもしれないし、この子の生活まるごとを助けるほどの力はも

もちろんないからです。欧米人とみられる男性が、お金は渡せないと手をはらいながら、野菜は買わない代わりに子どもに本を渡していた姿も印象的でした。家計が厳しかろうと児童労働は容認しない、働かずに学んでほしいというメッセージに思えました。二つ目は、自由の制限についてです。レストランや町中のいたるところに首相・前首相・首相の母親の写真が飾られており、政治についての質問はあまり答えてもらえなかったり、小聲で若者が政治については話せないよと教えてくれたり、政治への反対意見は言えないムードを肌で感じました。また、数カ月前のタイとの国境付近での紛争を経て兵士を崇めるような看板が町中にあったこと、来年から徴兵制を本格的に開始するという計画について「だれも反対していない」「もしかしたら嫌な人もいるかもしれない」という言葉を聞いたことは衝撃であり、このまま紛争が発展してしまうのではないかという恐ろしさを感じました。

カンボジアは、食べ物がおいしく、町並みは活気があり、人々があたたかい国でした。尊敬する生き方や考え方にもたくさん出会いました。実際に訪れ、話を聴くことで事前に抱いていたイメージは大きく変わることを知りました。カンボジアを訪れた今、カンボジアという国への漠然とした関心は、このスタディツアーで出会った一人ひとりの願いや目標が叶ってほしいという想いになりました。自分の目で見て耳で聴き、肌で感じること、様々な立場の人に話を聞き多角的に考えることをこれからも大切にしていきたいです。スタディツアーにご協力くださった皆様、誠にありがとうございました。

(文教育学部 4 年 松尾ひなの)



プレクノーレン幼稚園にて先生方にインタビュー



プレクノーレン幼稚園にて園児にインタビュー

(掲載 URL : <https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/j/menu/activity/a20250821.html>)

## 2025 年度ブータンスタディツアー実施報告

2025 年 9 月 15 日から 24 日にかけて、2025 年度「国際共生社会論実習」におけるブータンでの現地調査（スタディツアー）を実施しました。

現地調査に先立ち、6 月初旬から、ブータンの歴史や社会の現状についての事前学習を行い、各自で研究課題を設定しました。今年度の参加学生 2 名はそれぞれ「ブータンの若者の人生観と職業選択に

についての調査」、「ブータンの民族衣装をめぐる産業とアイデンティティ―若年層の着こなしと意識に着目して―」をテーマに挙げ、調査計画書やインタビュー項目を作成し、現地調査に向けた準備を進めました。

現地調査は、首都・ティンブーに 3 泊、遠隔地・ガサに 2 泊、国際空港があるパロに 2 泊する計 7 泊 8 日の行程で実施しました。



ブータン日本語学校での交流会



JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへのインタビュー

ティンブーでは、ブータン日本語学校および JICA ブータン事務所を訪問したほか、織物博物館（Royal Textile Museum）、著名な織り手が経営する織物販売店 Kelzang Handicraft、モティタン高等学校（Motithang Higher Secondary School）、株式会社ブータンオーバースーズ人材（Bhutan Overseas Jinzai Private Limited）、内務省文化・ゾンカ開発局

言語研究・振興課（Language Research & Promotion Division, Department of Culture and Dzongkha Development, Ministry of Home Affairs）、モデル・タレント事務所でファッション誌を刊行予定の Project Dragon 事務所を訪問し、それぞれでインタビュー調査を行いました。ティンブーに訪問先が集中していましたが、その合間には、タシチョ・ゾンやブータン屈指のローカルマーケットなどに赴き、チベット仏教への深い信仰や現地の人々の生活に触れる機会を得ることができました。

ティンブーから車で約7時間をかけて到着したガサでは、農家のご家庭で2泊ホームステイをさせていただきました。ブータンの家庭料理を振る舞っていたほか、飼育されている牛の搾乳体験などを通して、農村地域の生活を間近に感じることができました。また、ガサ温泉やガサ市内の商店へ赴き、現地の人々との交流を楽しみました。



織物販売店でのインタビュー

続いて訪れたパロでは、私立大学ノルブリン・ライター・カレッジ (Norbuling Rigter College)を訪問し、学内を案内してもらうとともに、学生へのインタビュー調査を実施しました。また、ガサからパロに向かう途中に私立小学校の学芸発表会を見学し、初等教育の現場に直接触れることができました。

設定した訪問先以外でも、現地で出会った人々にインタビューを依頼したり、会話のなかで関連する話題を聞いたりするなど、各自の研究課題に関する意見を幅広く収集しました。

ブータンで過ごした濃密な一週間は、現地で実際に触れる情報量が、日本で学ぶそれとは比べ物にならないことを教えてくれました。何より、その国に抱く親近感や気持ちの入りようが全く違いました。現地で目にしたブータンの人々の笑顔や、温かさ、そして文化や国内事情の面白さに触れ、今ではすっかりブータンファンの1人になってしまいました。



内務省でのインタビュー

研修中、引率の先生方に「異文化理解に必要なことは何か」と尋ねました。先生方は、「世界中に友達を作ること」「違いを楽しむこと」と答えてくださいました。ブータンでの経験を終えてみて、私たちはこれらの言葉に深く共感しました。コミュニケーションの仕方や文化に多少の違いがあっても驚きましたが、ブータンで出会ったたくさんの人々の笑顔や親切を思い出す

と今も心が温かくなります。実際にブータンに行ったからこそ、ブータンを少しでも理解し、好きになれたのだと思います。

今回の経験から、異文化理解における「知りたい」という気持ちの重要性を再確認することができました。私たちは研修前からブータンに多少の興味があったために、知りたいという気持ちを持って現地に渡航することができました。しかし、興味が強くない場合、どうすれば相手を知りたいと思う気持ちを育てられるのでしょうか。

ブータンで出会った多くの人々は、ブータンに興味を持って積極的に文化を理解しようとする外国人を歓迎しているようでした。しかし、異文化理解は常に双方向で、簡単ではないことも学びました。現地の人との会話で、ブータン人が隣国のインド人に対して「行儀が悪い」「指示に従わない」といった不満を漏らす場面にも遭遇しました。

近年、日本でも外国籍の住民が増え、街中で多様な人々を見かけるようになりました。移民に関する問題が言及されることも増えてきましたが、私たちは、すれ違いの原因かもしれない「違い」を知ろうとすることができているのでしょうか。

今回の研修は、ブータンと日本の比較を通して、私たち自身の、異文化理解への姿勢を深く見つめ直すきっかけとなりました。今後も、今回の研修で得た学びを胸に、身の回りの様々な文化や価値観を理解する努力を続けていきたいと考えています。

(生活科学部 4 年 鮫島さくら子、皆川響)



ホームステイ先でのインタビュー



乳搾りのお手伝い

(掲載 URL : <https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/j/menu/activity/a20250915.html>)

#### 【徽音祭実施報告】

海外実習科目「国際共生社会論実習」成果発表（第 76 回徽音祭学術企画）



お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、全学共通科目として、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGsに関する理解を深める目的で、海外実習科目「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」を毎年開講しています（今年度は「国際共生社会論実習」のみ）。



展示の様子（学生によるポスター説明）

2025年度は、8月21日から29日にかけてカンボジア現地調査（スタディツアー）を、9月15日から24日にかけてブータン現地調査（スタディツアー）を実施しました。

11月8～9日のお茶大大学祭「第76回徽音祭」では、学術企画、そして、この海外実習科目の事後学習の一環として、スタディツアーに参加した学生（履修生）による調査成果発表や展示が行われました。以下は発表・展示を行った学生による報告です。

#### 徽音祭発表（ブータン）



発表の様子

11月8日、同日に開催された徽音祭にて、「国際共生社会論実習」の一環として行われたブータンスタディツアーへの参加学生2名より、調査研究の成果発表を実施いたしました。

発表では、本スタディツアーの概要および、各自が現地で取り組んだ調査テーマについて、写真やエピソードを交えながら報告しました。

また、なかなか馴染みの薄い国であるブータンについて、地理的な特徴や文化的背景、社会制度に加え、国民全体の幸福を大切にする国策「GNH（国民総幸福量）」の理念についてもご紹介しました。あわせて、参加者の皆さまにも「自分にとっての幸福とは何か」を考えていただく参加型GNHワークを実施し、短い時間ながらも皆さまからのご意見や気づきを共有していただくことができました。皆さまの温かいご協力もあり、学生にとっても非常に実りのある学びの時間となりました。

さらに今回は、スタディツアーで交流した現地の大学生にもオンラインで特別出演いただき、ゾンカ語ミニ講座を実施しました。簡単な挨拶や日常のフレーズを紹介してもらい、ブータンの言語文化に触れられる貴重な時間となりました。会場からも積極的に反応をいただき、終始あたたかく和やかな雰囲気にも包まれた講座となりました。

限られた時間ではありましたが、6月からの事前学習を含め5か月間の学びや気づきを可能な限り盛り込んだ、非常に内容の濃い発表となりました。当日ご来場いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。



参加型 GNH ワークを実施

微音祭での発表が本スタディツアーの集大成となりましたが、参加する機会をいただけたことで、ブータンという国の魅力に深く触れることができました。現地調査を通じて、人々のあたたかさや文化への誇りを肌で感じ、その豊かさを多くの方に知っていただきたいという思いが一層強いものとなりました。また、現地で出会えた皆さんとのご縁をこれからも大切に、今後も国際交流に対して前向きな姿勢で居続けたいと思います。ご参加・ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

(生活科学部人間生活学科4年 鮫島さくら子)

### 微音祭発表（カンボジア）



発表の様子

11月9日(日曜日)、共通講義棟1号館402号室にて、今年8月21日から29日にかけて実施された「国際共生社会論実習」に参加した学生5名が、調査研究の成果を発表しました。また、同棟403号室ではポスター展示も行いました。

発表内容は、カンボジアにおける主権者教育、結婚観、高等教育へのアクセスにおける地域・ジェンダー格差、海外からの支援、カンボジア社会とジェンダーなどについて、現地で実施したインタビュー調査をもとに考察したものです。現地でのインタビューは難しい場面もありましたが、全員が自分の調査結果を堂々と発表する姿を見て、現地調査を頑張ってよかったと改めて感じました。また、発表を通じて自らの調査内容や結果を見直す機会にもなり、自分の考えをさらに深めることができましたと思います。

当日は現地で通訳を担当してくださったブティさんもオンラインで発表を聞いてくださいました。久しぶりにお話しすることができて私たち自身もとても嬉しく、楽しい時間となりました。



通訳のブティさんと

発表の際には、現地で訪問した幼稚園のスタッフの方からいただき

たカンボジアの伝統的な布「クロマー」を身に着けて登壇しました。さらに、カンボジアの市場で購入した巻きズボンの着方を披露したり、スタディツアーの写真をまとめたアルバムを展示したりすることで、ご来場の皆様にカンボジアの文化や魅力をより身近に感じていただけたと思います。カンボジアにはまだまだ多くの魅力があるので、ご来場くださった方々が少しでも関心を持ってくださっていれば嬉しいです。

事前学習から今回の発表まで、約半年間にわたり履修生 5 人と先生で共にカンボジアについて学んできました。渡航前は国境での紛争問題もあり、正直なところ不安の方が大きかったのですが、頼れる仲間存在と私たちを支えてくださる先生のおかげで、最後まで充実した時間を過ごすことができました。仲間と共に議論し、学び、考えを深めたこの期間は、私の人生にとって非常に貴重な経験となりました。今回の経験や学び、そしてカンボジアへの関心をこれからも大切にし、新たな学びへとつなげていきたいと思っています。

(生活科学部 2 年 奥みなみ)

(掲載 URL : <https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/j/menu/activity/a20251109.html>)

## 4. 資料



## (1) 募集要項

※お茶の水女子大学シラバスより抜粋。

科目名	国際共生社会論実習 国際共生社会論フィールド実習
科目区分・科目種	全学共通科目 共通科目（前期課程）修了要件外
クラス	全学科 博士課程共通
単位数	2.0 単位
履修年次	1～4 年 博士前期課程
担当教員	平山 雄大 宮原 千絵
学期	通不定期
受講条件・その他注意	<p>履修希望者向け説明会（4 月 22 日、23 日開催）の後、履修希望者が提出する語学試験の成績や小論文を総合的に審査し履修生を決定します。</p> <p>事前学習（6～7 月）、現地調査（8 月もしくは 9 月、8 日間程度）、事後学習（10～11 月）への参加が必須です。現地調査のみの参加は認められません。</p> <p>現地調査の訪問国はカンボジア、ブータン（申請時にどちらかを選択）を予定していますが、先方国の事情等によって変更になる場合があります。</p>
授業の形態	講義／実習・実技
主題と目標	<p>■概要（主題）</p> <p>本科目は、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGs に関する理解を深めることを目的に実施する実習科目である。</p> <p>履修生は、開発途上国における研究・国際協力の実績を有する担当教員の指導のもとで、①事前学習（6～7 月）、②現地調査（8 月もしくは 9 月、8 日間程度／訪問国はカンボジア、ブータンを予定）、③事後学習（10～11 月）を行い、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深める。</p> <p>具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。②現地調査では、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮</p>

	<p>らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する（国際共生社会実現へのヒントを見つける）。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、微音祭での発表を通してその成果を外部へ発信する。</p> <p>■到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 漠然とした興味関心・問題意識を、学術的な研究課題として組み立てまとめる力を身につける。</li> <li>2. 現地調査の計画及び実践を通して、調査技法を身につける。</li> <li>3. 現地調査（特にインタビューの実践）を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させる。</li> <li>4. プログラムを通して得た学びを、さらなる学習・研究や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア等）に繋げる。</li> </ol>
授業計画	<p>【①事前学習】（6～7月）</p> <p>資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。</p> <p>【②現地調査】（8月もしくは9月、8日間程度）</p> <p>計画に基づいて現地調査を実施し、履修生各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する。</p> <p>【③事後学習】（10～11月）</p> <p>現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、微音祭での発表（11月9日 or 10日）を通してその成果を外部へ発信する。</p> <p>◆スケジュール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・履修希望者向け説明会（4月22日（火）12:30-13:00、4月23日（水）12:30-13:00）</li> <li>・場所は共通講義棟2号館101教室。</li> </ul> <p>両日同じ内容について説明する（前年度履修生からの概要報告も実施予定）。履修希望者はどちらかに参加すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・選考（5月中旬～下旬）</li> </ul>





	7月 8日 (火) 10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 7月 15日 (火) 10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上
海外安全講習会 (出発直前打合せ)	8月 5日 (火) 10:40～12:10 グローバル協力センター 9月 11日 (木) 13:20～14:50 同上
現地調査	8月 21日 (木) ～29日 (金) (カンボジア) 9月 15日 (月) ～24日 (水) (ブータン)
事後学習	■カンボジア 10月 2日 (金) 15:00～16:30 グローバル協力センター 10月 9日 (金) 15:00～16:30 同上 10月 16日 (金) 15:00～16:30 同上 10月 23日 (金) 15:00～16:30 同上 ■ブータン 10月 7日 (火) 13:20～14:50 グローバル協力センター 10月 14日 (火) 13:20～14:50 同上 10月 21日 (火) 13:20～14:50 同上 10月 28日 (火) 13:20～14:50 同上
訪問記録提出締切	9月 22日 (月) (カンボジア) 9月 30日 (火) (ブータン)
微音祭ポスター提出 締切	10月 26日 (日)
調査報告書提出締切	10月 28日 (火)
微音祭での発表	11月 8日 (土) 11:30～12:00 (ブータン) 11月 9日 (日) 13:30～14:30 (カンボジア)
調査報告書(修正 版)提出締切	11月 28日 (金)

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和 7（2025）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（カンボジア、ブータン）実施報告書

2026 年 1 月

発行：お茶の水女子大学グローバル協力センター

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax：03-5978-5546

E-mail：info-cwed@cc.ocha.ac.jp

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

令和7（2025）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（カンボジア、ブータン）実施報告書



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University